

平成27年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

平成27年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

小学校第6学年及び中学校第3学年

(3) 調査の内容

教科に関する調査(国語、算数・数学、理科)

生活習慣や学習環境等に関する児童生徒質問紙調査

学校の教育活動や教育課程に関する学校質問紙調査

(4) 調査実施日

平成27年 4月21日(火)

(5) 調査実施学校数及び児童生徒数

小学校16校 889名 中学校8校 843名 (北進小中学校を除く市内全校)

2. 結果の概要

小学校

国語A(主として「知識」に関する問題)、国語B(主として「活用」に関する問題)、算数A(主として「知識」に関する問題)、算数B(主として「活用」に関する問題)、理科(主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う)の5種類の調査を行った。

国語A・算数Aについては、全国とほぼ同じ水準で推移している。算数Bについては、全国との差を縮めた。国語Bと理科については、差がやや広がった。

中学校

国語A(主として「知識」に関する問題)、国語B(主として「活用」に関する問題)、数学A(主として「知識」に関する問題)、数学B(主として「活用」に関する問題)、理科(主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う)の5種類の調査を行った。

国語A・Bは、全国と同様の水準で推移している。数学A・Bは、全国との差を縮められていない。理科については、全国を上回った。

3. 学力調査の結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	… 7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	… -1ポイント以下 - 3ポイント未満
高い	… 5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	… -3ポイント以下 - 5ポイント未満
やや高い	… 3ポイント以上5ポイント未満	低い	… -5ポイント以下 - 7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	… 1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	… -7ポイント以下
同様	… ±1ポイント		

小学校教科全体

小学校教科全体		国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	理 科
平均正答数	千歳市	9.6問/14問	5.4問/9問	11.6問/16問	5.4問/13問	13.8問/24問
	全 道	9.5問/14問	5.7問/9問	11.6問/16問	5.5問/13問	14.2問/24問
	全 国	9.8問/14問	5.9問/9問	12.0問/16問	5.9問/13問	14.6問/24問
平均正答率	千歳市	68.7%	60.3%	72.5%	41.8%	57.5%
	全 道	68.1%	63.0%	72.3%	42.5%	59.3%
	全 国	70.0%	65.4%	75.2%	45.0%	60.8%
全道との比較		同様	ほぼ同様 (下位)	同様	同様	ほぼ同様 (下位)
全国との比較		ほぼ同様 (下位)	低い	ほぼ同様 (下位)	やや低い	やや低い

国語A・算数Aについては全国とほぼ同様。国語Bは低く、算数B・理科については全国よりやや低い。

平均正答率について、国語Aは1.3ポイント、算数Aは2.7ポイント全国を下回ったが、差は僅かであり、この2教科については昨年から全国とほぼ同じ水準で推移している。国語Bは5.1ポイント、理科は3.3ポイント全国を下回り、その差がやや広がった。算数Bについては、差を1.4ポイント縮めた。

国語A・算数Aは全国水準で推移しており、各学校での基礎的な学力の向上に向けた取組の成果が見られる。一方、国語科・算数科ともに活用力の育成に依然として課題が見られる。理科については、3年前の結果と同様、差が縮まっておらず、今後も指導の在り方について工夫を図る必要がある。

中学校教科全体

中学校教科全体		国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	理 科
平均正答数	千歳市	24.7問/33問	5.8問/9問	21.9問/36問	5.6問/15問	13.5問/25問
	全 道	25.0問/33問	5.9問/9問	22.7問/36問	6.0問/15問	13.3問/25問
	全 国	25.0問/33問	5.9問/9問	23.2問/36問	6.2問/15問	13.3問/25問
平均正答率	千歳市	74.9%	64.8%	60.9%	37.3%	54.1%
	全 道	75.8%	65.7%	63.0%	39.7%	53.3%
	全 国	75.8%	65.8%	64.4%	41.6%	53.0%
全道との比較		同様	同様	ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	同様
全国との比較		同様	同様	やや低い	やや低い	ほぼ同様 (上位)

国語A・Bについては全国と同様。数学A・Bはやや低く、理科については全国を上回った。

平均正答率について、国語Aは0.9ポイント、国語Bは1.0ポイント全国を下回ったが、その差はごく僅かであり、国語科については一昨年から全国と同様の水準で推移している。数学Aは3.5ポイント、数学Bは4.3ポイント全国を下回り、その差が縮められていない。

理科は、全国を1.1ポイント上回り、3年前に実施された結果に引き続き、全国と同様の水準で推移している。

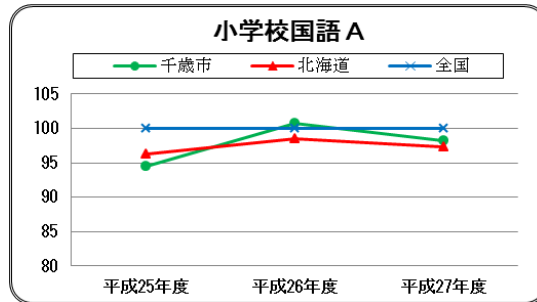
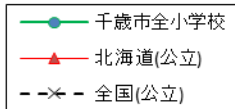
国語科と理科については、全国と同様の結果となり各学校での取組の成果が見られる。一方、数学科は、基礎的な学力とともに活用に関する問題でも差が縮まっておらず、小学校との連携を含め、今後も指導の在り方について工夫を図る必要がある。

4. 教科・領域別の結果

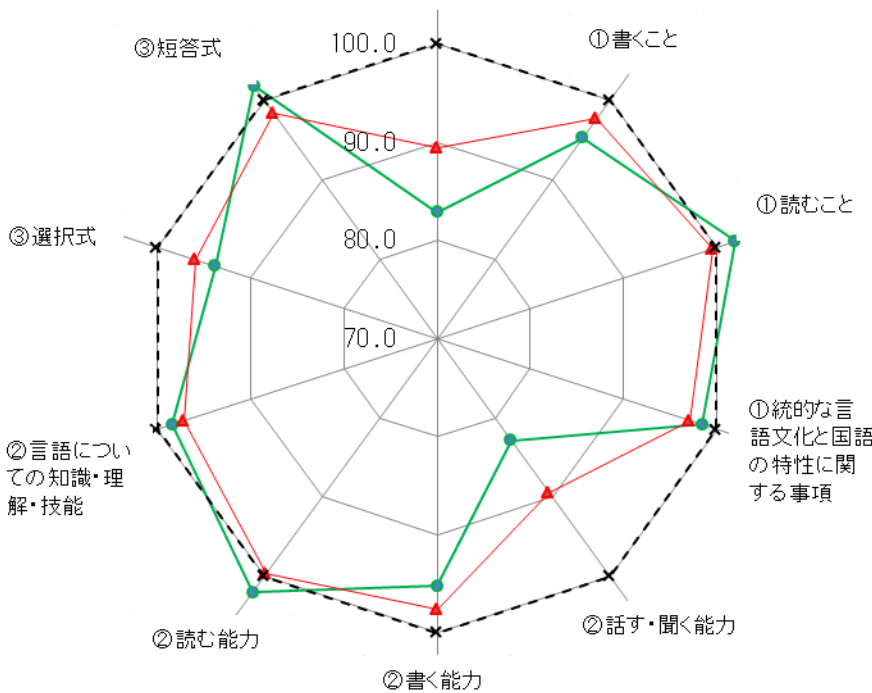
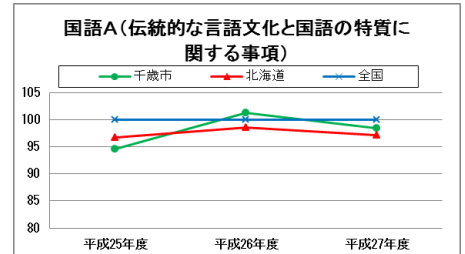
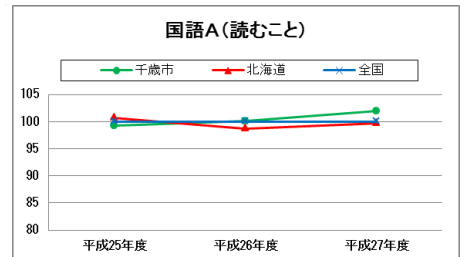
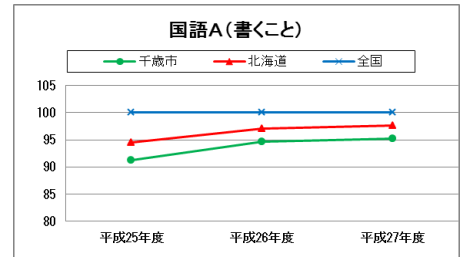
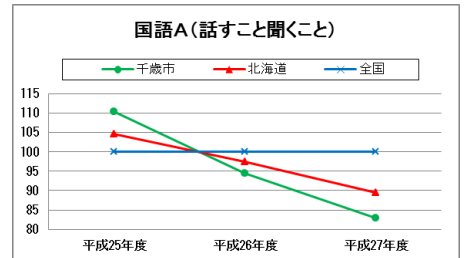
4. 教科・領域別の結果、5. 児童生徒質問紙の結果については、全国との比較を容易にするため、使用する数値を全国平均を100とした指数を用いて分析している。

【レーダーチャートの各項目について】「」は学習指導要領の項目 「」は評価の観点 「」は問題形式

小学校国語A



① 話すこと・聞くこと



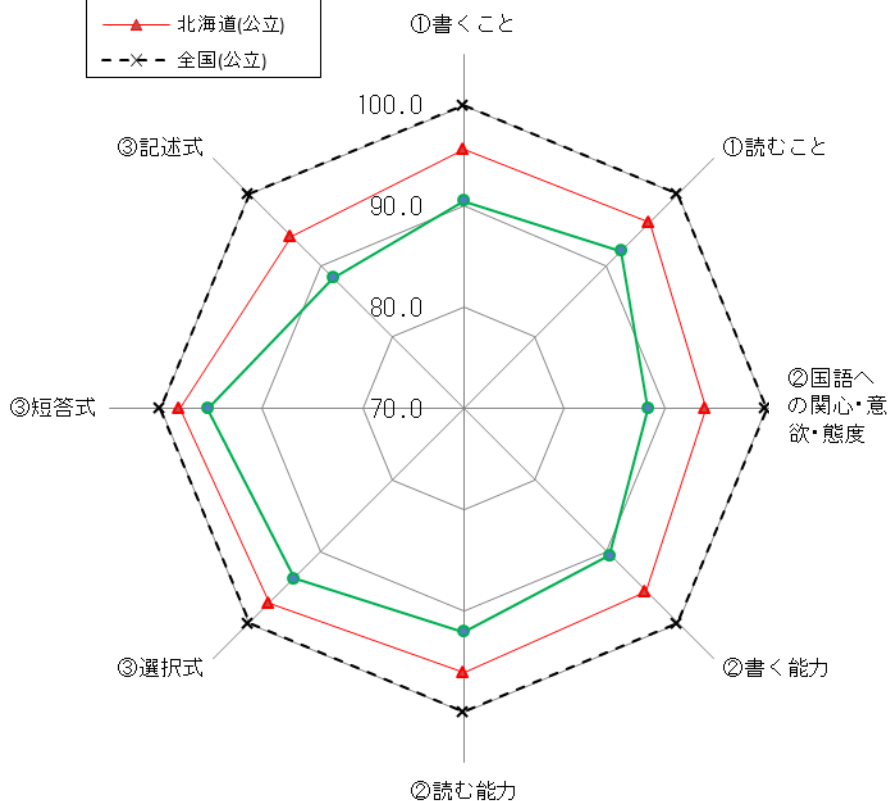
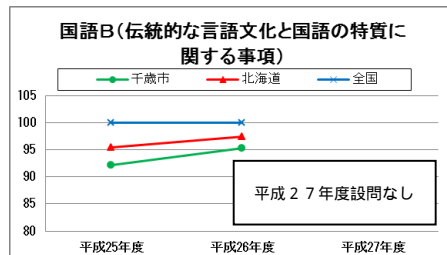
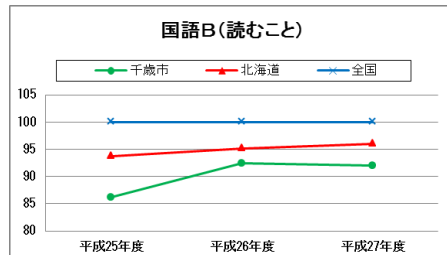
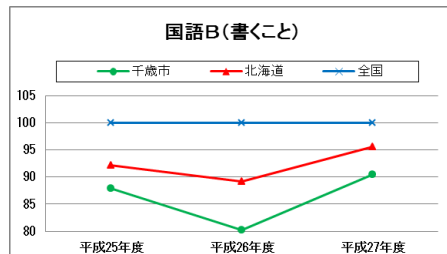
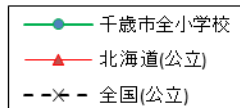
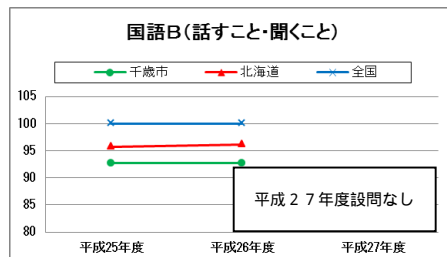
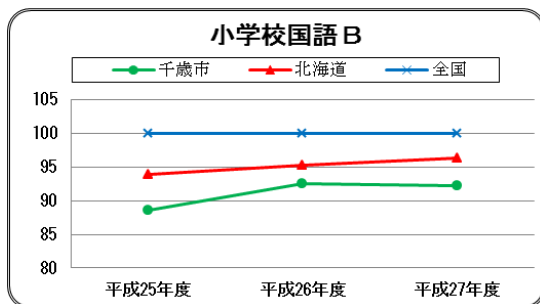
国語A (主として「知識」に関する問題)		平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	94.4	100.7	98.1
	全道	96.3	98.5	97.3
	全国	100	100	100

「読むこと」は全国を上回り、「書くこと」も全国との差が縮小した。「話すこと・聞くこと」については、低下傾向が見られ、全国との差が広がった。

学習指導要領の各領域の結果については、「読むこと」が全国を2.0ポイント上回り、「書くこと」も前年度を0.5ポイント上回り、全国との差が縮まった。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、前年度を2.8ポイント下回ったが全国と同水準を維持している。「話すこと・聞くこと」については、低下傾向が見られ、全国との差が広がっている。評価の観点については、各領域の結果と同様となっている。問題形式については、漢字の読み、書きに代表される短答式の問題の正答率は全国を上回ったが、選択式の問題の正答率は全国を下回った。このような状況から、「話す・聞く能力」の向上を図ることが緊要な課題と捉えることができる。

今後、話の目的や意図に応じて事柄が明確に伝わるよう話の構成を工夫したり、目的に応じて話を聞き、自分とかわかりを持たせながら聞いたりすることができるよう、話すこと、聞くことの機会を意図的・計画的に設定して指導していく必要がある。

小学校国語B



国語B(主として「活用」に関する問題)		平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	88.7	92.6	92.2
	全道	93.9	95.3	96.3
	全国	100	100	100

「書くこと」「読むこと」ともに全国を下回ったが、「書くこと」は前年度を上回り、全国との差が縮まった。

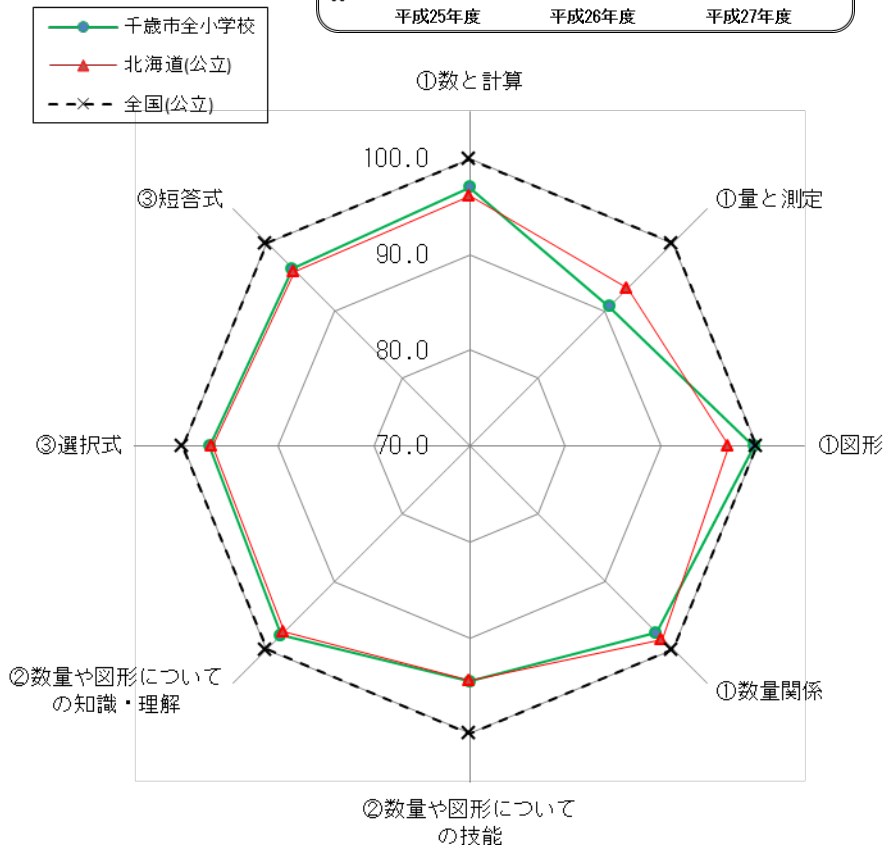
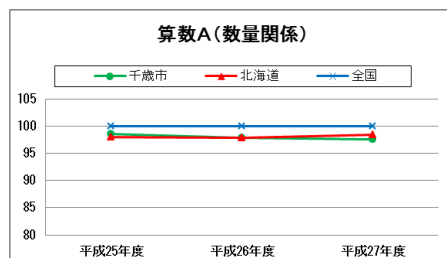
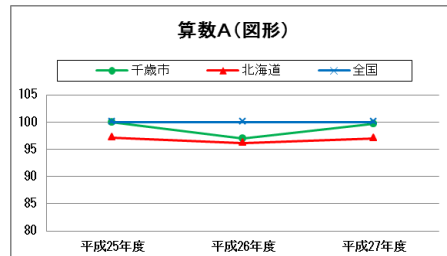
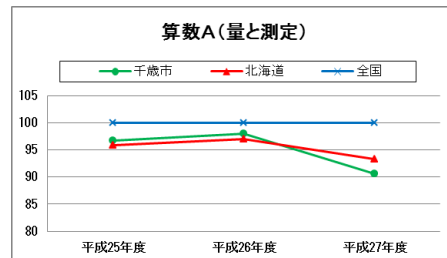
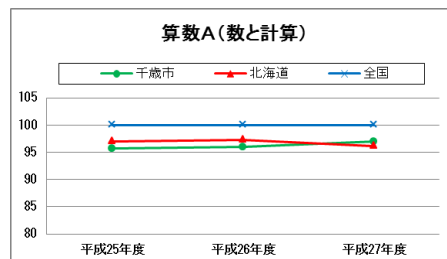
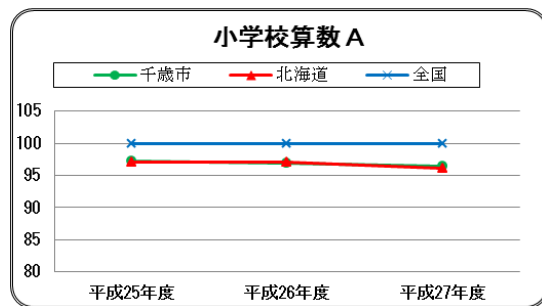
学習指導要領の各領域の結果については、「書くこと」「読むこと」ともに全国を下回ったが、「書くこと」は前年度を上回り、全国との差が縮まった。

評価の観点については、3つの観点すべてにおいて全国を下回り、特に「国語への関心・意欲・態度」が低い状況が見られる。問題形式については、「文章と図とを関連付けて、自分の考えを書く」「目的や意図に応じ、取材した内容を記事に書く」などの記述式の問題の正答率が全国を大きく下回っている。

このような状況から、目的に応じ、文章と図を関連付けて読んだり、自分の考えを書いたりする能力の向上が重要な課題と捉えることができる。

今後、新聞のコラムなどを活用し、様々な文や文章を読み、中心となる語や文を捉えさせたり、自分の考えを書いたりすることができるなど、「読む能力」と「書く能力」を一体的に高めていく指導を工夫する必要がある。

小学校算数A



算数A(主として「知識」に関する問題)		平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	97.2	96.9	96.4
	全道	97.0	97.1	96.1
	全国	100	100	100

「数と計算」領域については緩やかに上昇し、「図形」領域についても全国との差がなくなった。

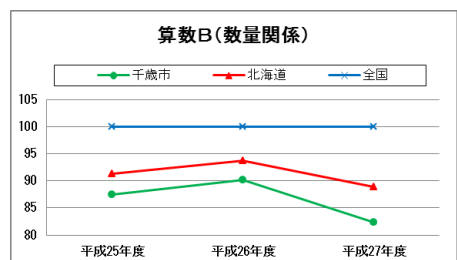
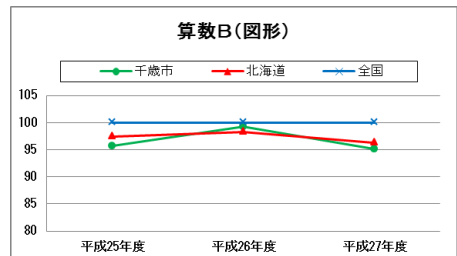
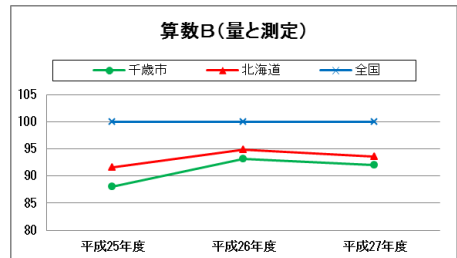
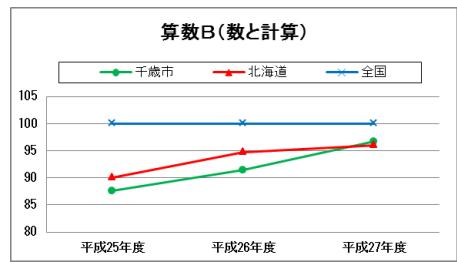
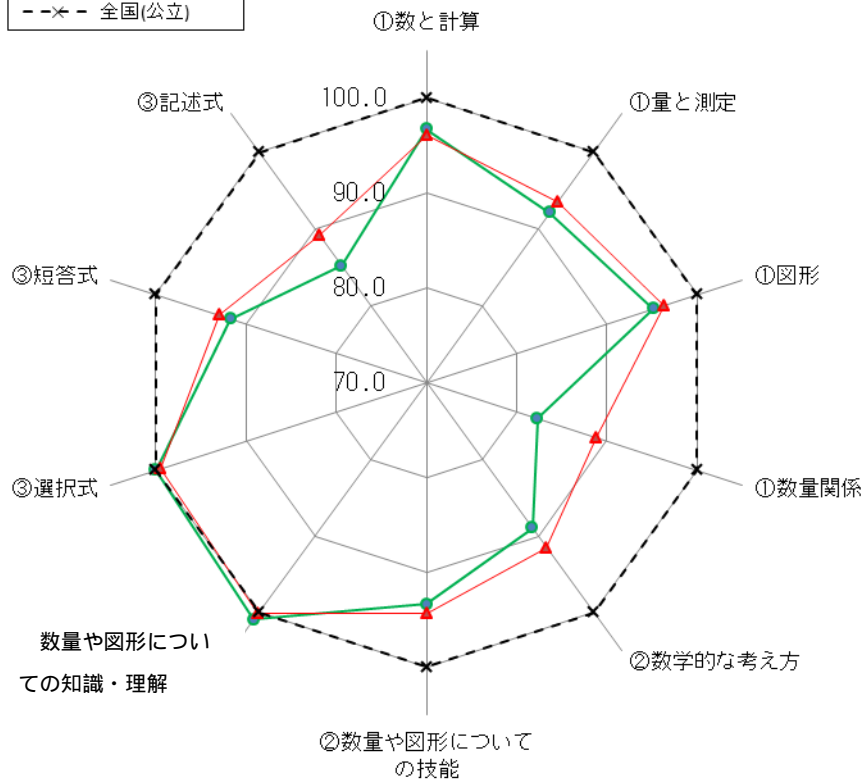
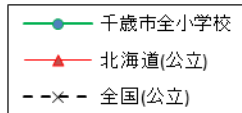
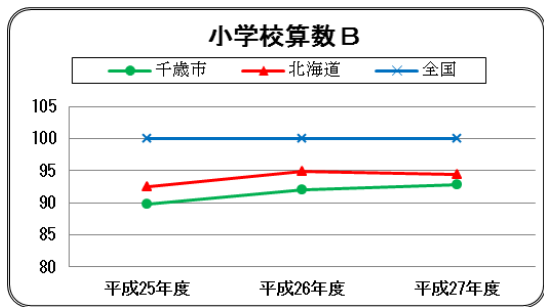
学習指導要領の各領域の結果については、「数と計算」は、ここ3年間ゆるやかに上昇している。「量と測定」は、分度器による測定の正答率が低かったことが影響し、前年度を下回った。「図形」は、前年度を上回り全国と同水準であった。「数量関係」は、「数と計算」と同様に3年間大きな変化は見られない。評価の観点については、「数量や図形についての知識・理解」は、全国との差は少ないが、「数量や図形についての技能」は、全国を下回った。

問題形式については、選択式、短答式ともに、全国との差は4.0ポイント以内であった。

このような状況から、「量と測定」領域の長さ、面積、体積、時間、重さ、角の大きさ、速さなどを測定する技能の向上が課題と捉えることができる。

今後、日常の事象と関連付けながら、測定結果の見当を付け、測定する能力を育てたり、適切な単位や計器を選び、正しく測定できる技能を高めたりしていくことが必要である。

小学校算数B



算数B(主として「活用」に関する問題)		平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	89.7	92.1	92.9
	北海道	92.5	94.8	94.4
	全国	100	100	100

「数と計算」は3年連続上昇している。「数量関係」は全国との差が広がっている。

学習指導要領の各領域の結果については、「数と計算」は、前年度、91.5ポイントであったが、今年度は96.7ポイントと全国との差が縮まった。一方、「図形」「数量関係」は、前年度を下回った。「量と測定」は、大きな変化は見られない。

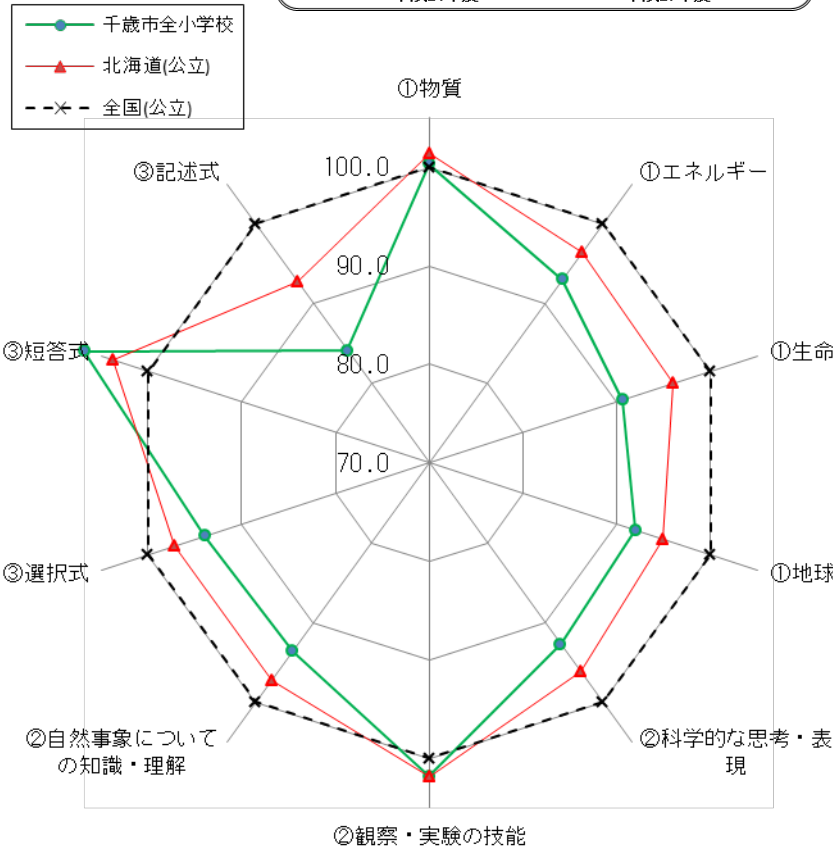
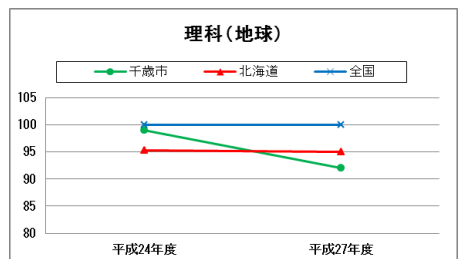
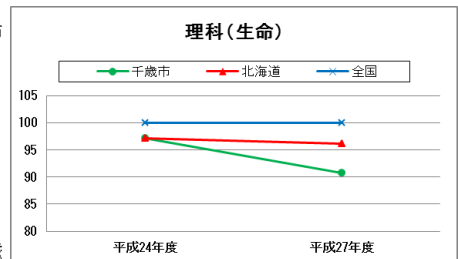
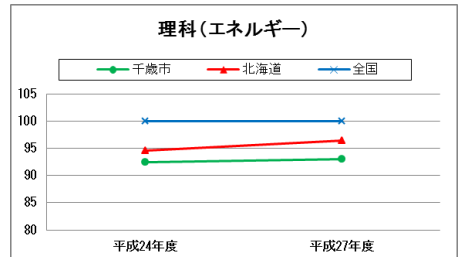
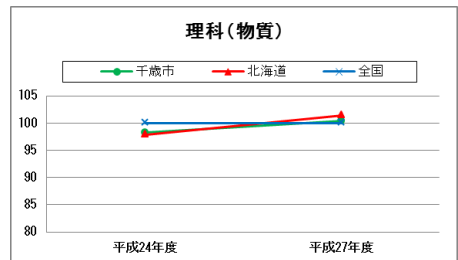
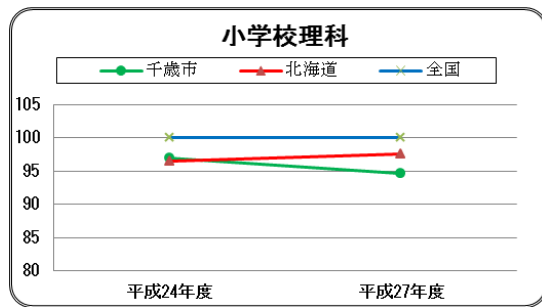
評価の観点については、「数量や図形についての知識・理解」は全国を上回っており、「数量や図形についての技能」「数学的な考え方」は、全国との差が縮まっていない。

問題形式については、記述式の問題を苦手としている状況が見られる。

このような状況から、筋道立てて考え、自分の考えを数や式、言葉や記号を使って数学的に表現する能力の向上が課題と捉えることができる。

今後、解決の方法を考え説明したり発表したりする算数的活動を通して、数学的な思考力・表現力を高めていくとともに、ノート指導の充実を図り、自分の考えを式や表、言葉や記号を使って書く能力を高めていくことが必要である。

小学校理科



理科 (「知識」「活用」に関する問題)		平成24年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	96.9	94.6
	北海道	96.6	97.5
	全国	100	100

「物質」に関しては全国を上回った。その他の区分では全国を下回った。

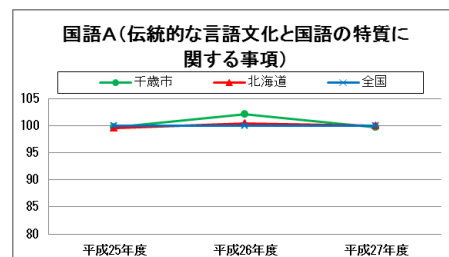
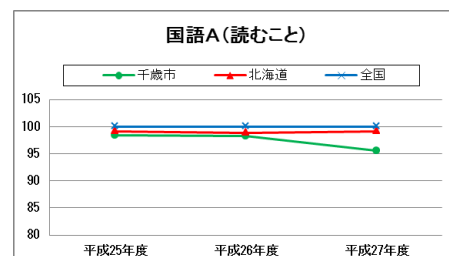
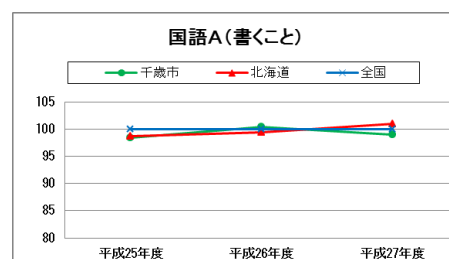
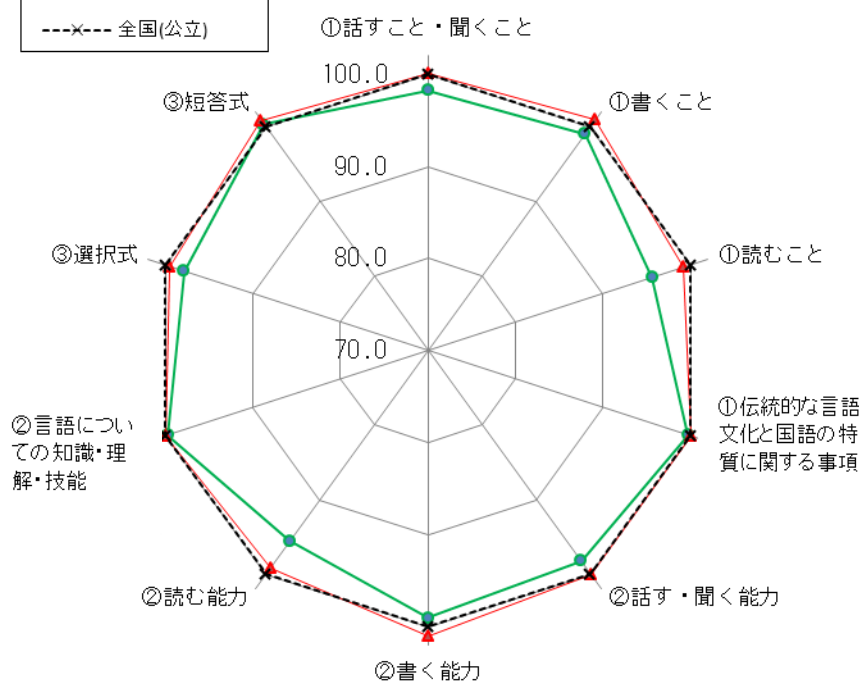
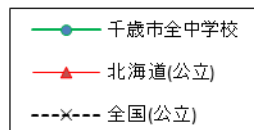
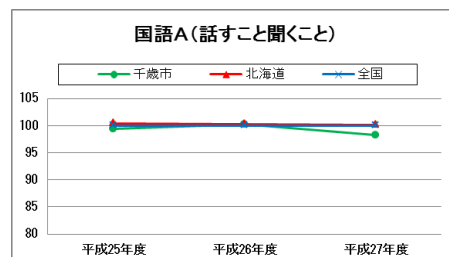
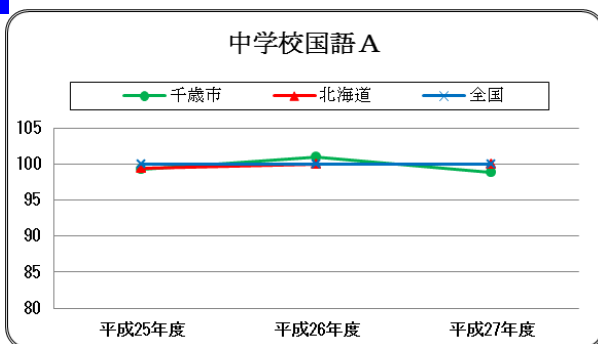
学習指導要領の各区分の結果については、「物質」は、0.3ポイント全国を上回った。一方、「エネルギー」は7.0ポイント、「生命」は9.3ポイント、「地球」は8.0ポイント、全国を下回った。

評価の観点については、「観察・実験の技能」は全国を上回ったが、「自然事象についての知識・理解」「科学的な思考・表現」は、全国を下回った。

問題の形式については、短答式の問題の正答率は全国を上回ったが、記述式の問題の正答率は全国を大きく下回り、選択式の問題の正答率も全国を下回った。

今後、理科において、「観察・実験のデータを分析し、根拠や理由を示しながら自分の考えを記述する」「自然の性質や規則性を適応してものづくりができるようにする」「興味・関心や目的意識をもって飼育し観察する」「対象や目的に応じて観察器具を適切に操作できる」など、科学的な認識の定着を図り、科学的な見方や考え方を養うための指導を工夫していく必要がある。

中学校国語 A



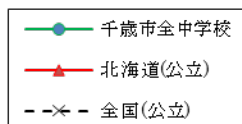
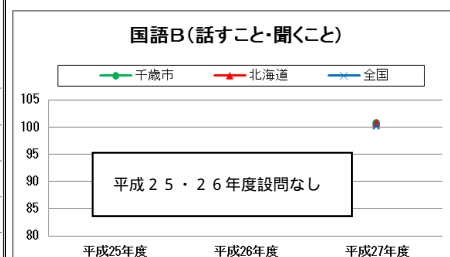
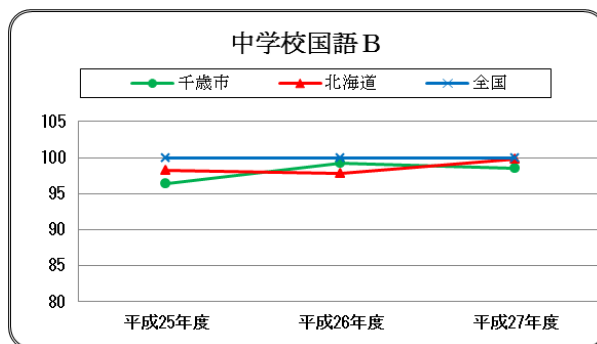
国語A (主として「知識」に関する問題)		平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	99.2	101.0	98.8
	全道	99.5	100.0	100.0
	全国	100	100	100

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は全国とほぼ同様である。「読むこと」は差が縮まっていない。

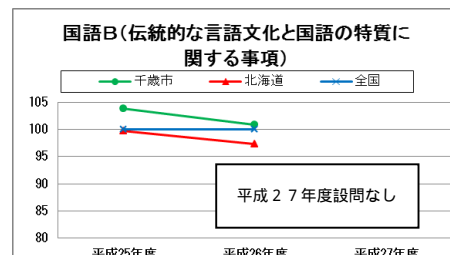
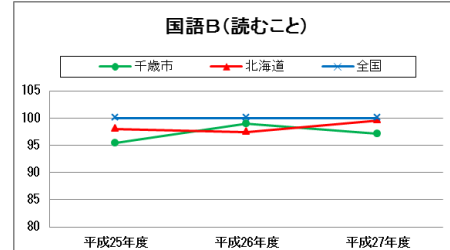
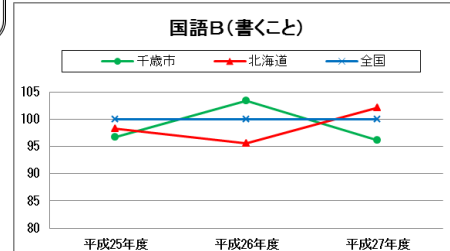
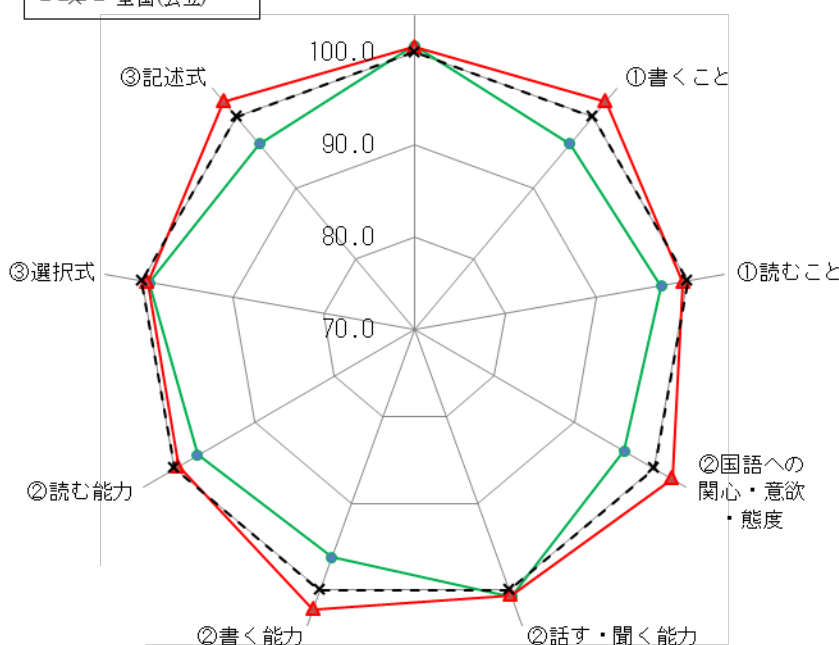
学習指導要領の各領域の結果については、「話すこと・聞くこと」が1.8ポイント、「書くこと」が1.0ポイント、「読むこと」が4.4ポイント、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が0.3ポイント全国を下回ったが、その差は僅かである。しかし「読むこと」はこれまでも課題とされていた領域であり、全国との差が僅かに広がった。評価の観点について「読む能力」も同様である。問題形式では、短答式、選択式による正答率に差はほとんどない。また、昨年度、漢字の読み書きについて6問中全てが全国を上回るなど「言語についての知識・理解・技能」の確実な定着がなされていたが、今年度は3問にとどまった。

今後、言語に関する知識や技能の確実な習得をめざすとともに、学習指導要領に示された「文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てる」を踏まえ、読む能力を確実に向上させる必要がある。

中学校国語 B



①話すこと・聞くこと



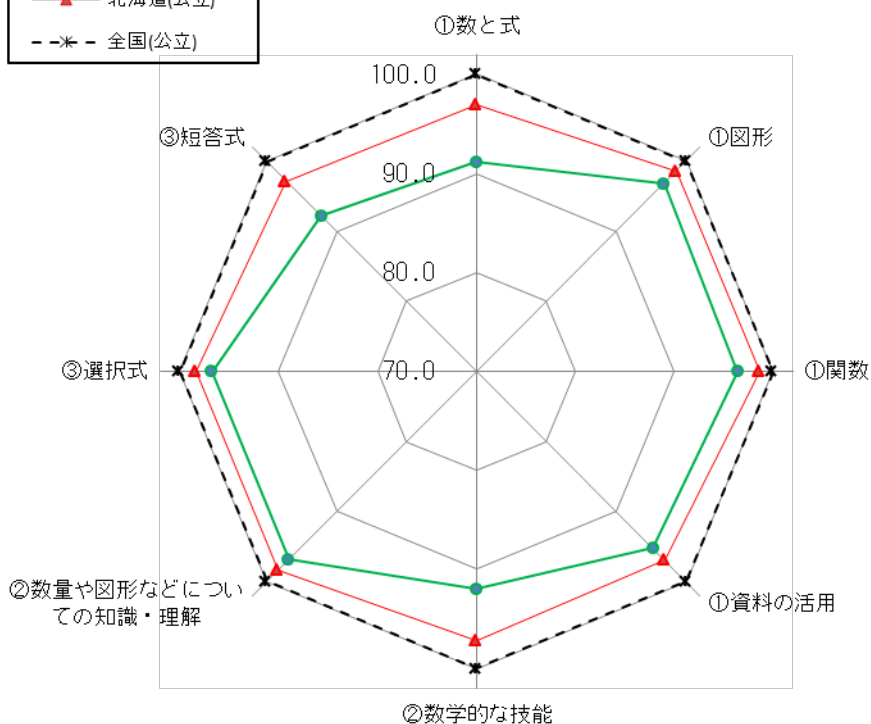
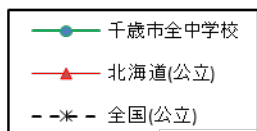
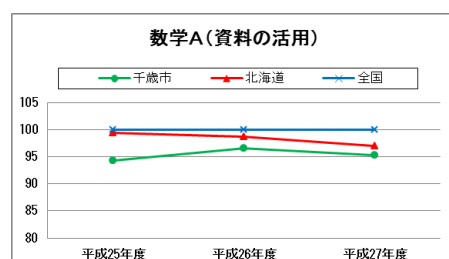
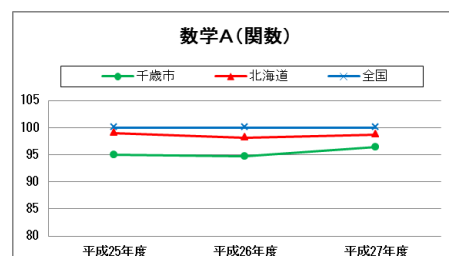
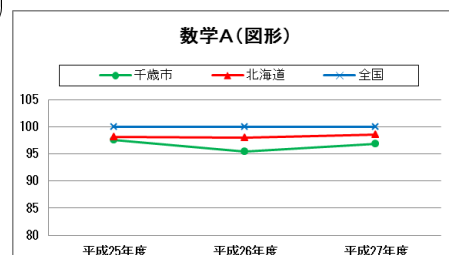
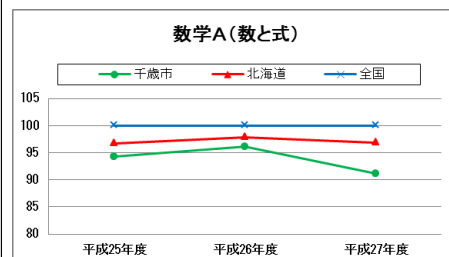
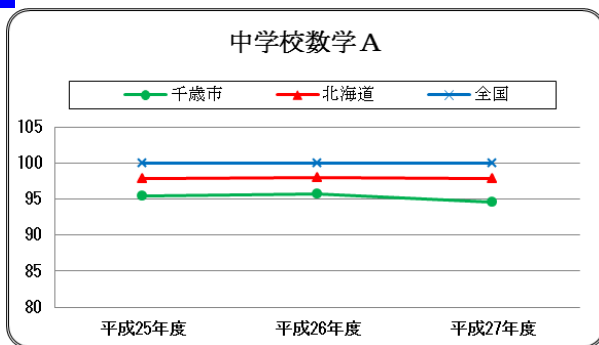
国語B(主として「活用」に関する問題)		平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	96.4	99.2	98.5
	全道	98.2	97.8	99.8
	全国	100	100	100

「話すこと・聞くこと」は全国を上回った。「書くこと」に課題がみられる。

学習指導要領の各領域の結果については、「話すこと・聞くこと」が0.7ポイント全国を上回った。「書くこと」が3.8ポイント、「読むこと」が2.9ポイント下回った。評価の観点では、「国語への関心・意欲・態度」「書く能力」に、問題形式では「記述式」に課題がみられる。昨年度、「書くこと」や「記述式」の問題で全国平均を上回り、「国語への関心・意欲・態度」も良好であったことと比較し、やや低下の傾向がみられる。書く領域の記述式の問題(「複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを具体的に書く」など)はいずれも全国を下回った。

生徒質問紙の回答をみると「読書が好き」と答えた生徒が全国を大きく上回っている。今後、このような生徒のよさを生かしながら、物事について感じたことを書いたり、物事を整理し、考えや意見を書いたりする言語活動を工夫し、資料を適切に引用し、記述する能力や推敲する能力を高めていくことが必要である。

中学校数学A



数学A(主として「知識」に関する問題)		平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	95.4	95.7	94.6
	全道	97.8	97.9	97.8
	全国	100	100	100

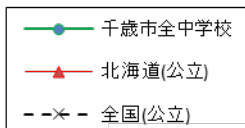
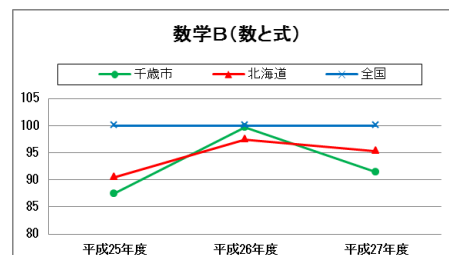
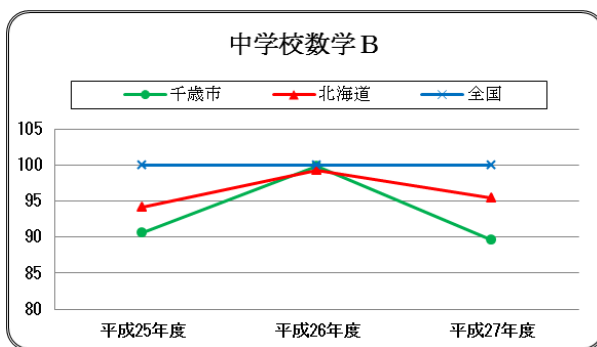
「数と式」は全国との差が広がった。「図形」と「関数」に改善がみられる。

学習指導要領の各領域の結果については、「数と式」が昨年度 3.9 ポイントから今年度 8.9 ポイントへと全国との差が広がった。また、この領域における短答式の問題(「一次式の減法の計算」「数量の関係を文字式で表す」)では、全国の正答率を下回るなど基礎的な理解が不足していることを示している。

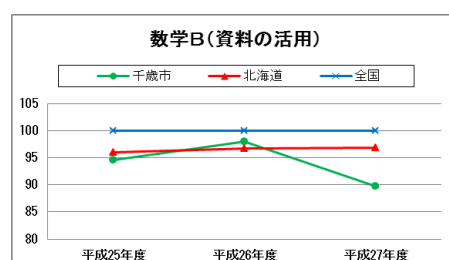
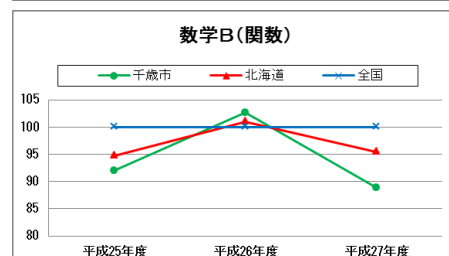
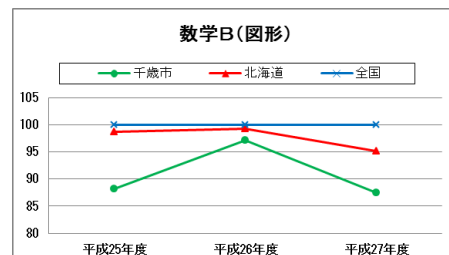
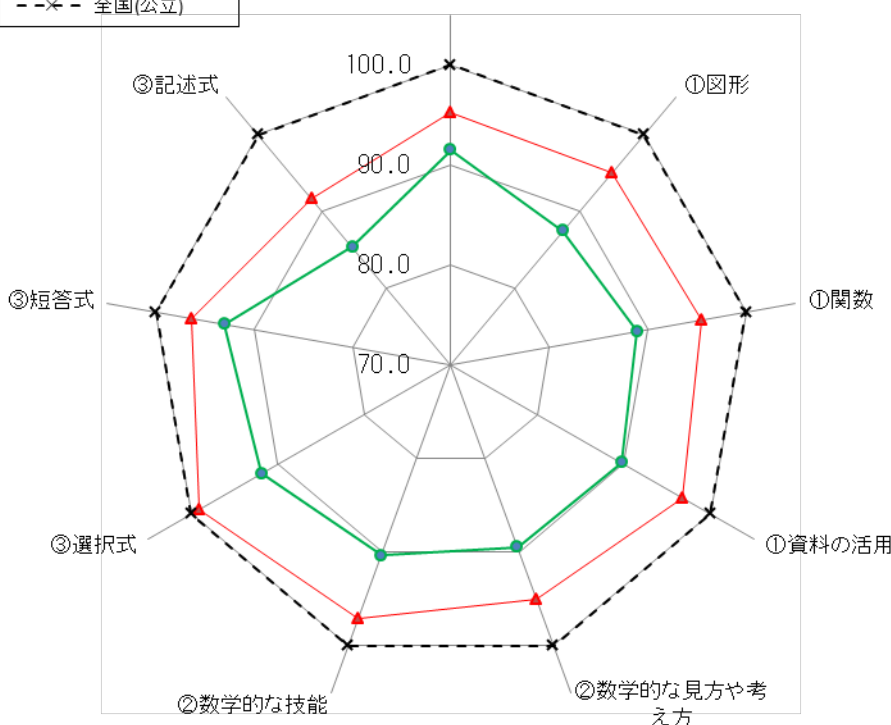
一方「関数」が 5.3 ポイントから 3.6 ポイント、「図形」が 4.5 ポイントから 3.2 ポイントと全国との差を縮め、この領域の問題(「対頂角は等しいことの証明」「時間と道のりの関係を表わすグラフ」)では全国の正答率を上回った。問題形式では、「選択式」がほぼ全国と同様の正答率を示しており、評価の観点の「数量や図形などについての知識・理解」も同様である。

数学Aについては小学校算数の理解が確かであれば解答できる問題が多く含まれており、小学校における確実な習得を目指すとともに、数学の土台となる基礎的な理解を小中9年間で確実なものにするため、今後、小中の教育課程上の連携を一層重要な課題として捉えていくことが必要である。

中学校数学B



①数と式



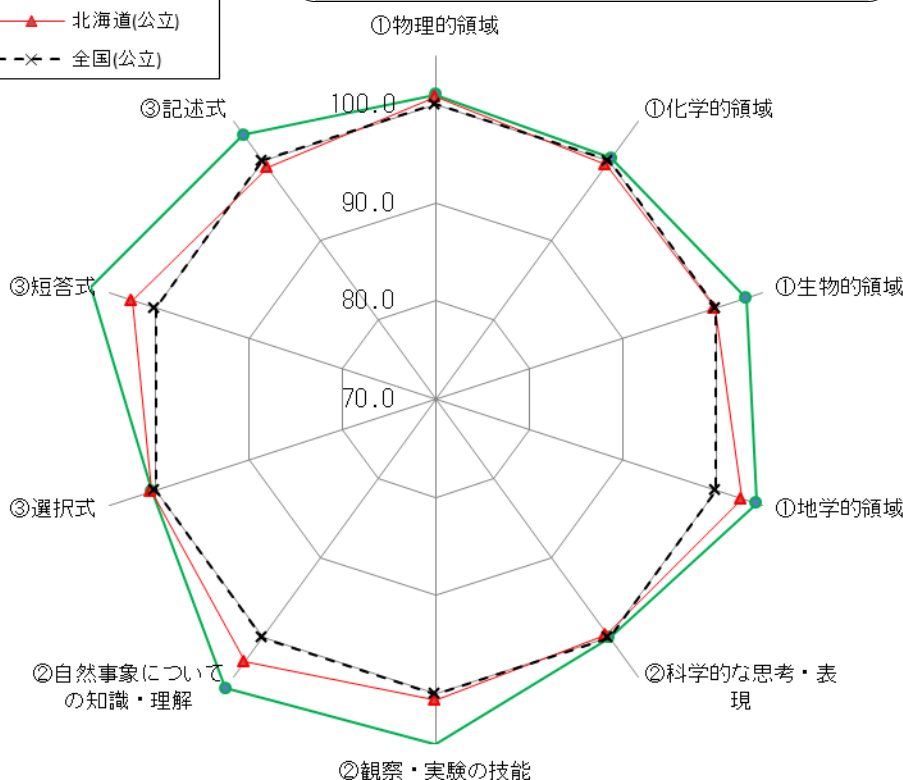
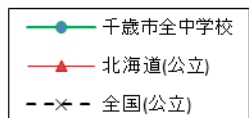
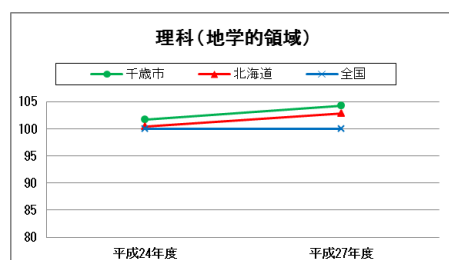
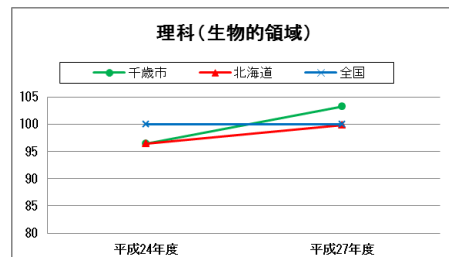
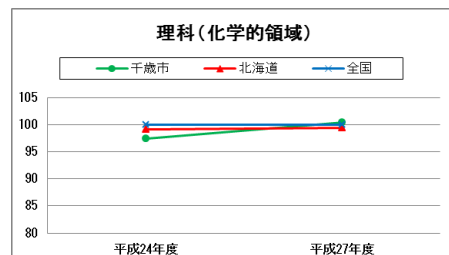
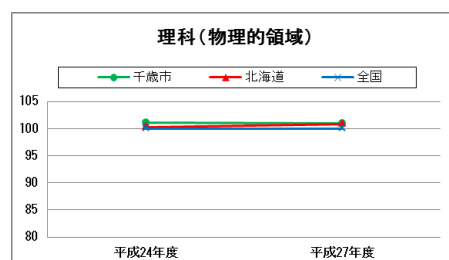
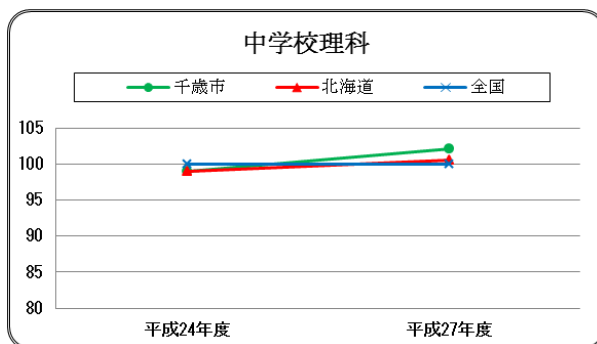
数学B(主として「活用」に関する問題)		平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	90.6	99.8	89.7
	全道	94.6	99.3	95.4
	全国	100	100	100

全ての領域で全国を下回り、全国との差が広がった。

学習指導要領の各領域の結果については、領域別で全ての領域で全国を10ポイント程度下回った。昨年度、「関数」の領域で全国を上回るなど全国と同様の成績であったが、今年度はその水準を維持することができなかった。特に記述式の問題(「連続する3つの整数の和が中央の整数の3倍になることの証明」「正方形を平行四辺形に変えても対面する辺が平行になることの証明」「底面になる円の半径と側面の扇形の中心角の大きさを求める方法の証明」)で正答率がかなり低い。

数学Bは日常事象(プロジェクトの画面の大きさと投影距離の関係、ポップアップカードの作り方、落し物調べの表やグラフなど)を場面とする問題が多く出題されている。これらのことから今後は、実際の日常生活や社会で、数学を利用したり、論理的に説明したりする数学的活動を多く取り入れ、数学のよさを味わわせながら興味や関心を高め、事象を数理的に考察し、表現する能力を高めていく必要がある。

中学校理科



理科(「知識」「活用」に関する問題)		平成24年度	平成27年度
全国を100とした指数	千歳市	99.0	102.1
	全道	99.0	100.6
	全国	100	100

「物理」「化学」「生物」「地学」全ての領域で全国を上回り、前回(平成24年度)から大きく向上した。

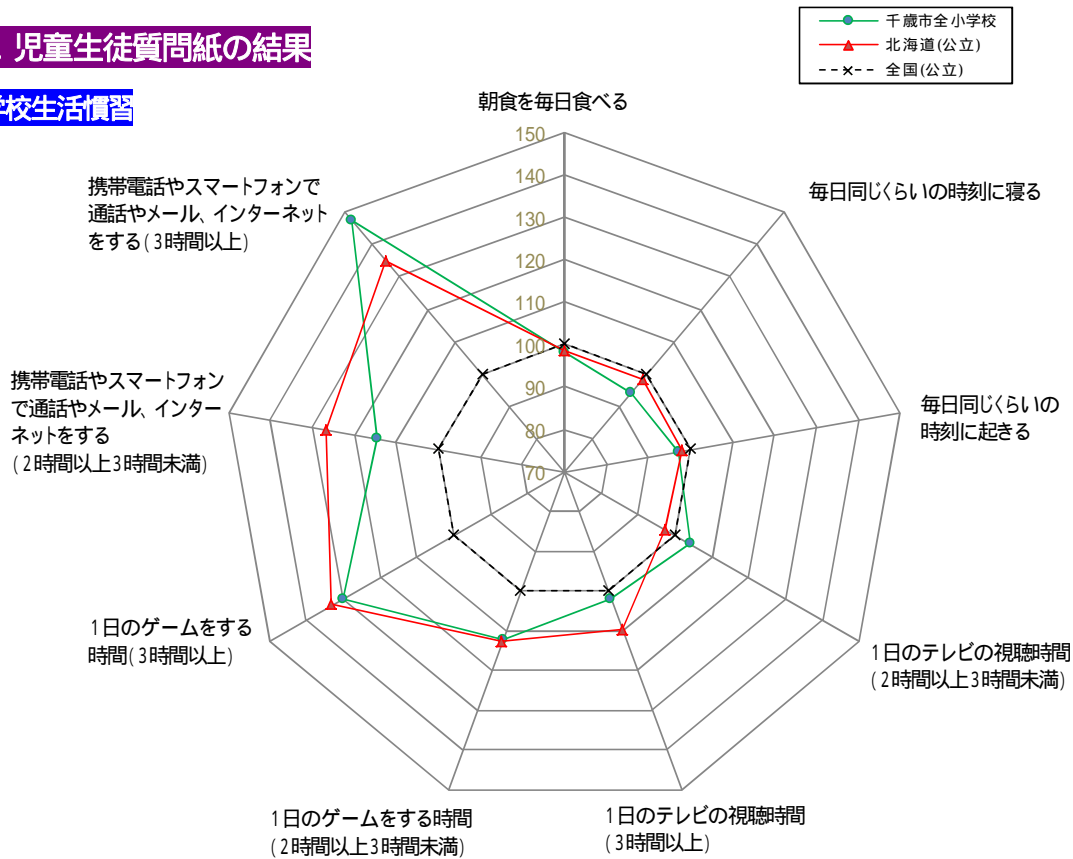
学習指導要領の各領域の結果については、領域別で「物理」1.0ポイント、「化学」0.4ポイント、「生物」3.2ポイント、「地学」4.3ポイントと全て全国を上回った。また、「評価の観点」や「問題形式」においても全ての区分で全国と同様あるいは上回る結果となり、特に「自然事象についての知識・理解」は全国を大きく上回った。理科はA Bに分けられていないが、枠組みとして「主として知識に関する問題」と「主として活用に関する問題」によって構成されている。「主として知識に関する問題」は全国を大きく上回っている。

「生徒質問紙」での理科に関する回答をみると、大方の項目(「理科は好きですか」「理科の授業では、理科室で観察や実験をどのくらい行いましたか」等)で全国平均よりかなり良い傾向を示している。

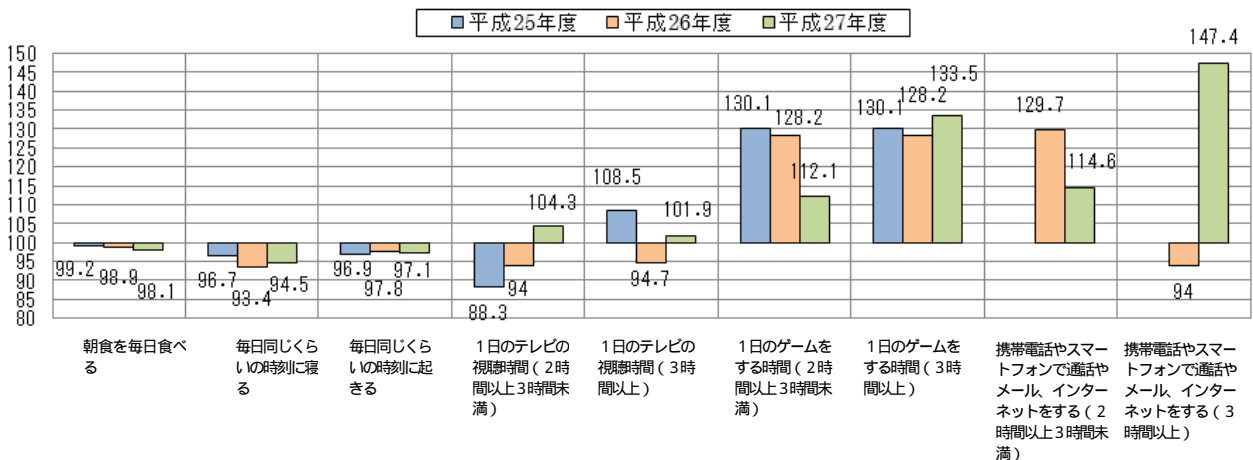
理科は数学Bと同様に日常事象(入浴剤やベーキングパウダーの原材料、キウイフルーツが物質を分解するはたらき)をとりあげる問題が多い。今後も、観察や実験などの活動を多く取り入れながら理科への興味や関心を高めていく必要がある。

5. 児童生徒質問紙の結果

小学校生活慣習



過去3年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



「早寝、早起き、朝ごはん」の習慣が身に付いてきているが、長時間ゲームをしたり、携帯電話やスマートフォンを使って通話やメール、インターネットをしたりする児童が増えている。

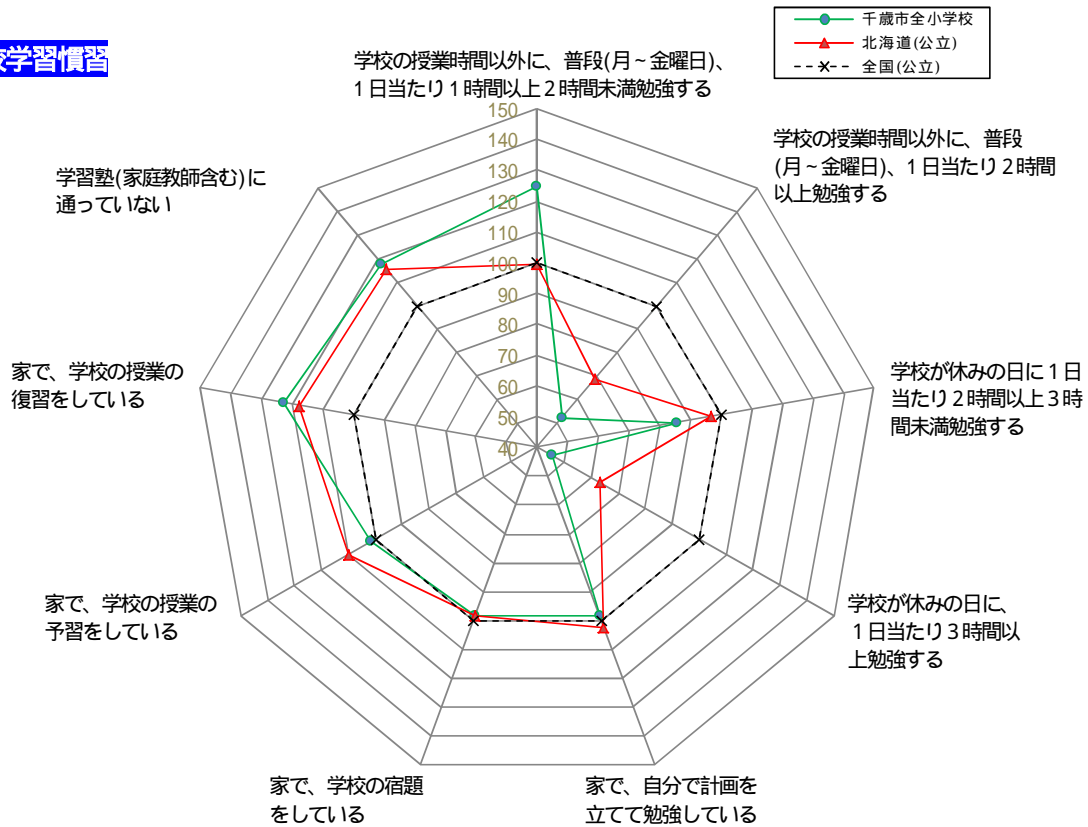
「朝食の摂取」「起床時刻」については、ここ3年間大きな変化は見られないが、就寝時刻については、全国を100とした指数で前年度の93.4ポイントから今年度は94.5ポイントと改善の兆しが見られる。

「テレビの視聴時間」については、「2時間以上3時間未満視聴する」「3時間以上視聴する」と回答した児童が前年度より増加し、「ゲームをする時間」や「携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間」についても、依然として全国を大きく上回っており、特に、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットに3時間以上費やしていると回答した児童が大幅に増加した。

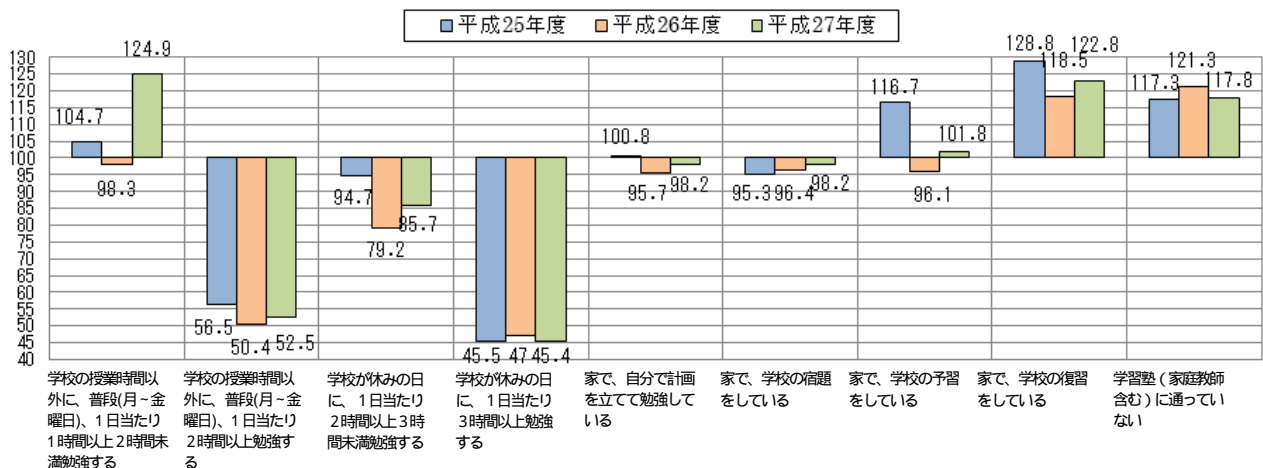
このような状況から、「ゲームの時間」や「携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間」について、家庭で時間の目安を決めて節度ある利用を身に付けさせることが課題といえる。

今後、各小中学校のPTAとの連携・協力の下、千歳市PTA連合会が提唱した「千歳市家庭生活宣言」に盛り込まれた取組を着実に進め、児童の「生活習慣の改善」を図っていくことが必要である。

小学校学習慣習



過去3年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



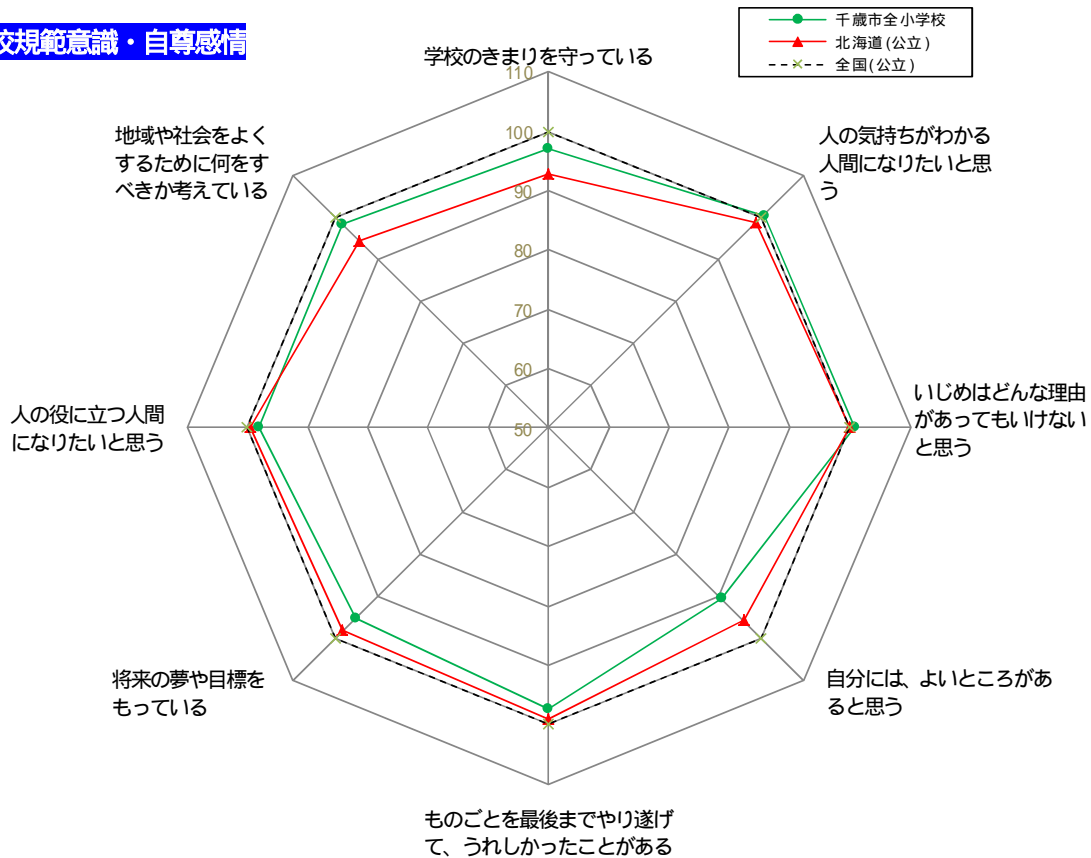
普段、1時間以上2時間未満勉強する児童が大幅に増え、自分で計画を立て予習や復習に取り組むなど学習意欲も高まってきている状況が見られる。

普段(月～金曜日)1日あたりに1時間以上2時間未満勉強する児童は、全国を100とした指数で、前年度の98.3ポイントから今年度は124.9ポイントと改善が見られ、休みの日に2時間以上3時間未満勉強すると回答した児童についても、前年度を6.5ポイント上昇し、家庭でしっかり学習している状況が見られる。しかし、普段、「2時間以上勉強する」「休日に3時間以上勉強する」と回答した児童は、ここ数年大きな変化は見られず、1週間あたりの学習時間が少ない状況が見られる。

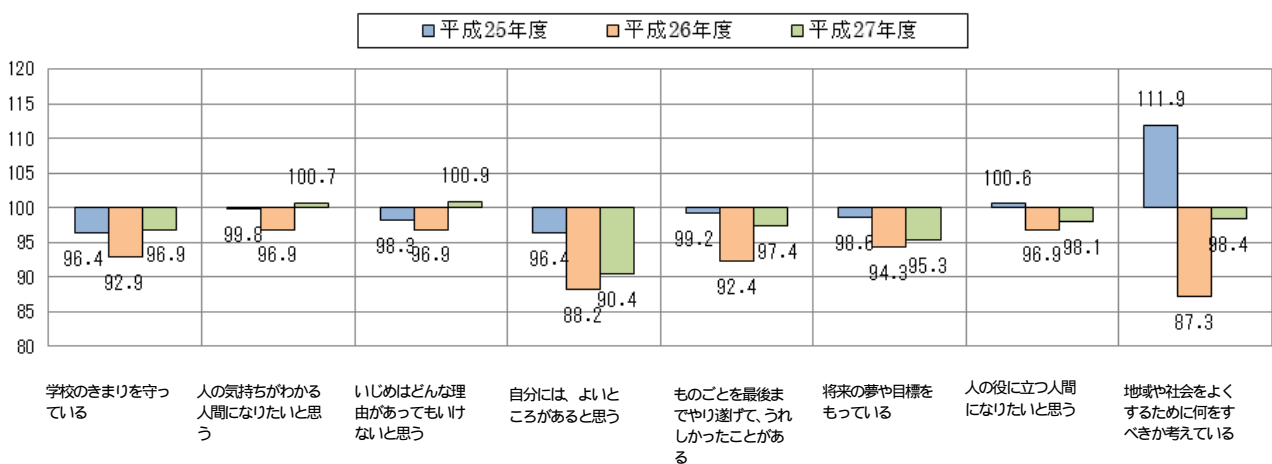
学習に対する関心・意欲・態度については、「自分で計画を立てて勉強している」「家で学校の宿題をしている」「予習をしている」「復習に取り組んでいる」と回答した児童は増加しており、学習意欲が高まってきている状況が見られる。

普段、1時間以上2時間未満勉強する児童が増加したことは、各学校が取り組んできた「家庭学習の習慣化を図る取組」の成果と捉えることができることから、今後も、家庭での学習時間については、市内の多くの学校が設定している「学年×10分」を基本としつつ、学校で学習した内容をしっかり身に付けたり深めたりする課題や週末課題に取り組ませるなど家庭での学習の質の向上を図っていくことが必要である。

小学校規範意識・自尊感情



過去3年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



児童の規範意識や自尊感情に関する全ての設問において、肯定的な回答の割合が前年度を上回っている。

「規範意識」については、「学校のみまりを守っている」と回答した児童は、全国を100とした指数で96.9ポイントと前年度より4.1ポイント上昇し、全国との差が縮まった。

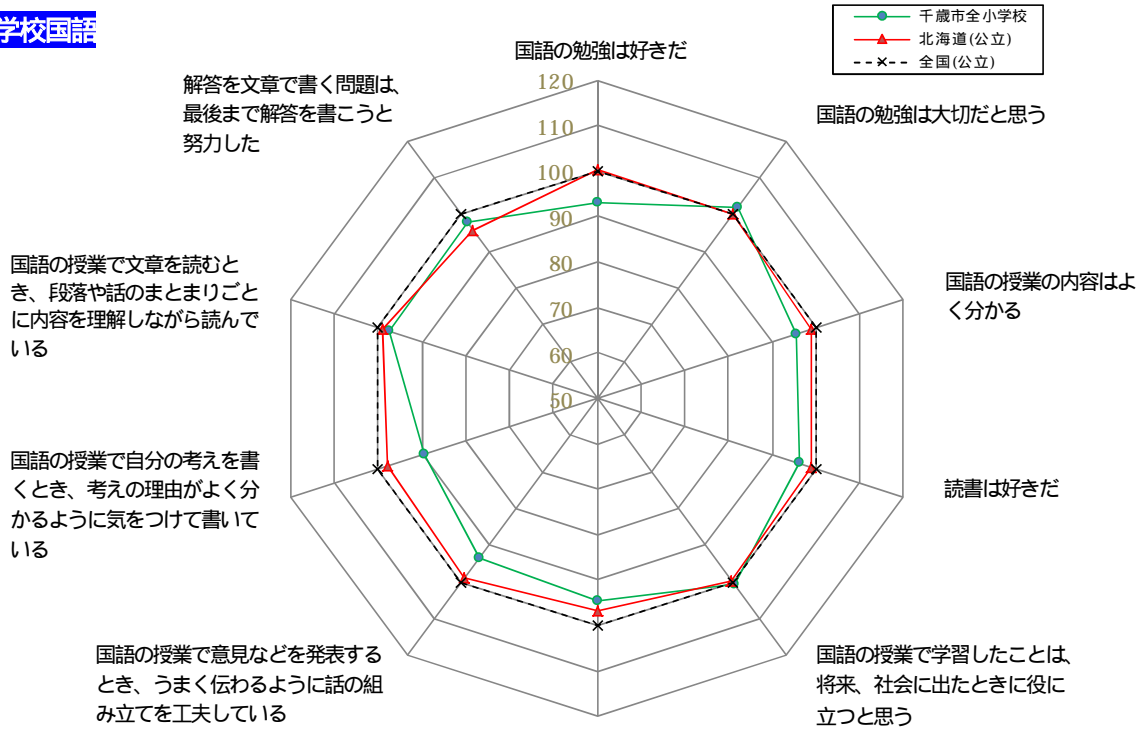
「自尊感情」については、「自分には、よいところがある」「将来の夢や目標をもっている」と回答した児童は前年度を上回っているが、依然として児童の自尊感情の高揚が課題と捉えることができる。

「地域との関わり」については、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えている」と回答した児童が前年度より大幅に上昇し、全国と同水準となっている。

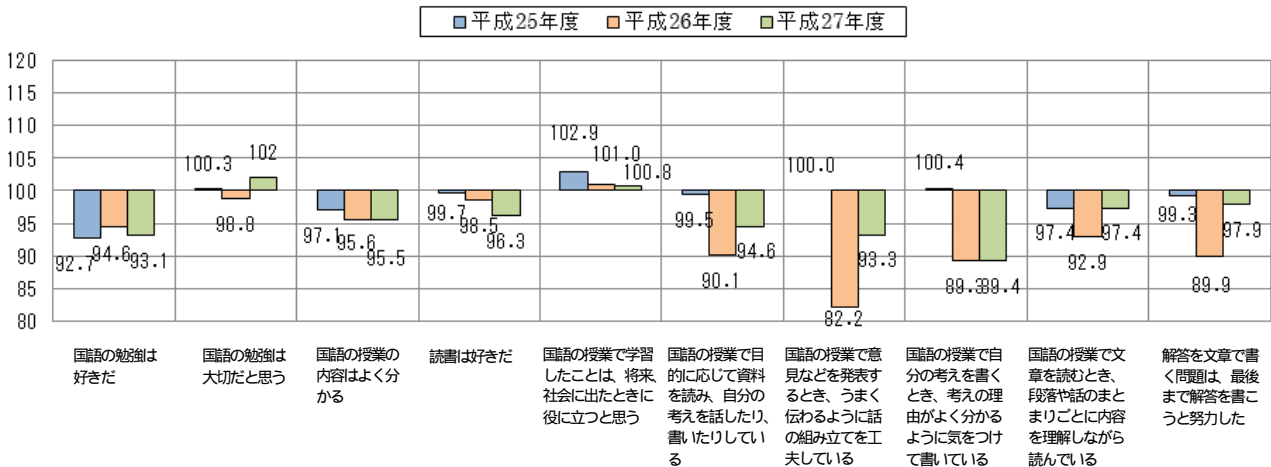
「他者理解」については、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」「人の気持ちがわかる人間になりたいと思う」と回答した児童が増加し、過去3年間で初めて全国を上回った。

今後、各学校においては、ハイパーQU検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経営を推進し、規範意識や自尊感情を一層高めていくことが大切である。

小学校国語



過去3年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



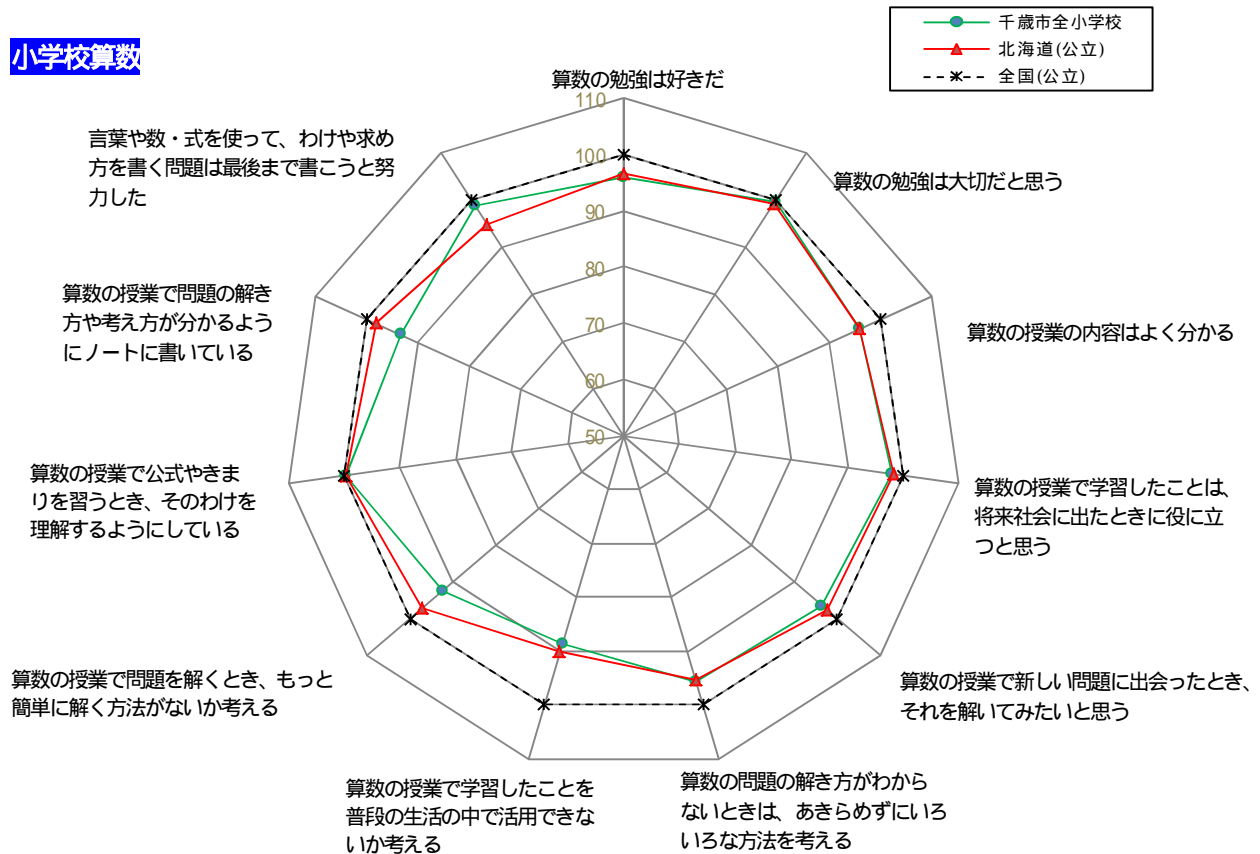
発表の仕方、文章の読み方、自分の考えを書くときの工夫など、学び方については改善の兆しが見られる。

国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強が好き」「国語の授業の内容は、よく分かる」と回答した児童は、過去3年間大きな変化は見られない。また、「国語の勉強は大切だと思う」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童は、全国と同様となっているが、「読書が好き」と回答した児童は、96.3ポイントと前年度を下回り、読書好きの児童が年々減少している状況が見られる。

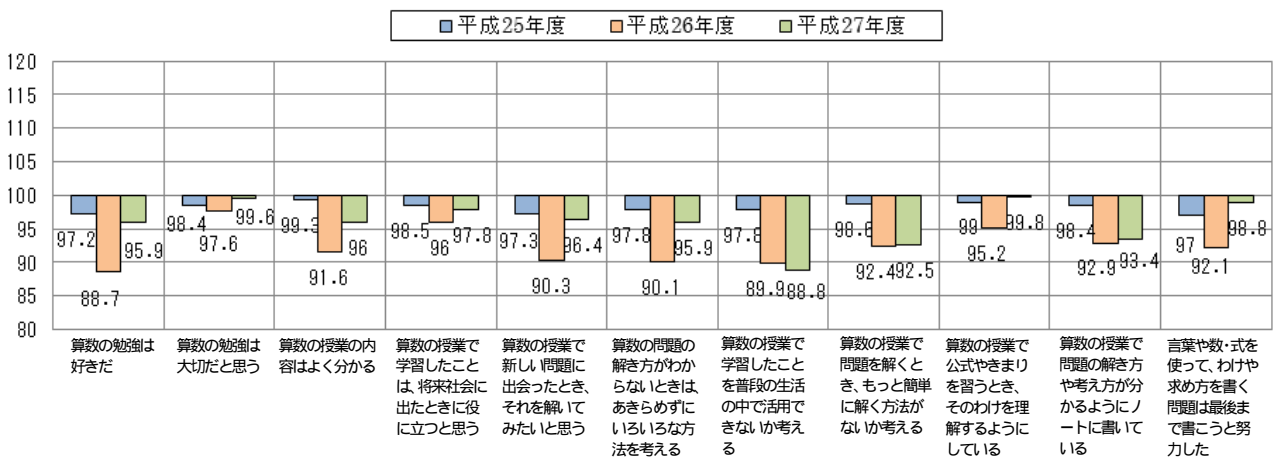
国語の学び方については、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」と回答した児童は、全国と同様であったが、「発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」「文章を読むとき、段落や話のまとめごとに内容を理解しながら読んでいる」と回答した児童は、前年度より上昇しており改善の兆しが見られる。

今後、デジタル教科書や学校図書館を積極的に活用し、国語の授業に対する興味・関心・意欲を高め、単元を貫く言語活動を位置づけた授業を展開し、伝え合う力や書く力などを高める学び方を身に付けさせていく必要がある。

小学校算数



過去3年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



算数に対する関心・意欲・態度や算数の授業の学び方については、多くの項目で前年度を上回った。

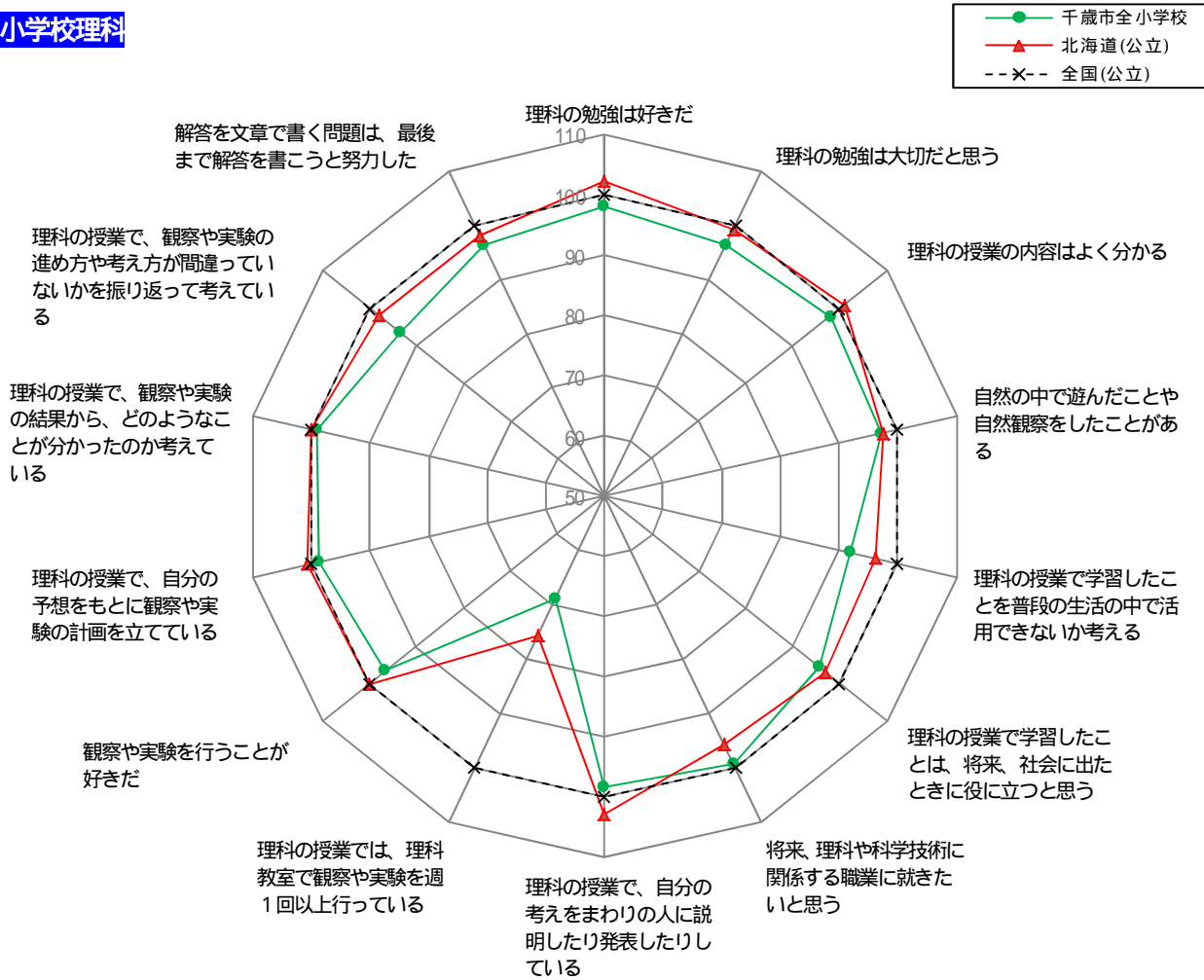
算数に対する関心・意欲・態度に関しては、「算数が好き」「授業の内容がよく分かる」と回答した児童は、それぞれ7.2ポイント、4.4ポイント上昇し、全国との差が縮まった。

また、「算数の勉強は大切だと思う」「算数の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童は、それぞれ2.0ポイント、1.8ポイント上昇し、全国と差は見られない。

算数の学び方については、「公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」と回答した児童が前年度より増加し全国との差はなくなったが、「算数の問題の解き方がわからないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える」「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」など、数学的な考え方を高める学び方の習得については課題が見られる。

今後、デジタル教科書を積極的に活用したり、算数的活動を取り入れた指導を工夫したりして、算数に対する興味・関心を高めるとともに、個に応じたきめ細かい適切な指導に努め、児童一人ひとりに数学的な考え方や数理的に処理する能力を高める算数の学び方を身に付けさせていくことが必要である。

小学校理科



観察や実験方法の検証を苦手としている傾向が見られる。

理科に対する関心・意欲・態度に関しては、「自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがある」と回答した児童は、全国を100とした指数で97.2ポイントであり、全国と同水準となっている。「理科の勉強が好き」と回答した児童は、98.3ポイントであり、「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」「理科の勉強は大切だと思う」と回答した児童は、それぞれ95.0ポイント、96.4ポイントと全国をやや下回っている。

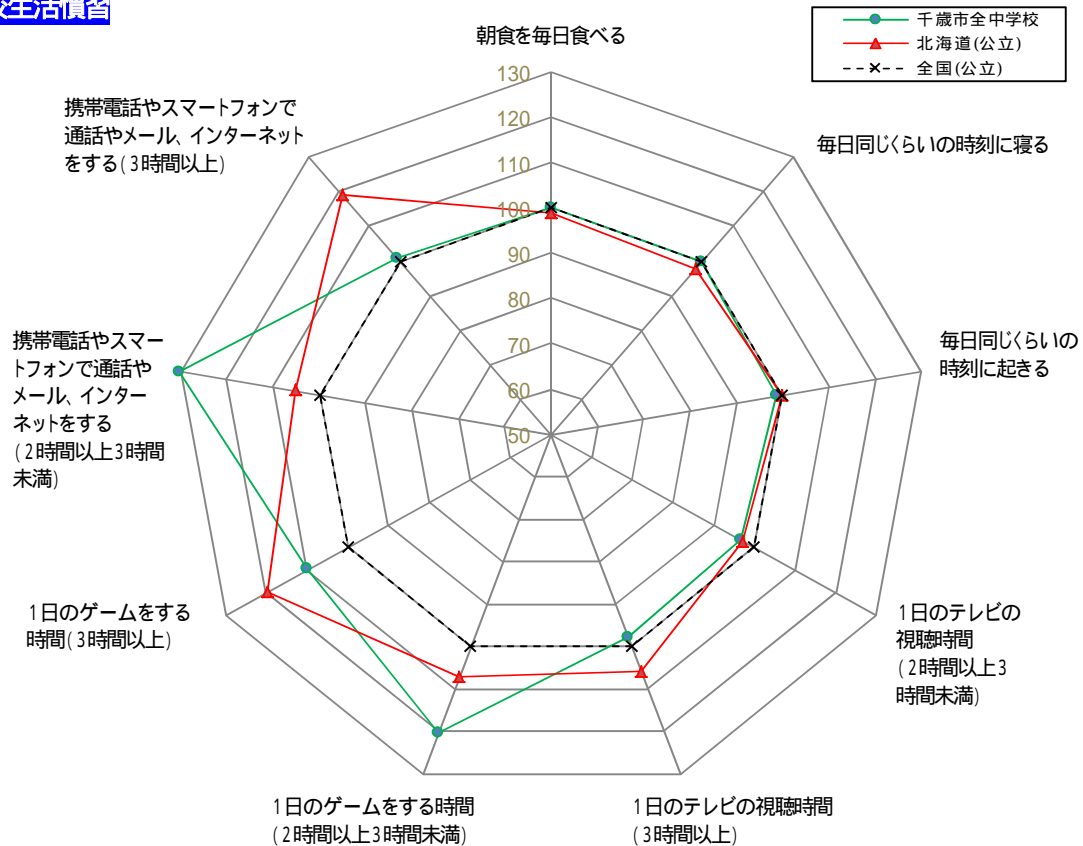
理科の授業に関しては、「理科の授業の内容はよく分かる」と回答した児童は98.0ポイントと全国との差はなかったが、「理科の授業では、理科教室で観察や実験を週1回以上行っている」「観察や実験を行うことが好きだ」については、それぞれ68.8ポイント、96.6ポイントとなっており、理科の授業における観察や実験に課題が見られる。

理科の学び方に関しては、「理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり発表している」「理科の授業で、自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てている」と回答した児童は、それぞれ98.2ポイント、98.9ポイントと全国と同水準であり、「理科の授業で観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えている」についても99.1ポイントと全国と同水準となっている。

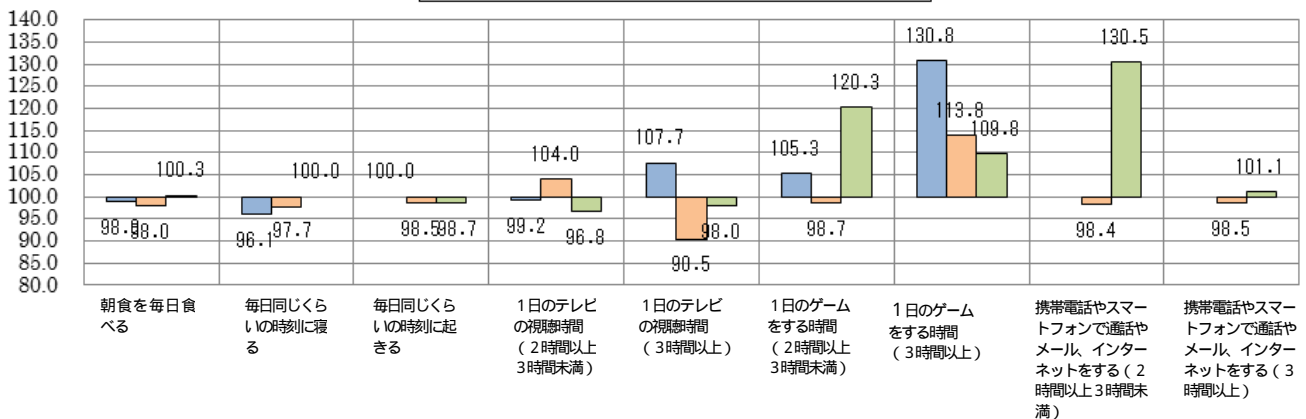
一方、「理科の授業で、観察や実験の進め方が間違っていないかを振り返って考えている」と回答した児童は93.4ポイントと全国を下回っており、「理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えている」についても91.8ポイントと全国を下回っている。

今後、観察・実験の結果を整理・考察したり、科学的な言葉や概念を使用して考えたりする学習活動を工夫し、科学的な見方や考え方を高める学び方を身に付けさせていく必要がある。

中学校生活慣習



過去3年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



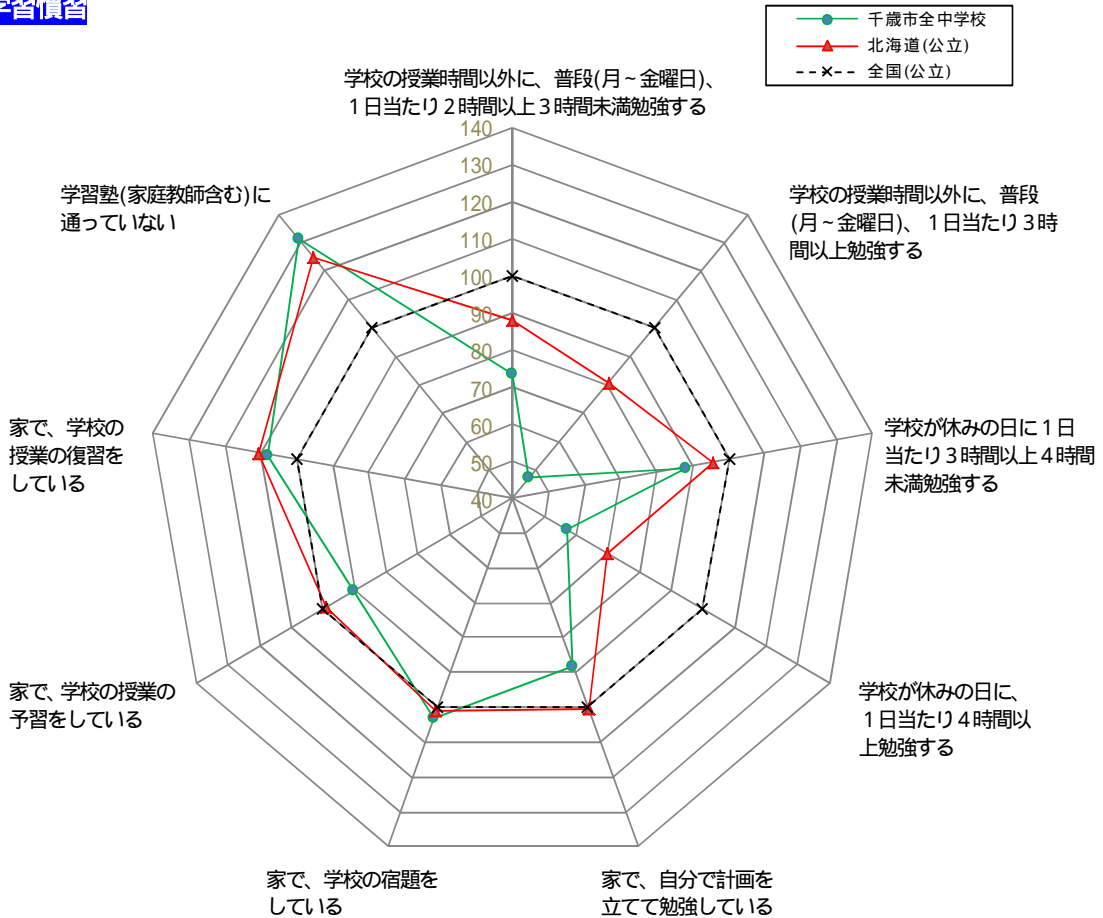
「早寝、早起き、朝ごはん」の習慣が身に付いてきているが、長時間ゲームをしたり、携帯電話やスマートフォンで2時間以上3時間未満、通話やメール等をする生徒が増加している。

朝食の摂取や就寝時刻、起床時刻については、全国との差が縮小し「早寝、早起き、朝ごはん」の習慣が身に付いてきている状況が見られる。また、テレビの視聴時間については、「2時間以上3時間未満視聴する」「3時間以上視聴する」のいずれについても、全国を下回っている。

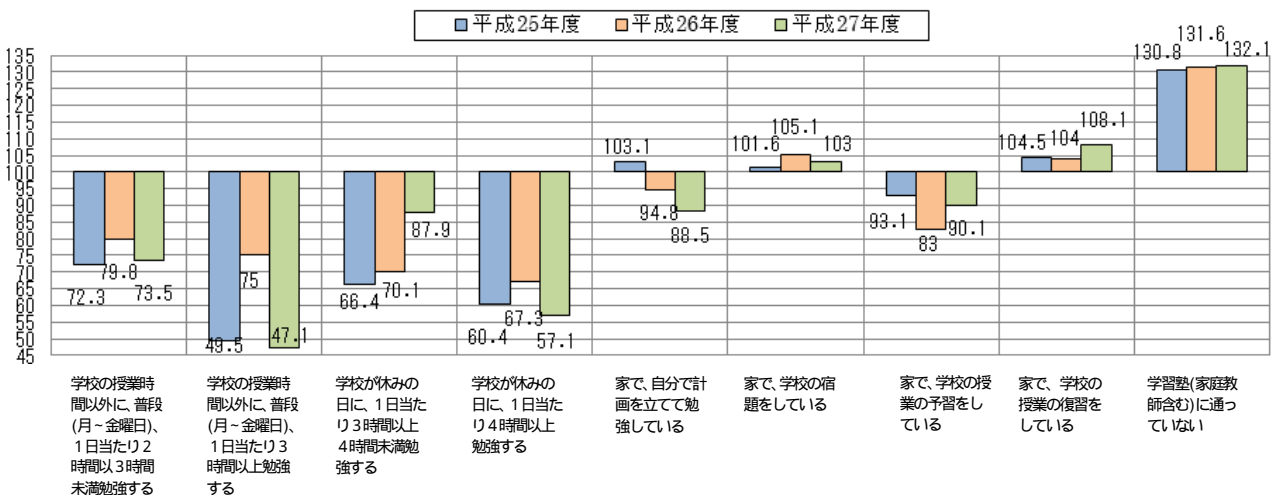
一方、ゲームをする時間については、3時間以上ゲームをする生徒は3年連続減少しているものの、全国と比較し依然高い状況となっている。また、携帯電話やスマートフォンで通話やメール等をする時間については、2時間以上3時間未満と回答した生徒の割合が前年度を大きく上回り、3時間以上と回答した生徒もわずかではあるが増加しており、テレビの視聴やゲームに費やしていた時間が携帯電話やスマートフォンで通話やメール等をする時間に振り替わっている状況が見られる。

今後、学校が家庭と連携を図り「ゲームをする時間」や「携帯電話やスマートフォンで通話やメール等をする時間」の目安を決めて生徒の生活リズムを整えていくことが必要である。

中学校学習慣習



過去3年間の千歳市の経年変化(グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



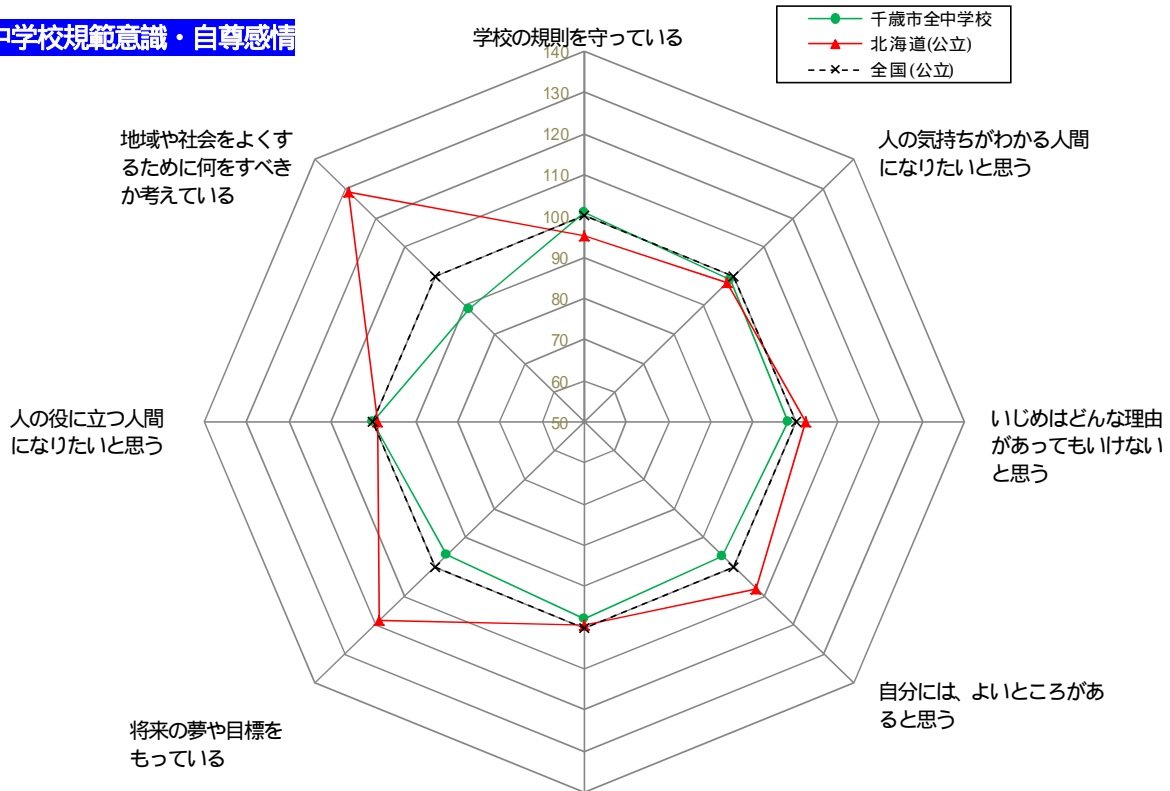
平日、休日ともに家庭での学習時間が少ない状況が見られる。

家庭での学習時間については、平日2時間以上3時間未満勉強する生徒は、全国と比較し26.5ポイント下回り、学校が休みの日についても、3時間以上4時間未満勉強すると回答した生徒は全国を12.1ポイント下回っており、家庭での学習時間が少ない状況が見られる。

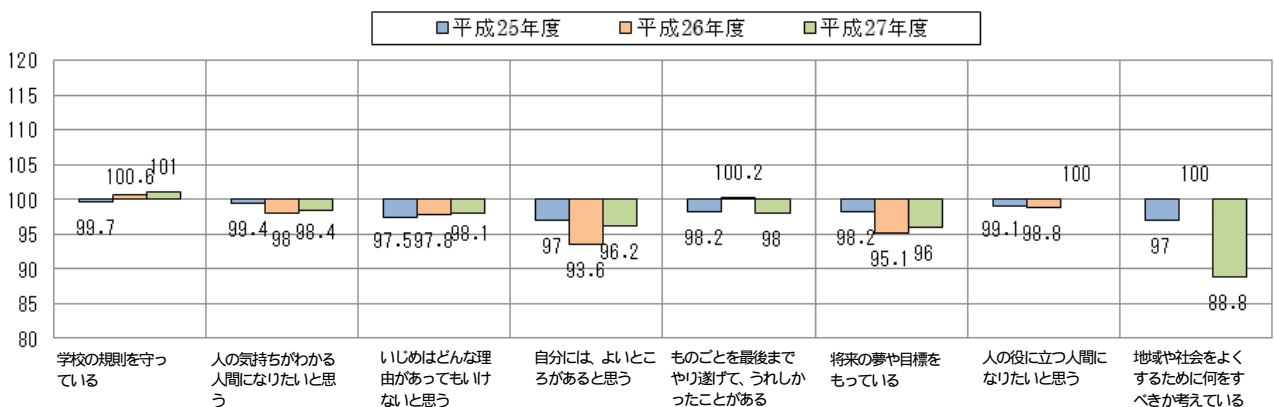
学習に対する関心・意欲・態度に関しては、「家で、学校の宿題をしている」「家で、学校の授業の復習をしている」と回答した生徒は、全国を上回っており、予習をしている生徒も増加している。

このような状況から、家庭での学習時間の不足の解消が緊要な課題であり、自分で計画を立て学習に取り組める力を高めるとともに、宿題や週末課題を持たせるなど、生徒の家庭学習を支援する手立てを工夫する必要がある。

中学校規範意識・自尊感情



ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある
過去3年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



規範意識が高く、自尊感情についても改善の兆しが見られる。

規範意識については、「学校の規則を守っている」と回答した生徒が全国を100とした指数で前年度を0.4ポイント上回る101.0ポイントであり、規範意識が高い状況が見られる。

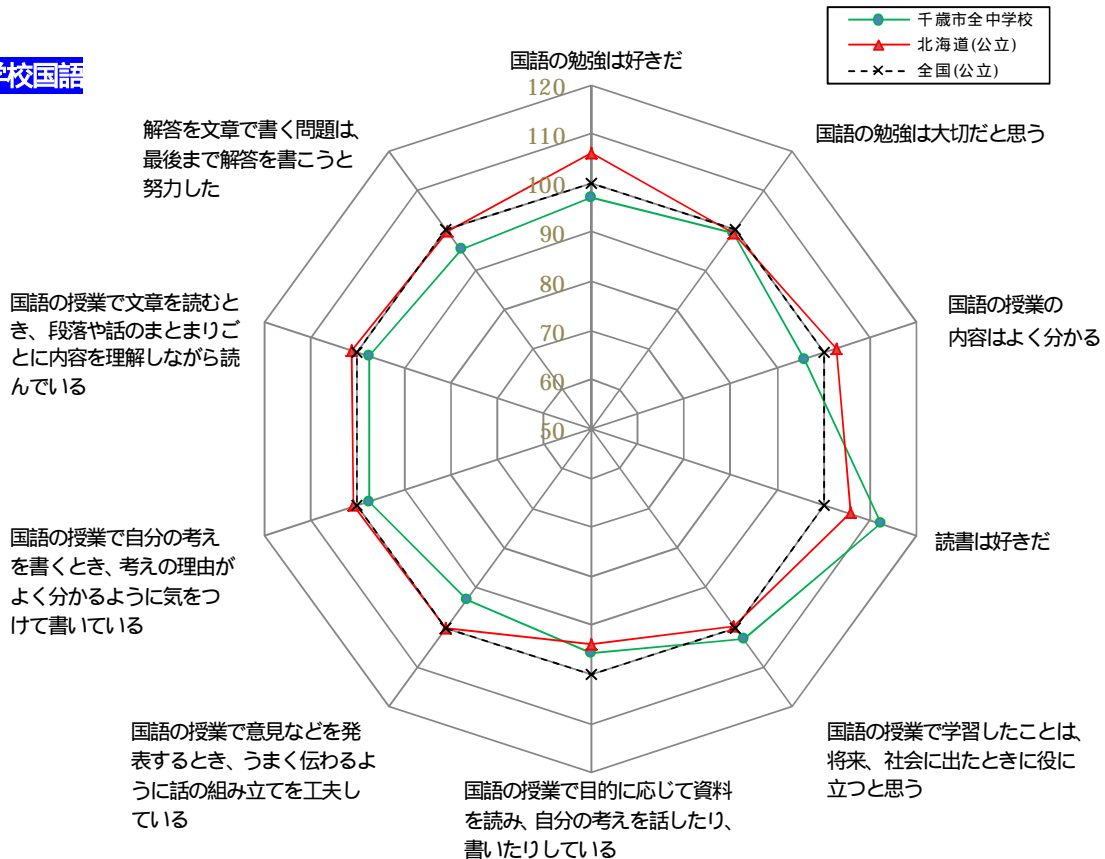
自尊感情については、「自分には、よいところがあると思う」と回答した生徒が、前年度より2.6ポイント上昇しており改善の兆しが見られる。

地域との関わりについては、「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した生徒は100.0ポイントとなり、自己有用感を感じている生徒が増加している。しかし、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えている」と回答した生徒については、前年度より11.2ポイント下回っており、狭い範囲の他者との関わりの中で自己を発揮したいと考えている状況が見られる。

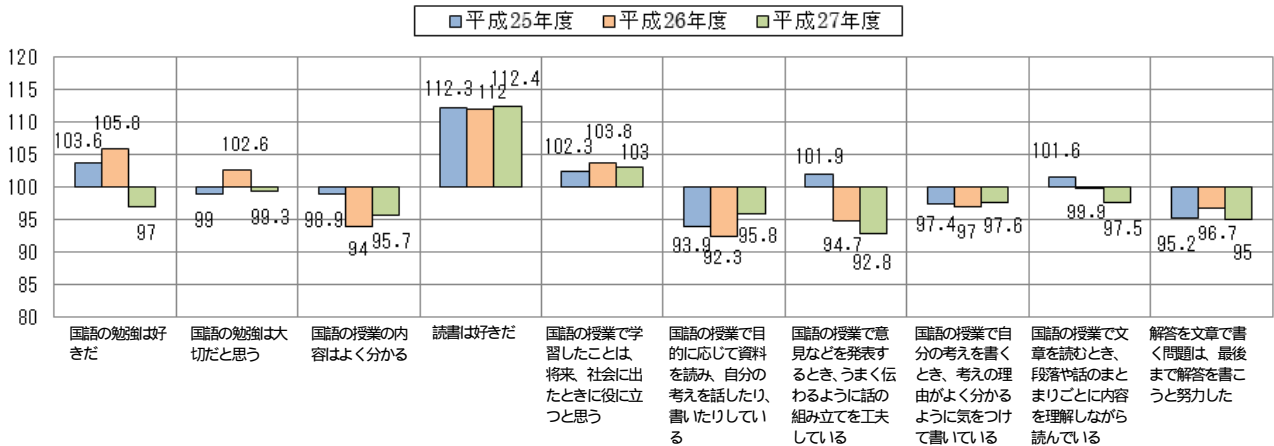
他者理解については、「人の気持ちができる人間になりたいと思う」「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」と回答した生徒はどちらも前年度を若干上回り、全国と同水準となっている。

今後、他者を好意的に受け止めたり、他者との絆や社会とのつながりを感じ取ったりすることができる機会であるボランティア活動や職場体験活動等を通して、自尊感情や自己有用感を高めていくことが必要である。

中学校国語



過去3年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



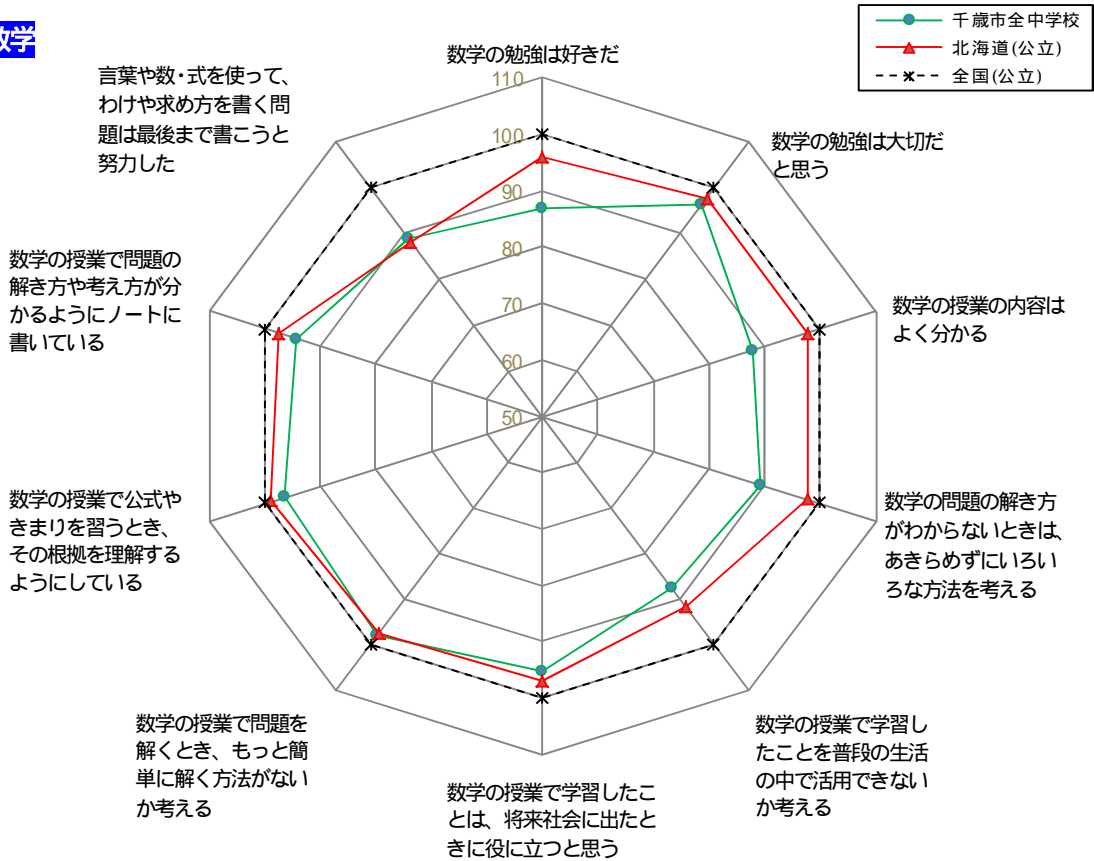
読書意欲は3年連続高い水準が維持されており、「書くこと」に関する関心・意欲の向上が見られる。

国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強は好きだ」と回答した生徒は97.0ポイントと前年度を8.8ポイント下回ったが、「国語の授業の内容はよく分かる」と回答した生徒は、前年度より1.7ポイント上昇し、全国との差が縮まった。また、読書に関しては、3年連続全国を10ポイント以上、上回っており、生徒の読書好きの傾向が維持されている。

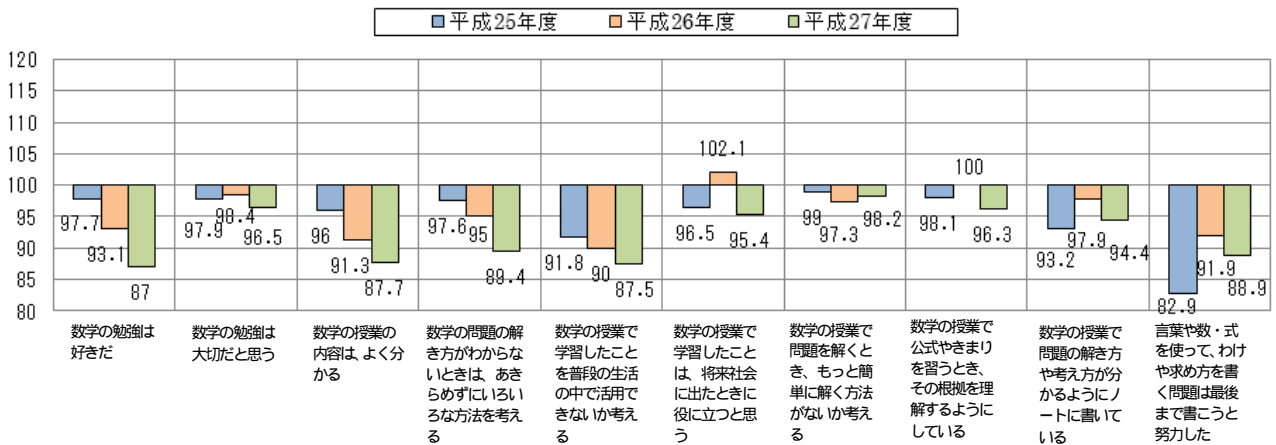
国語の学び方については、「自分の考えを書くとき、考えの理由がよく分かるように気をつけて書いている」「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」と回答した生徒が増加しており、書くことを意識して学習に取り組んでいる状況が見られる。一方、「文章を読むとき、段落や話のまとめごとに内容を理解しながら読んでいる」「意見などを発表するとき、うまく伝えるように話の組み立てを工夫している」については、ともに前年度を下回っており、「読むこと」「話すこと・聞くこと」に対する意識が薄らいでいる状況も見られる。

今後、特に、単元を通して身に付けたい力（単元目標）とそれに関する評価基準を明確にし、単元を貫く言語活動を位置づけた指導計画や本時の展開を工夫し、「話す・聞く」力を高める学び方を身に付けさせていく必要がある。

中学校数学



過去3年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



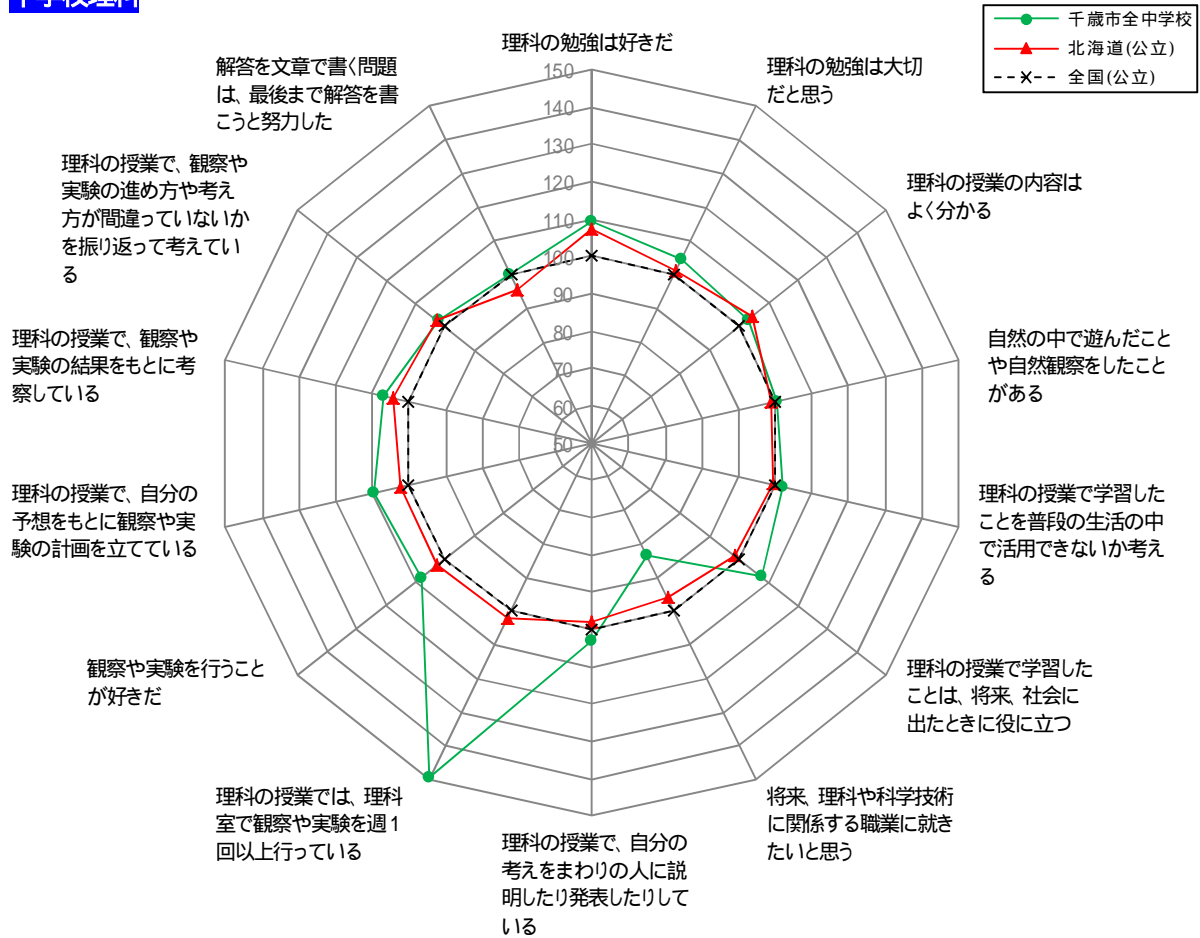
数学に対する関心・意欲の低下傾向が見られる。

数学に対する関心・意欲・態度に関しては、「数学が好き」「数学の授業の内容がよく分かる」「数学の勉強は大切だと思う」と回答した生徒は、全国を100とした指数でそれぞれ87.0ポイント、87.7ポイント、96.5ポイントであり、ここ3年間の経年変化からも数学に対する関心・意欲の低下傾向が見られる。

数学の学び方については、「数学の授業で問題をとくとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」と回答した生徒は、98.2ポイントと全国との差はほとんどないが、「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」「数学の問題の解き方がわからないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える」「数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」「数学の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」については、いずれも前年度を下回り、数学の学び方に課題が見られる。

今後、数学的な活動を積極的に取り入れた授業を工夫し、生徒の数学に対する関心・意欲・態度を高め、日常の事象と結びつけて考える学び方を身に付けさせていく必要がある。

中学校理科



理科に対する関心・意欲・態度が高く、理科の学び方が身に付いている。

理科に対する関心・意欲・態度に関しては、「理科の勉強は好きだ」「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」と回答した生徒は、それぞれ109.4ポイント、107.2ポイントと全国より相当高く、「理科の勉強は大切だと思う」「理科の授業の内容はよく分かる」についても、それぞれ104.6ポイント、103.0ポイントと全国より高い状況が見られる。

理科の授業については、「理科の授業では、理科室で観察や実験を週1回以上行っている」と回答した生徒は149.5ポイントであり、「理科の実験を行うことが好きだ」と回答した生徒も107.9ポイントと全国を大きく上回っている。

理科の学び方については、「理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり、発表している」「理科の授業で、自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てている」「理科の授業で、観察や実験の結果をもとに考察している」「理科の授業で、観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えている」と回答した生徒がいずれも全国を上回っており、目的意識をもって観察や実験に取り組んでいる状況が見られる。

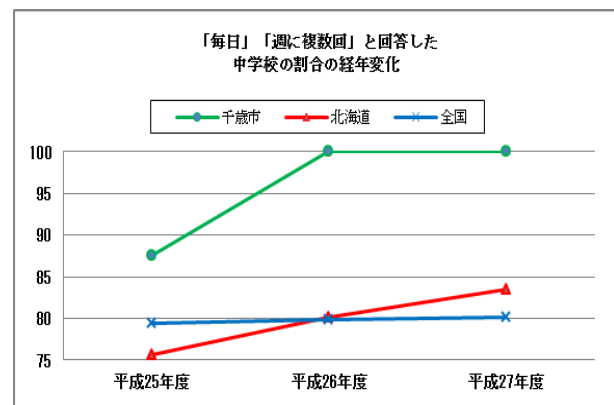
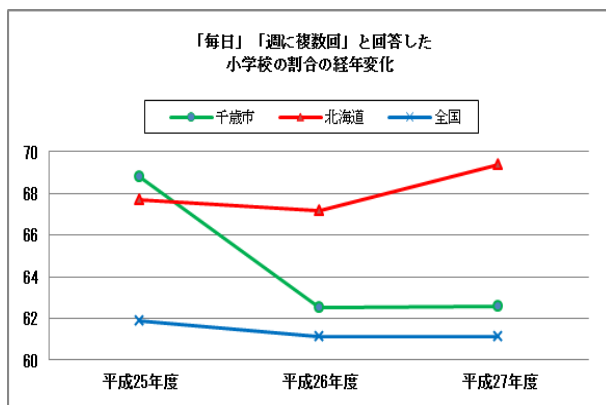
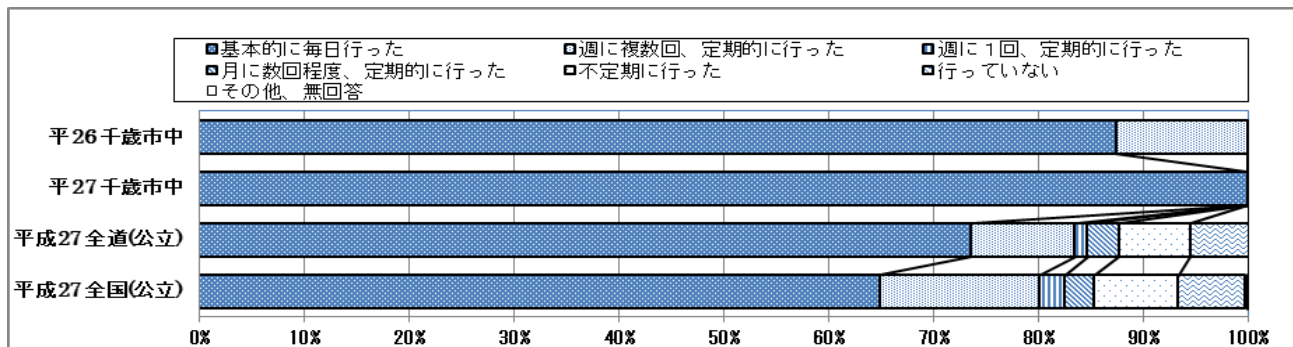
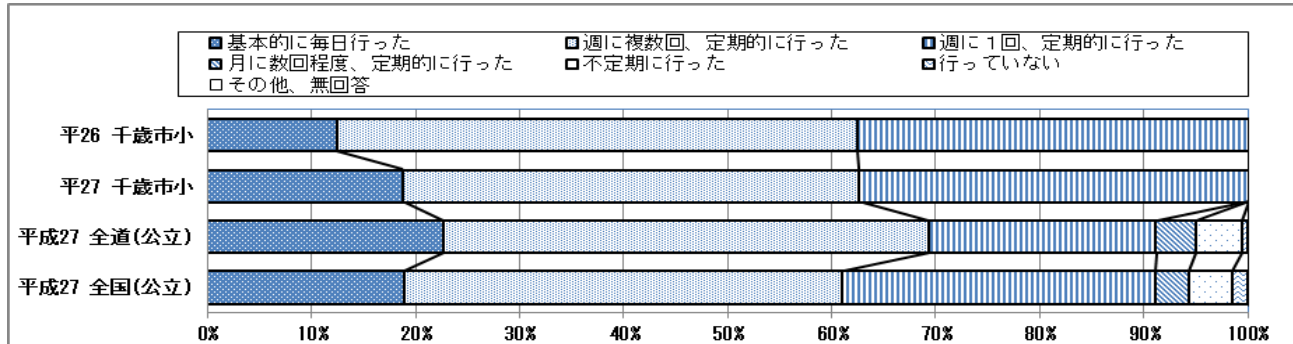
また、「理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えている」と回答した生徒も全国より相当高く、実社会や実生活と関連付けながら学んでいる状況が見られる。

今後も、観察・実験はもとより、原理や法則の理解を深めるためのものづくりなど、科学的な体験や自然体験を一層重視し、科学に関する基本的概念の定着を図り、科学的な見方、考え方を育成していくことが大切である。

6. 学校質問紙の結果

読書

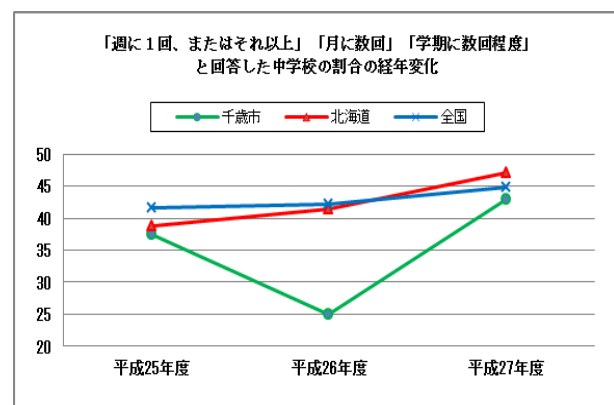
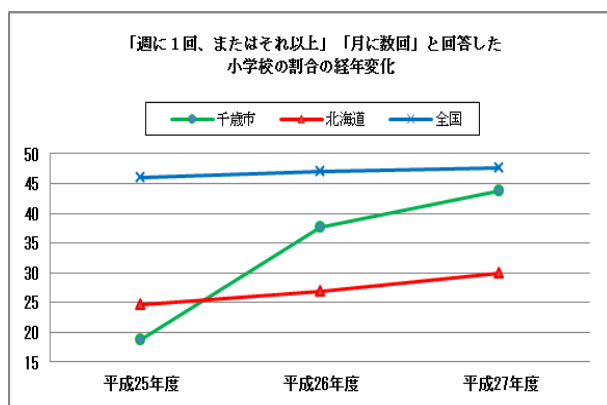
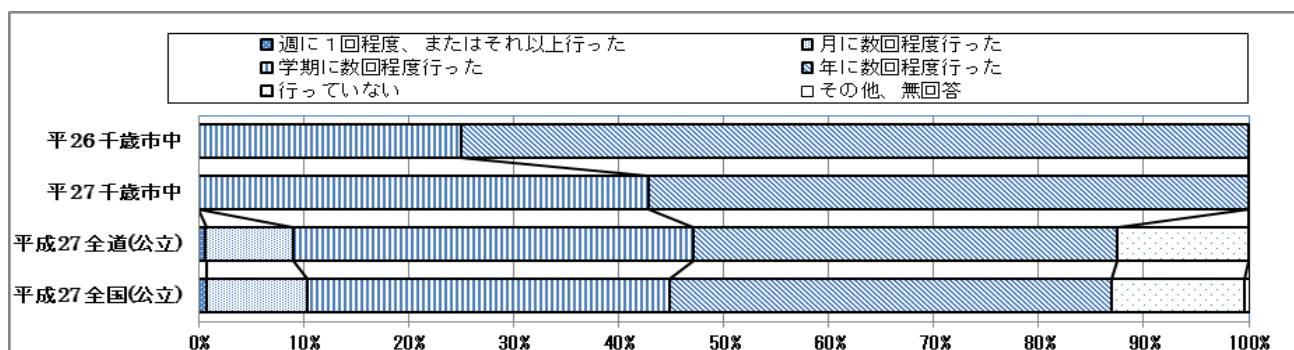
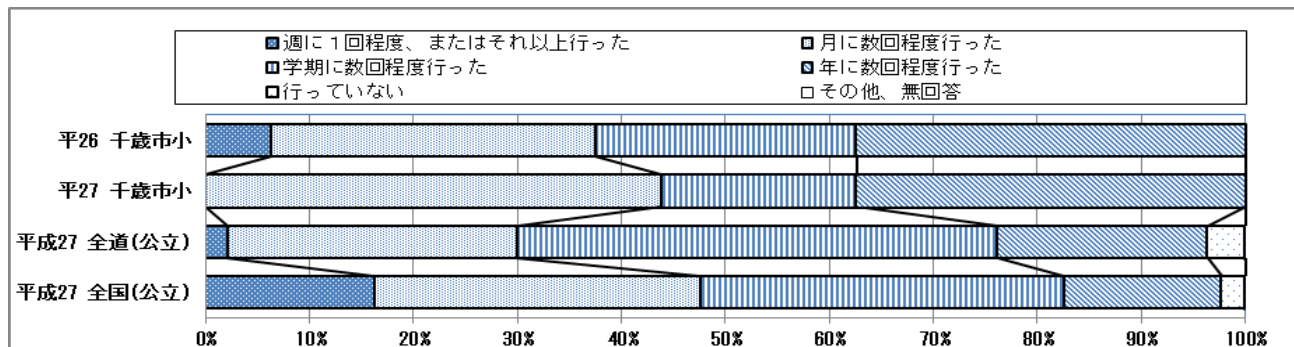
質問番号	質問事項
24	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、「朝の読書」などの一斉読書の時間を設けましたか



中学校では「朝の読書」が毎日実施されている。小学校においては、毎日または複数回実施が昨年度減少した状態のまま推移している。

「朝の読書」などの一斉読書の時間の設定について、中学校では全ての学校で「毎日」実施されている。小学校では、「毎日」或いは「週に複数回」実施は昨年度減少し、今年度も横ばい状態である。各小学校では漢字や計算練習などの「朝学習」にも取り組んでおり、一斉読書の回数を増やしづらい状況ではあるが、「学校教育基本計画」において「一斉読書の時間を週に複数回以上設ける」ことを目標にしていることから、「朝の読書」と「朝学習」の両立を図りながら、一斉読書の時間を週に複数回確保することが必要である。

質問番号	質問事項
25	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、学校図書館を活用した授業を計画的におこないましたか



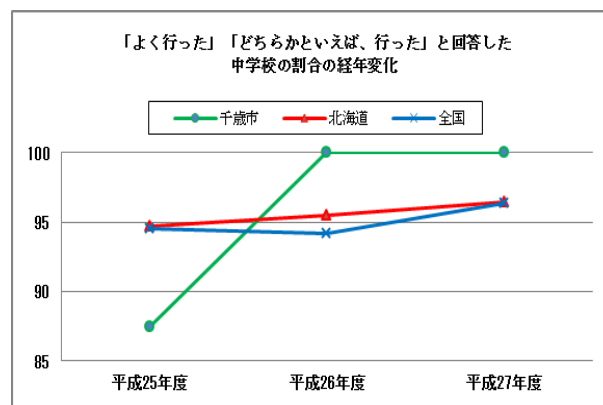
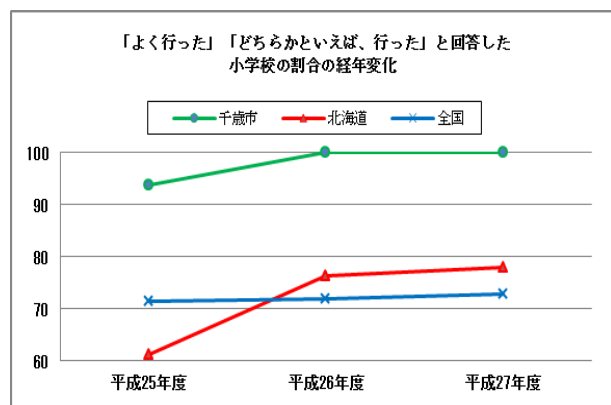
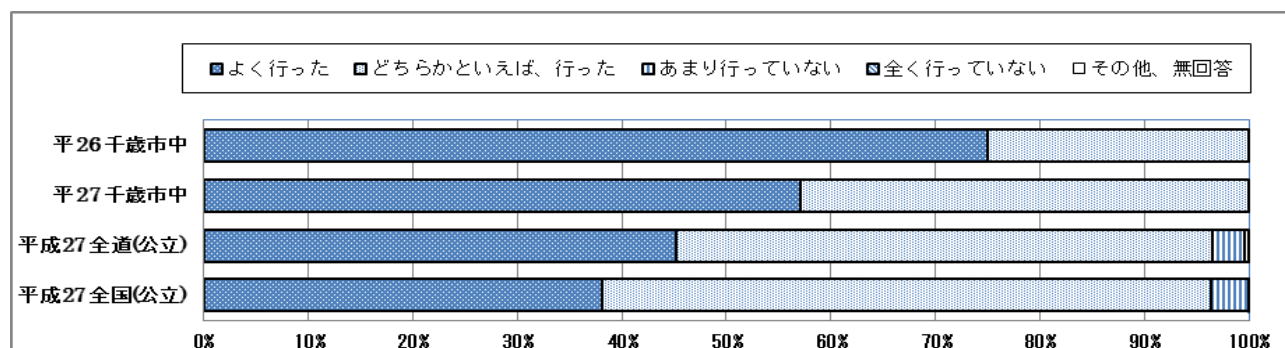
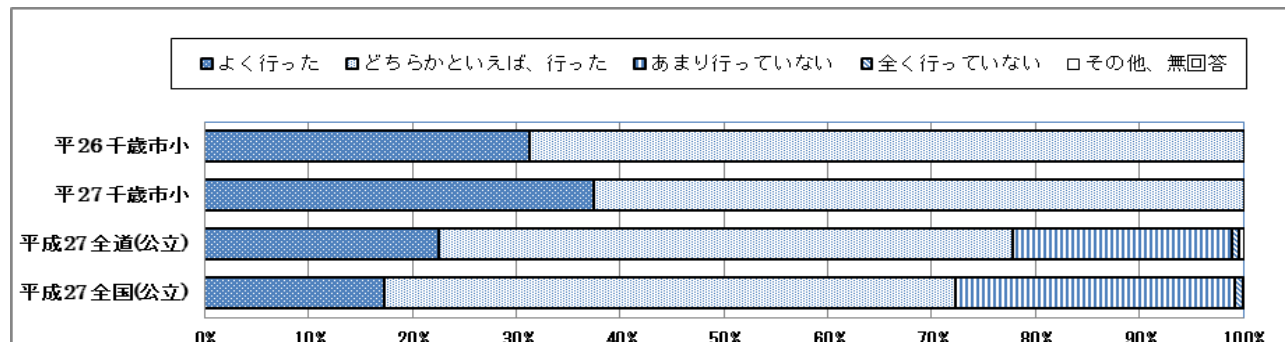
学校図書館の利用については、小学校では、前年度「週に1回程度、またはそれ以上行った」「月に数回程度行った」と回答した学校の割合は37.6%であったが、本年度は、「週1回程度、またはそれ以上行った」と回答した学校はなかったものの「月に数回程度行った」と回答した学校の割合は、43.8%と前年度より12.5ポイント増加し、全体的には学校図書館の利用が進んでいる状況が見られる。

一方、中学校においては前年度と同様に「週に1回程度、またはそれ以上行った」「月に数回程度行った」と回答した学校はなく、利用頻度が低い状況がみられる。しかし、「学期に数回程度行った」学校は、前年度よりも17.9ポイント増加しており改善の兆しがみられる。

今後は、学校図書館司書（市立図書館より派遣）と司書教諭の連携のもと、児童生徒が学習に使用する資料や児童生徒による学習の成果物などを蓄積し、活用できるようにするとともに、総合的な学習の時間等において、年間指導計画に学校図書館の利用を位置づけ、資料を集めて読み取ったり、自分の考えをまとめて発表したりする学習活動に取り組ませていくことが必要である。

キャリア教育

質問番号	質問事項
41	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか

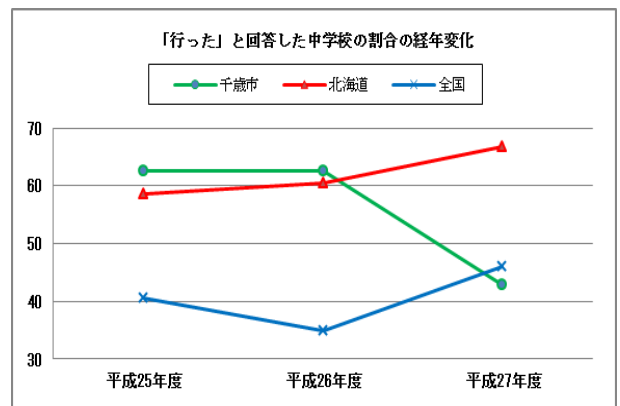
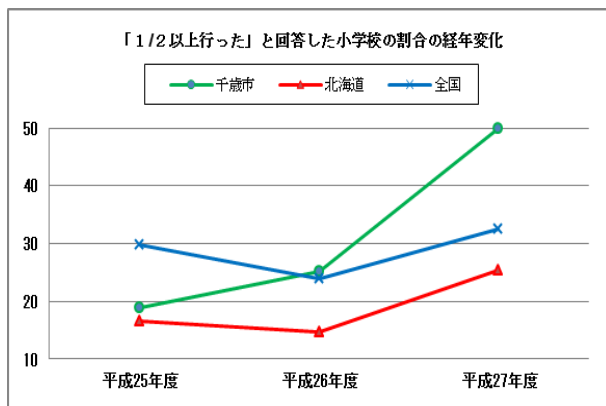
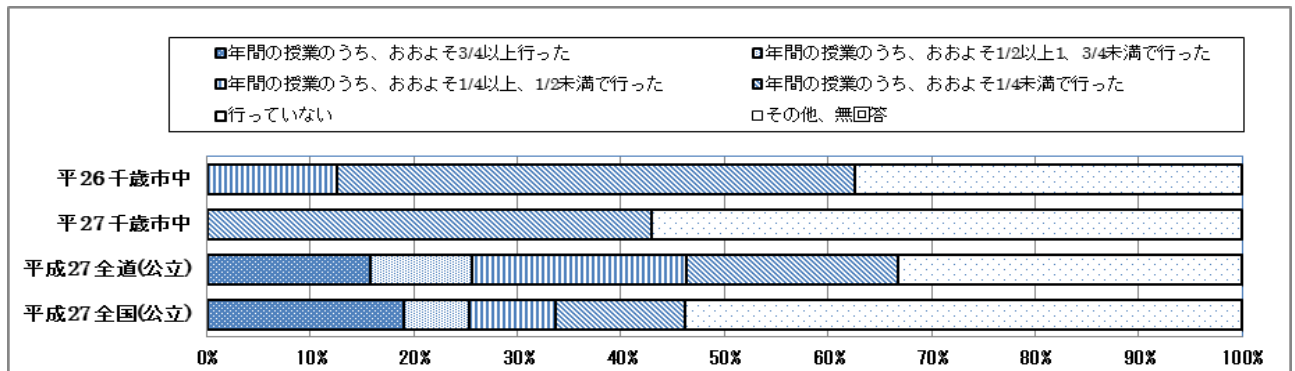
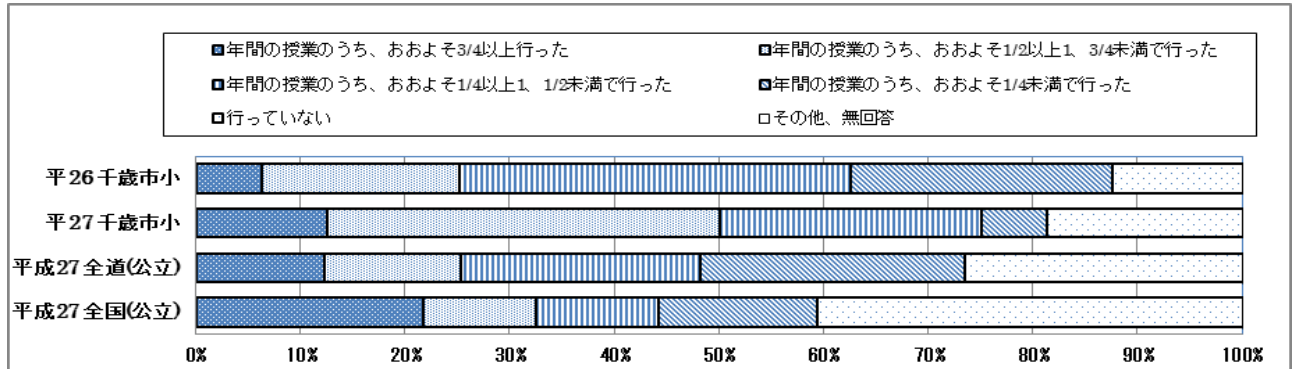


小・中学校ともに積極的な取組が行われている。

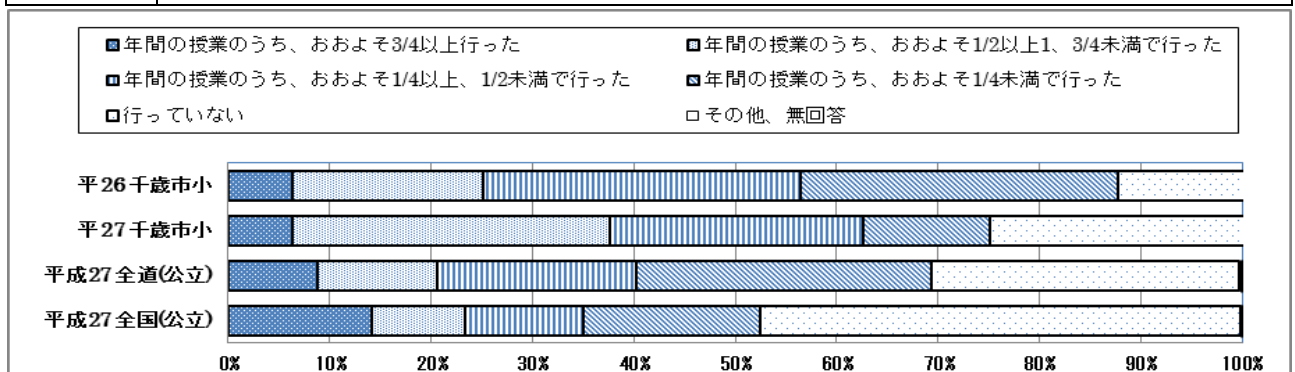
「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をよく行った」と回答した小学校は、前年度より6.2ポイント増加しており、「どちらかといえば行った」と回答した学校を合わせると、前年度と同様に100%となっている。中学校は、「よく行った」と回答した学校は、17.9ポイント減少したものの、全国を大きく上回っており、小学校と同様に「どちらかといえば行った」と回答した学校を合わせると100%となっている。このように、市内の小中学校においては、キャリア教育に積極的に取り組んでいる状況がみられるが、児童生徒質問紙において「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童生徒は、全国を100とした指数で小学校95.3ポイント、中学校96.0ポイントとなっており、一層の指導の充実を図る必要がある。今後は、各学校において、ボランティア活動や地域人材の活用、職場体験学習等に取り組み、社会への視野を広げ、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢を育て、夢や目標をもって学校生活を送らせることが必要である。

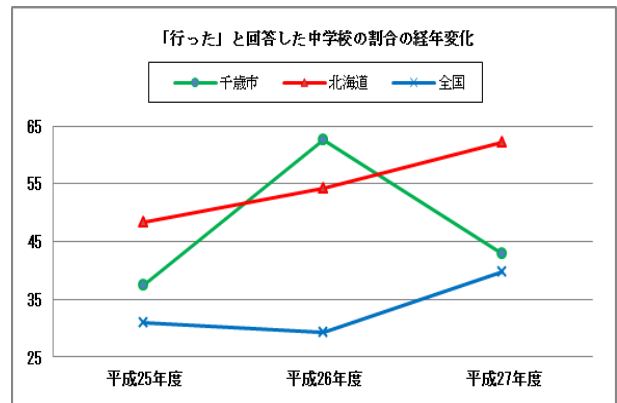
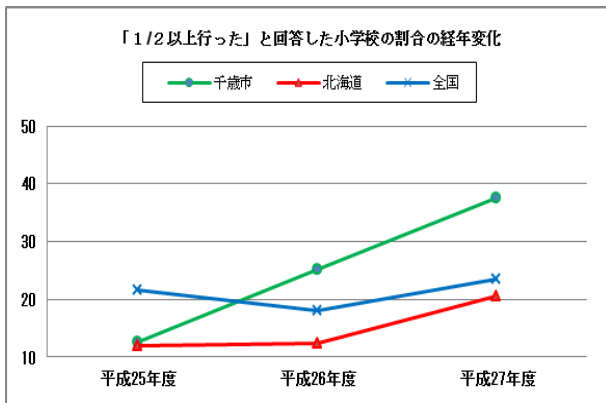
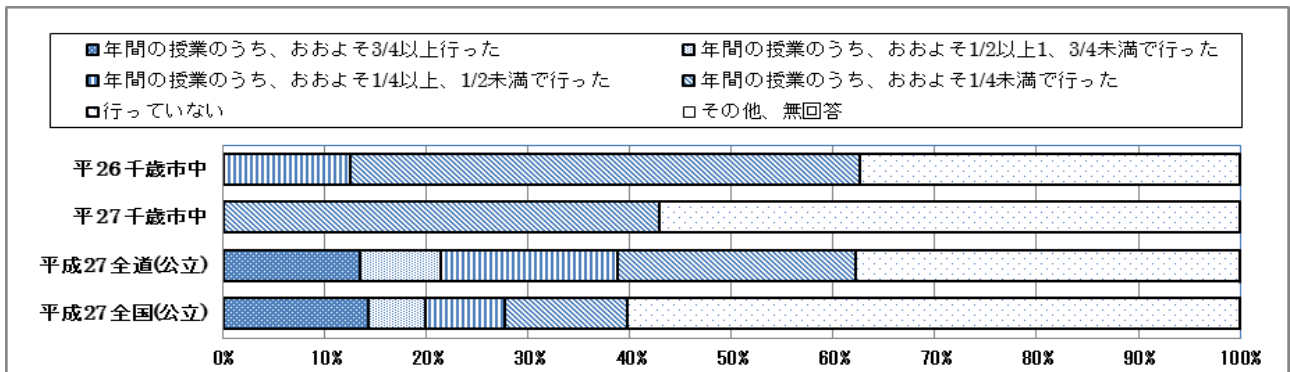
習熟度別少人数指導

質問番号	質問事項
55	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにしましたか



質問番号	質問事項
56	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱いましたか





小学校では「習熟の遅いグループ」に対しても「習熟の早いグループ」に対しても実施状況が全国を上回る。中学校においては全国と同様。

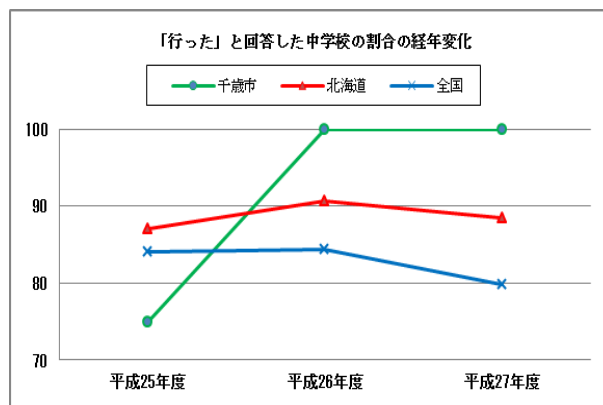
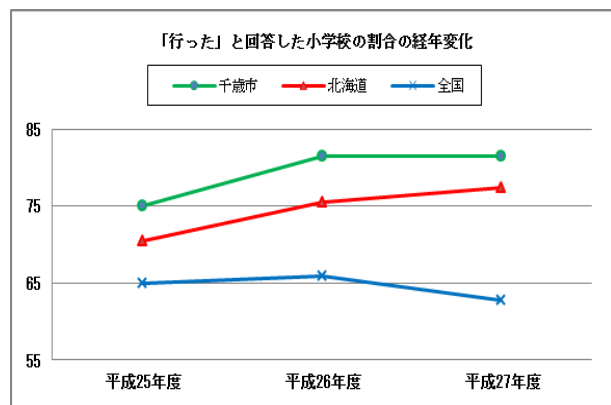
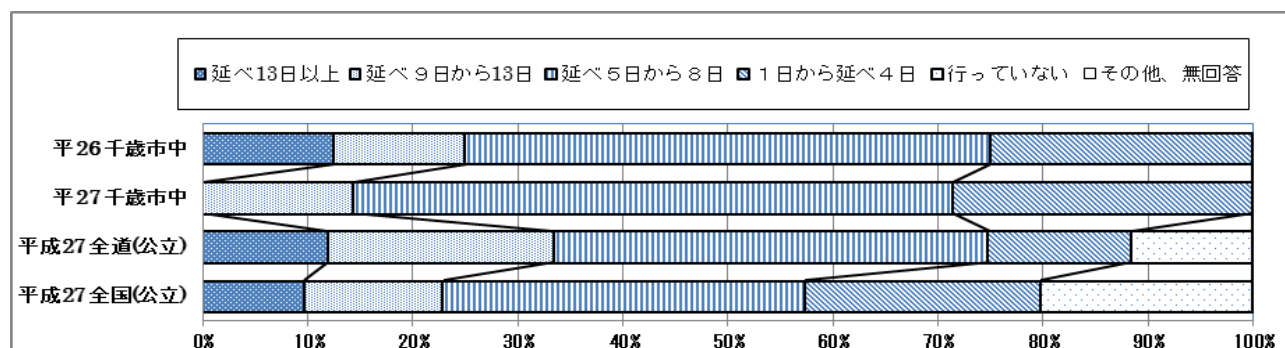
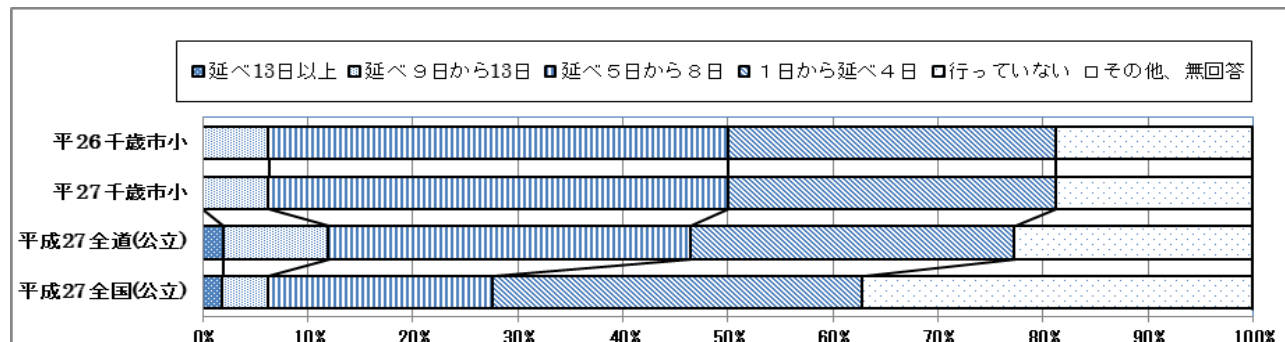
小学校においては、「習熟の遅いグループ」「習熟の早いグループ」とともに年間の授業の二分の一以上で習熟度別少人数指導を行っている割合（遅いグループ：千歳市 50%、全国 32.4%）（早いグループ：千歳市 37.6%、全国 23.4%）が全国に比べてかなり高い。3か年の経年変化においても大幅な上昇が見られ、市の施策として小学校 13 校に配置している「学習支援員」による取組が進んでいる成果と捉えることができる。今後も両者に対する積極的な対応が求められる。

一方、中学校においては、習熟度別少人数指導の実施状況が昨年度より遅いグループ、早いグループともに 19.6 ポイント減少している。生徒質問紙において、「数学が好き」「数学の授業の内容がわかる」「数学の勉強は大切だと思う」と回答した生徒が、全国を 100 とした指数でそれぞれ 87.0 ポイント、87.7 ポイント、96.5 ポイントであり、ここ 3 年間の経年変化からも数学に対する関心・意欲の低下傾向がみられることや全国・全道では習熟度別少人数指導の実施状況が増加していることなども踏まえ、中学校では校内における指導体制や授業後半に習熟度別の指導を行うなど具体的な工夫を検討し積極的に対応する必要がある。

今後は、「学校教育基本計画」において「個に応じたきめ細かな学習指導」を掲げ、「算数・数学の授業において、習熟の遅いグループに少人数指導を行い、習得できるように実施している学校の割合」を 100%とする目標を設定していることから、「指導方法の工夫改善による加配」や「学習支援員」の配置などを活用し、児童・生徒の習熟の程度に応じた指導の一層の充実を図っていくことが必要である。

長期休業中の学習サポート

質問番号	質問事項
28	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、長期休業日を利用した補足的な学習サポートを実施しましたか（実施した日数の累計）



中学校においては全ての学校で実施。小学校においては実施校の割合は前年度と同様。

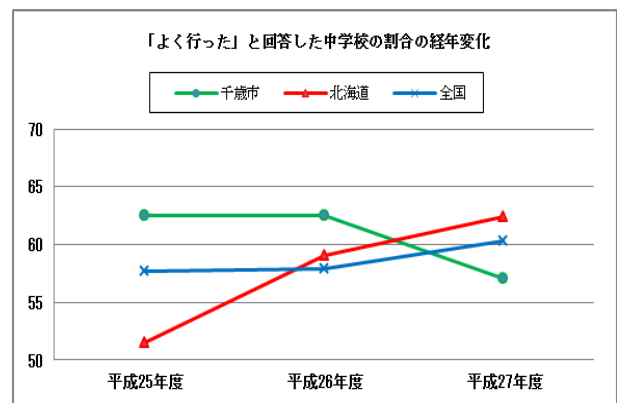
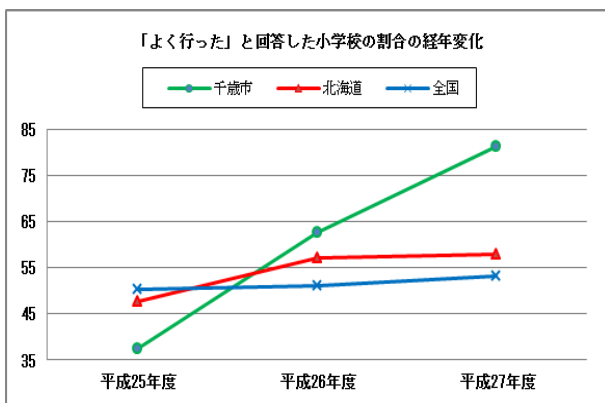
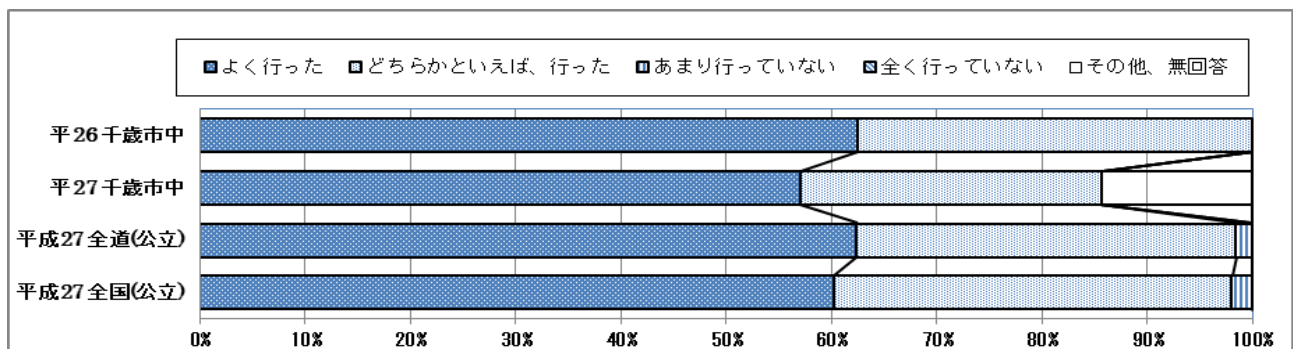
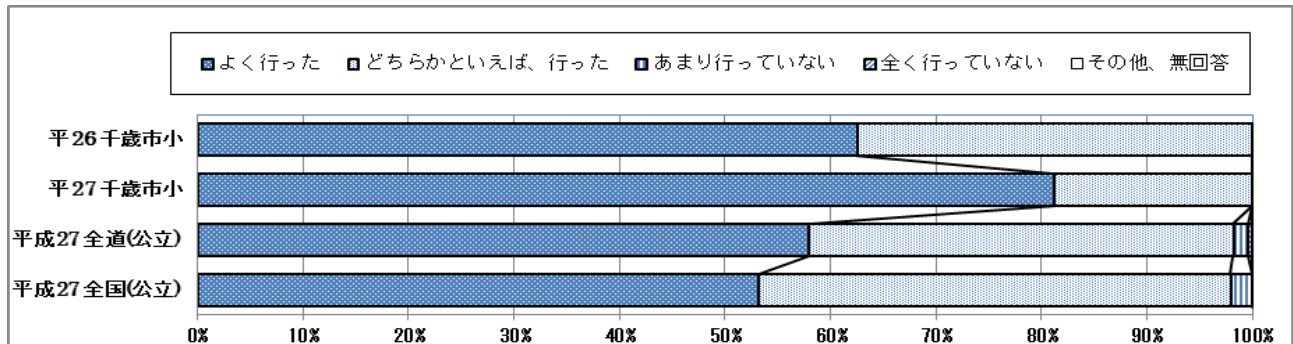
長期休業中の学習サポートを実施している学校は、昨年度同様(小81.2%、中100%)となっている。

未実施校のうち小規模校では、授業日における個別の指導が容易なことから、日常的に補足的な学習が行われているが、子ども一人一人の教育的ニーズに応え、きめ細かな指導の充実を図る観点からも長期休業中の補足的な学習サポートの取組を進めていく必要がある。

長期休業中の補足的な学習については、千歳科学技術大学の支援を受けてサポート体制を整えているが、今後、実施日数、指導内容、指導体制の充実を図り、補足的な学習はもとより、発展的な学習を含め、長期休業中の学習サポートの質の向上を図るとともに、実施率100%を目指す必要がある。

漢字・語句の指導

質問番号	質問事項
64	調査対象学年の児童（生徒）に対する国語の指導として、前年度までに、漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業を行いましたか



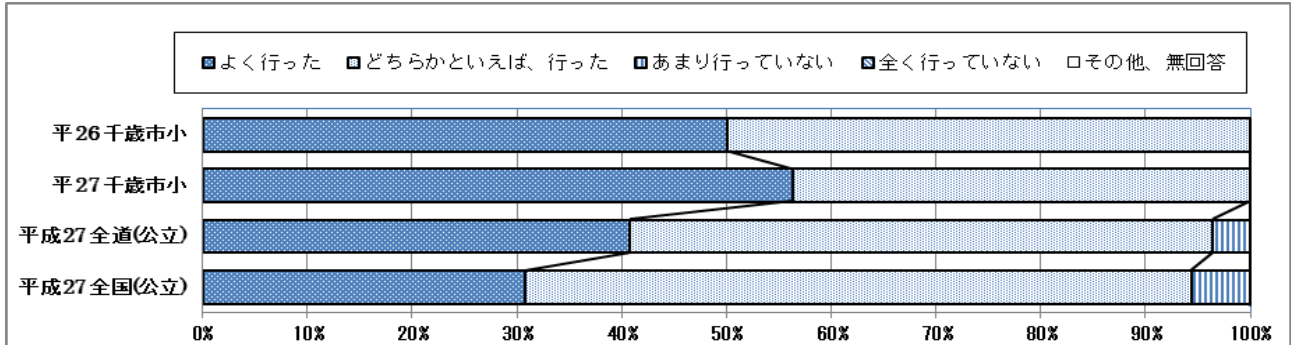
小学校において積極的な指導が行われている。中学校においては全国との差が広がった。

「よく行った」と回答した学校は（小81.3%、中57.1%）であり、全国（小53.2%、中60.3%）と比較しても小学校で積極的な取組が行われている。中学校については、昨年度と比べ「よく行った」と回答した学校が減少し3.2ポイント全国との差が広がった。

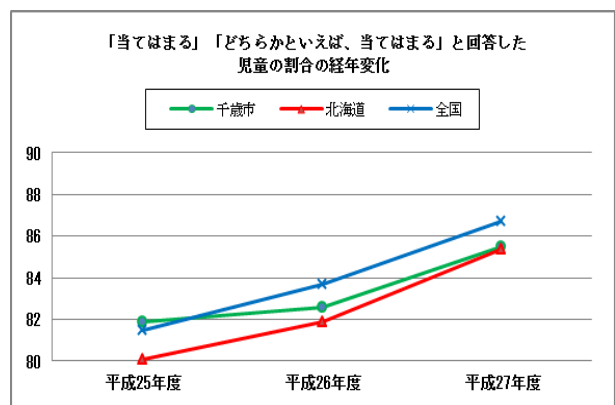
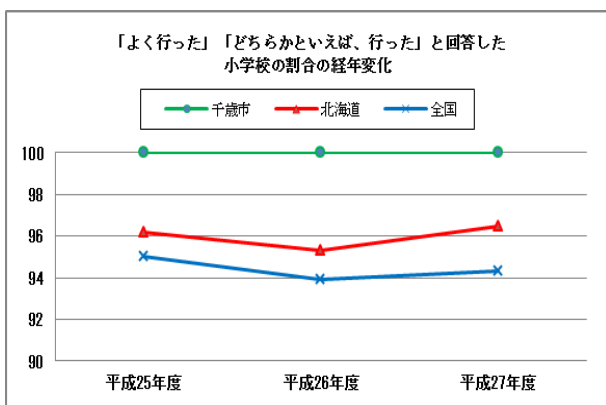
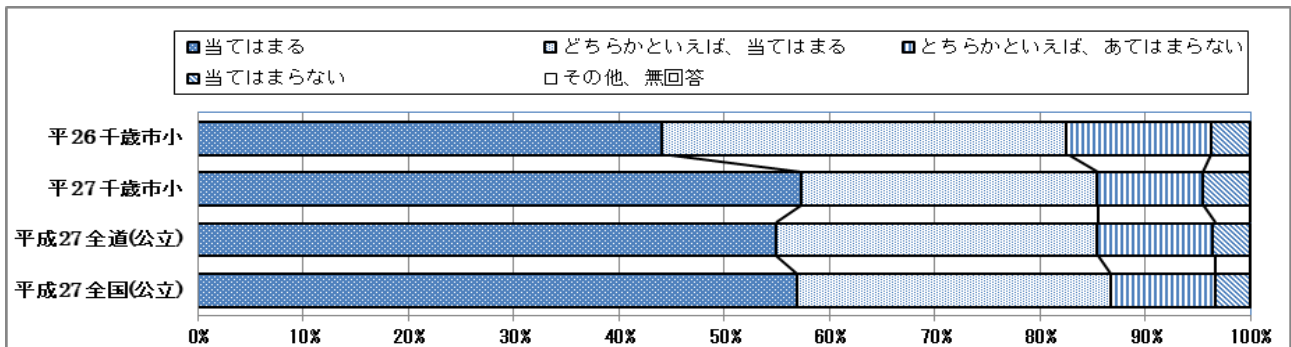
今後は、知らない熟語の意味をその漢字の訓読みから推測したり、話や文章の中で実際に使われている語句の意味を考え、似た意味をあらわす別の言葉に言い換えたりするなどの学習活動を意図的に授業に取り入れ、文脈の中で漢字や語句を適切に使えるようにすることが大切である。

授業に対する教師と児童生徒との意識の違い（*児童・生徒質問紙の回答と比較）

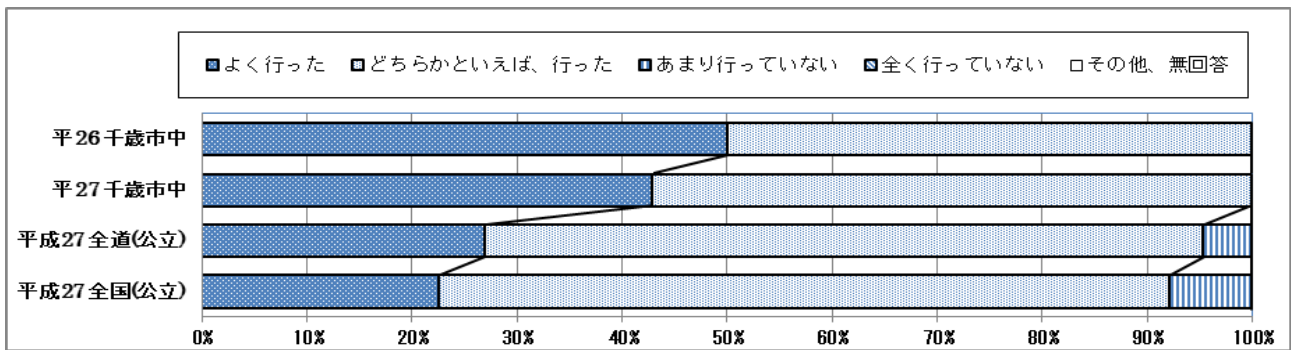
質問番号	質問事項（*学校質問紙）
32	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか



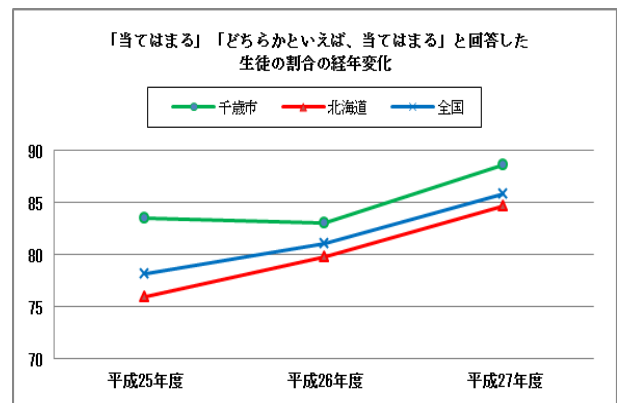
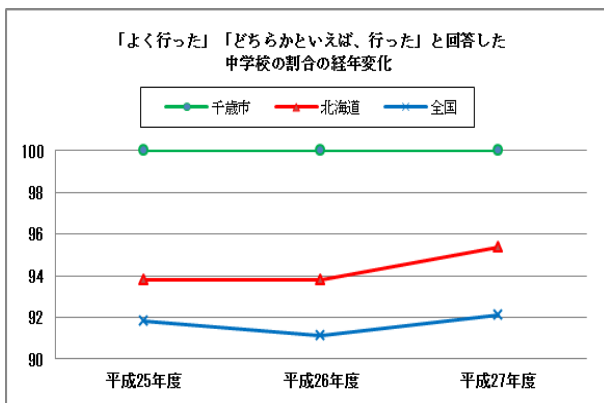
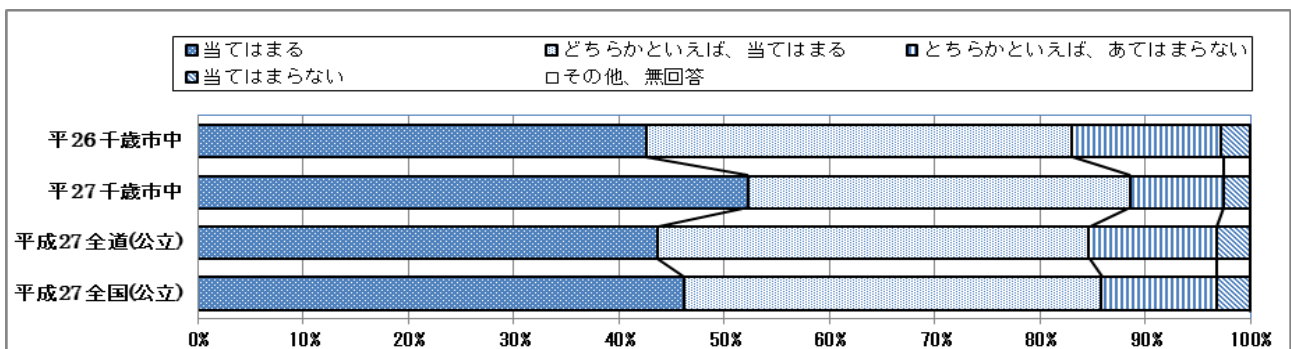
問番号	質問事項（*児童・生徒質問紙）
38	5年生までに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか



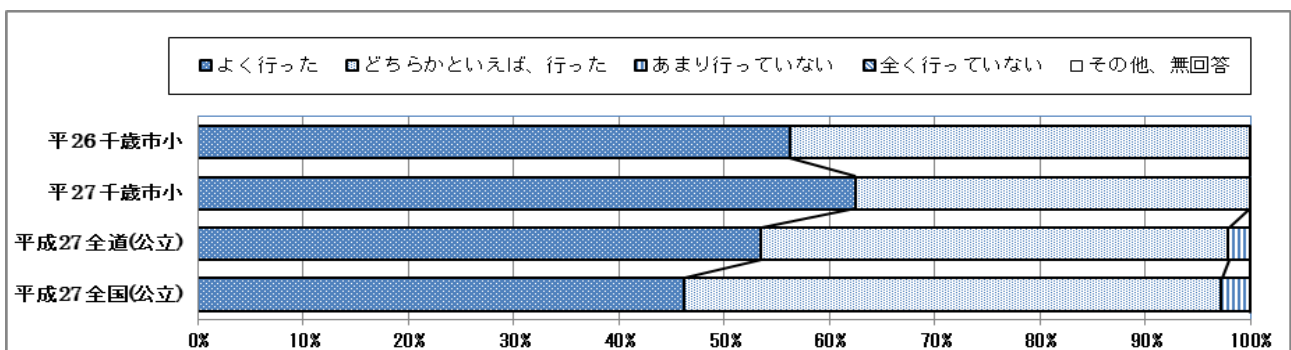
質問番号	質問事項（*学校質問紙）
32	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか



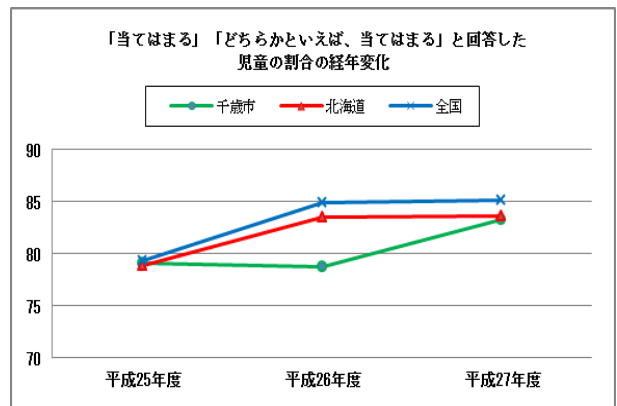
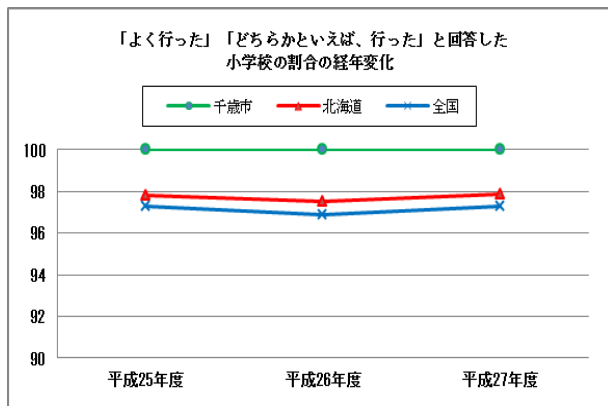
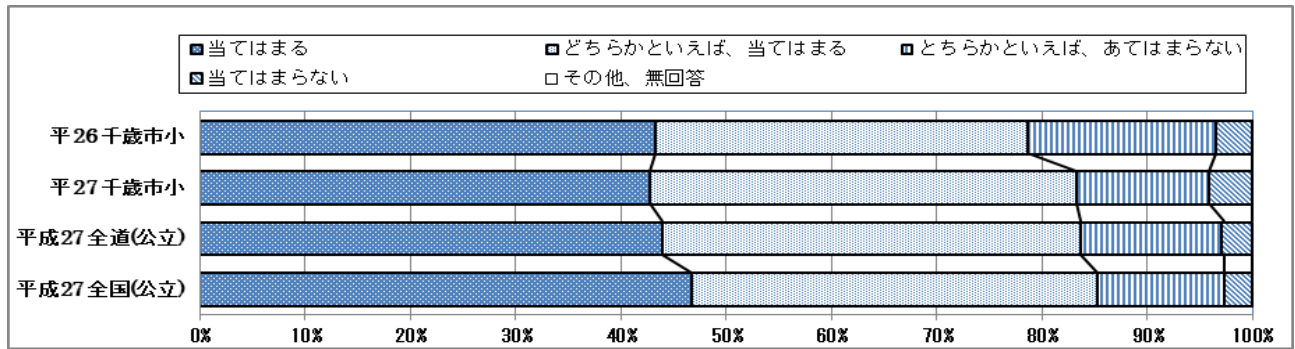
質問番号	質問事項 (* 児童・生徒質問紙)
38	中学校1, 2年生のときに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか



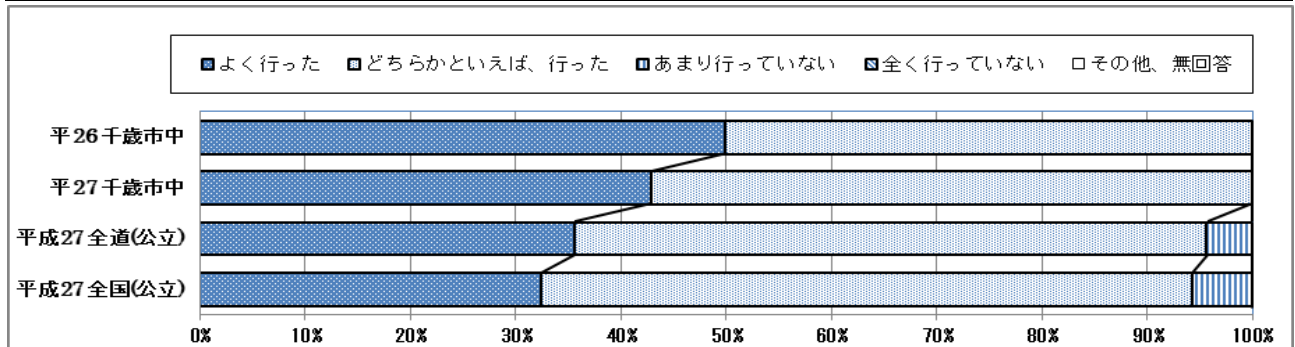
質問番号	質問事項 (* 学校質問紙)
33	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか



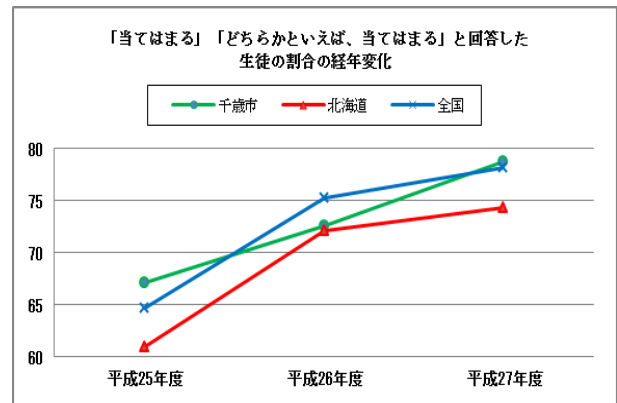
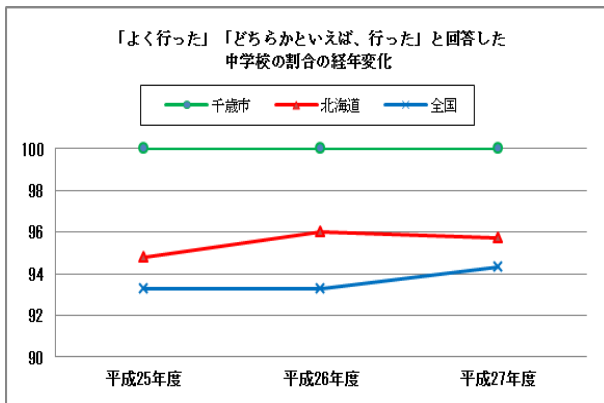
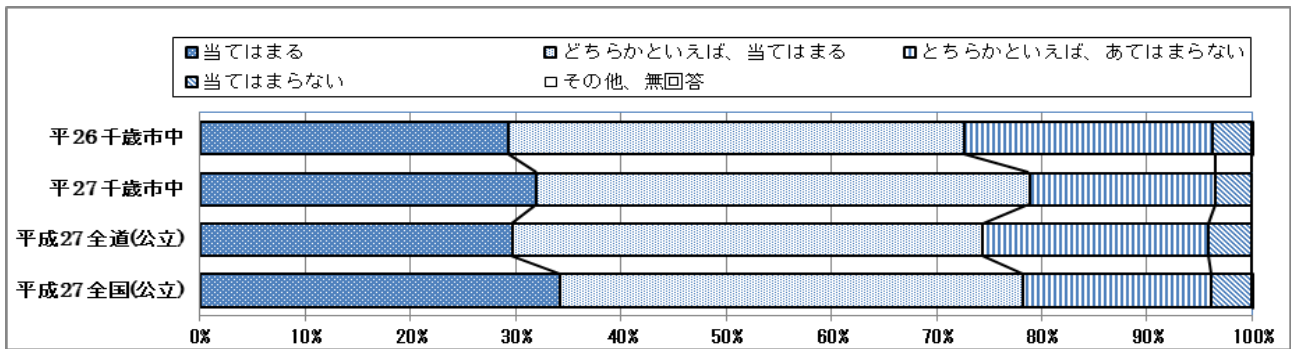
質問番号	質問事項（* 児童質問紙）
39	5年生までに受けた授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか



質問番号	質問事項（* 学校質問紙）
33	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか



質問番号	質問事項（* 生徒質問紙）
39	中学校1, 2年生のときに受けた授業では、学級の生徒との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか



授業に対する教師と児童生徒の意識は依然隔たりがあるものの、昨年度より改善が見られる。

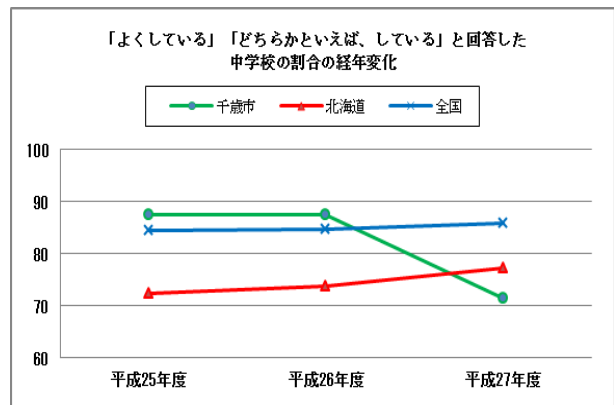
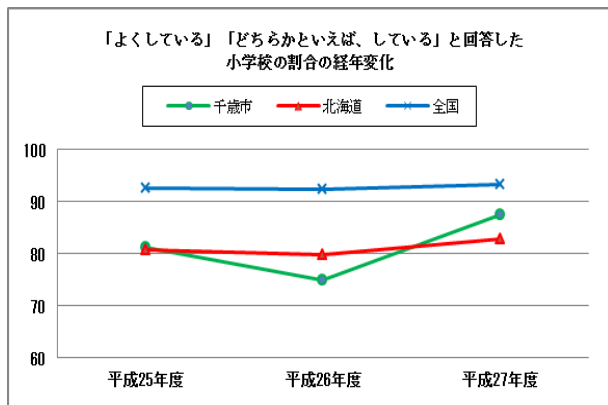
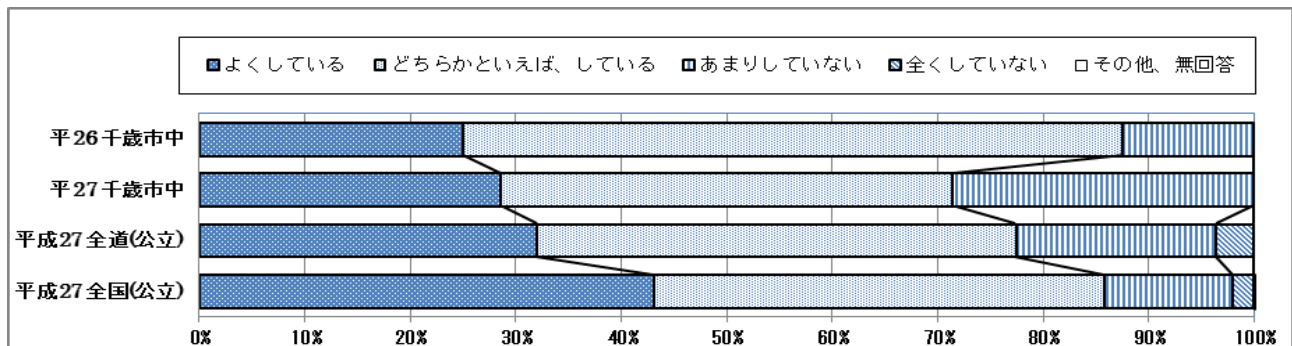
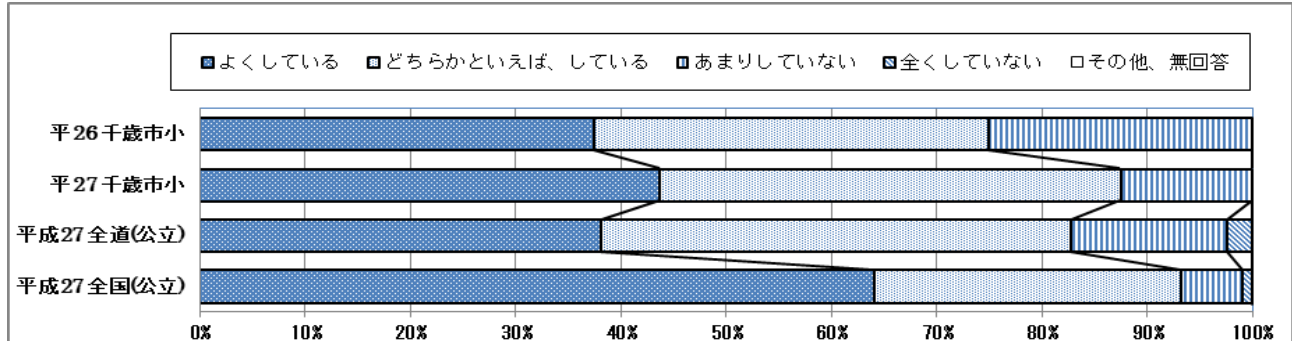
学校質問紙では「児童生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしているか」という質問に対して、小学校・中学校全ての学校が「よく行った」「どちらかといえば、行った」と回答しているが、児童生徒質問紙では「自分の考えを発表する機会が与えられていたと思うか」との質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した小学生は85.5%、中学生は88.6%となっている。

また、学校質問紙では「児童生徒に対して、発言や活動の時間を確保して授業を進めたか」という質問に対して、小学校・中学校全ての学校が「よく行った」「どちらかといえば、行った」と回答しているが、児童生徒質問紙では、「授業で、話し合う活動をよく行っていると思うか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した小学生は83.3%、中学生では78.8%となっている。

年々、教師と指導を受ける児童生徒の間の意識差は縮小してきている。児童生徒による授業評価を実施し、より一層、子どもの視点に立った授業改善を進めていく必要がある。

講師等を招聘した研修の実施

質問番号	質問事項
小100 中98	学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っていますか

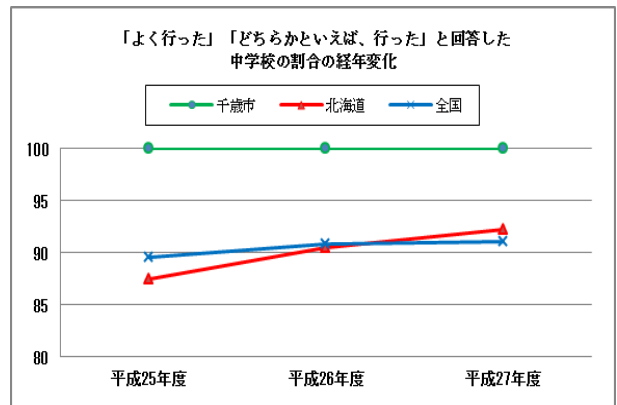
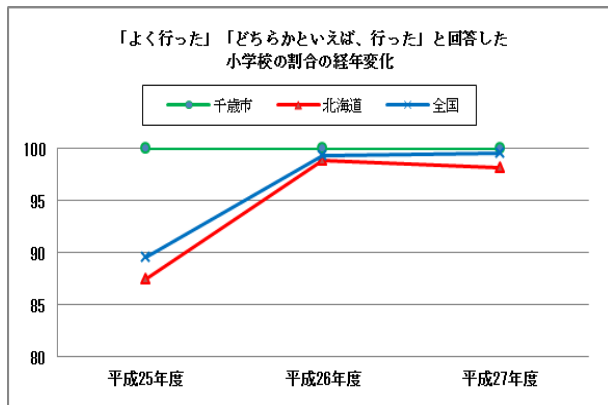
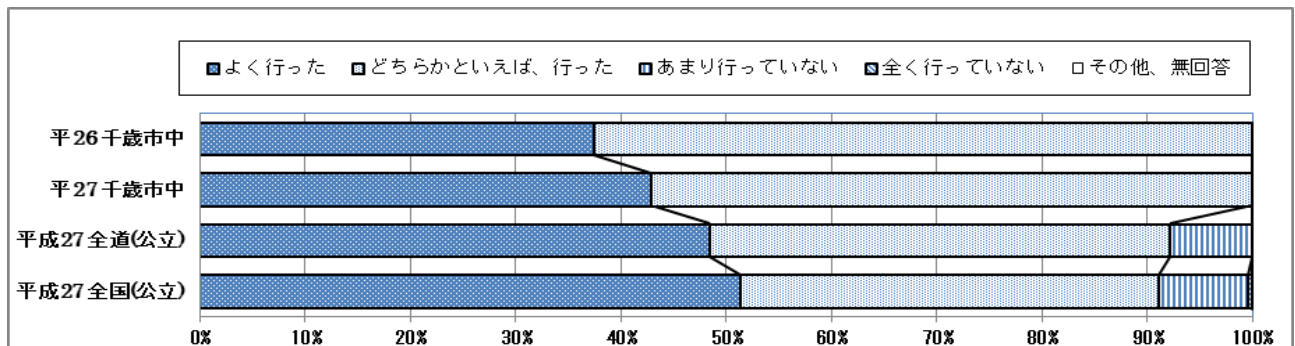
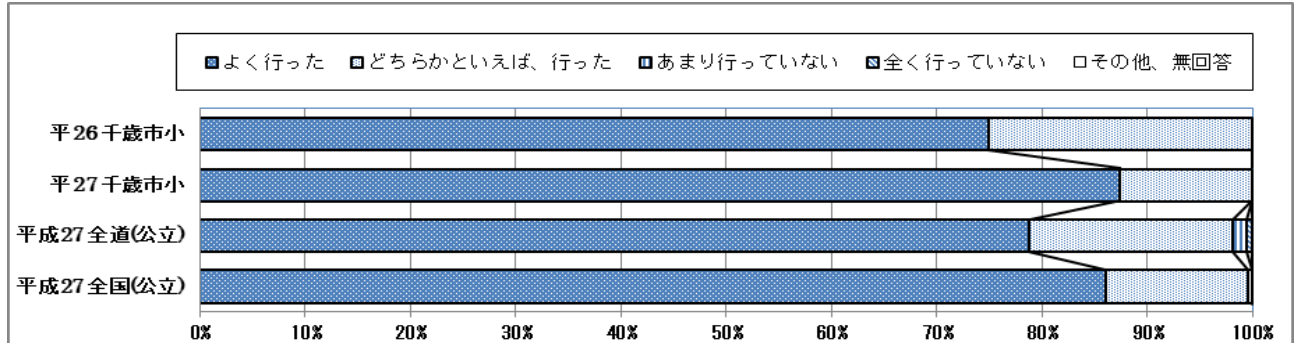


小学校では全国との差が縮小したが、中学校では差が広がった。

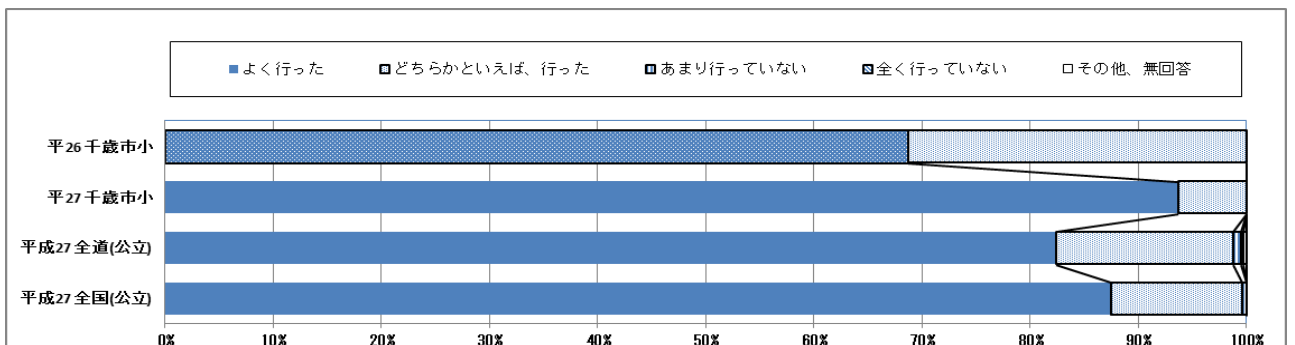
小中学校ともに「よくしている」と回答した学校（小43.8%、中28.6%）は昨年度（小37.5%、中25.0%）より増加しているが全国（小64.2%、中43.1%）と比べると実施率が低い。「学校教育基本計画」において、学校でテーマを決め、講師を招聘するなど校内研修を行った学校の割合を100%とする目標を掲げていることから、今後は、「学校力向上に関する総合実践事業」や「連携研修事業」の推進校を参考に校内の研修体制の充実を図るとともに、外部講師を招聘した研修を年間計画に位置付け、教職員の専門性の向上を図っていく必要がある。また、学校が外部講師を招聘することについて、行政の支援が求められる。

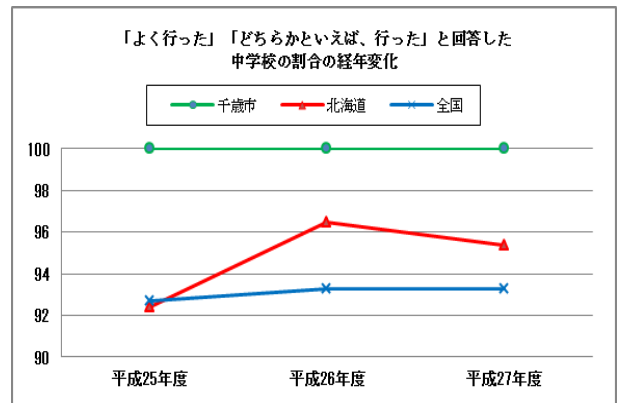
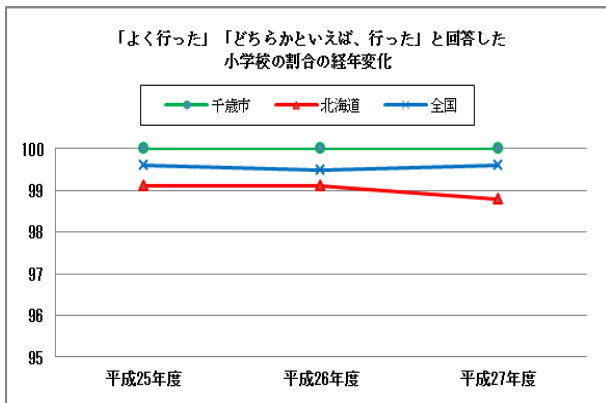
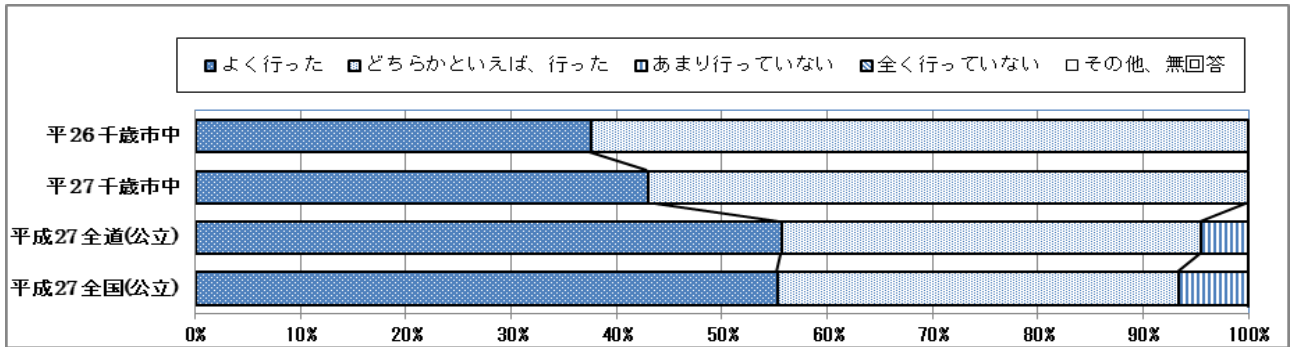
家庭学習（宿題）

質問番号	質問事項
小 8 9 中 8 7	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか



質問番号	質問事項
小 9 1 中 8 9	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、算数（数学）の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか



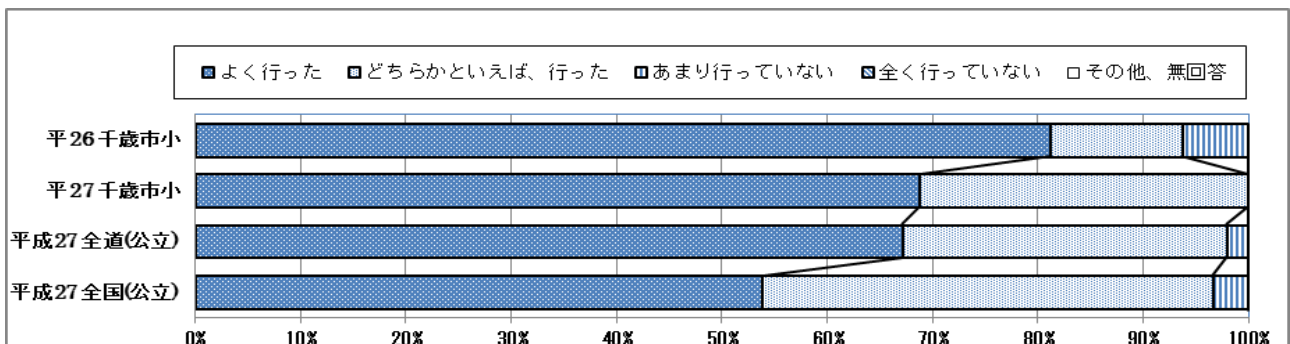


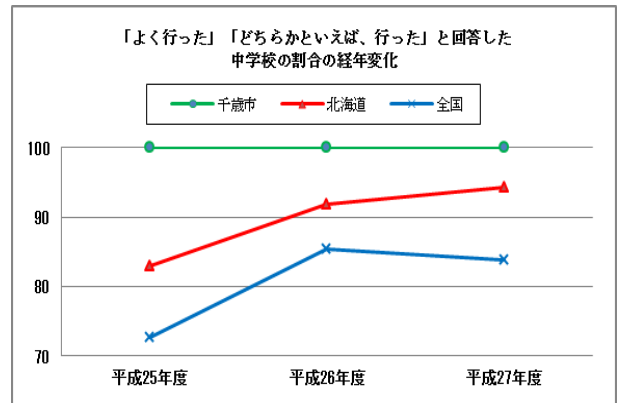
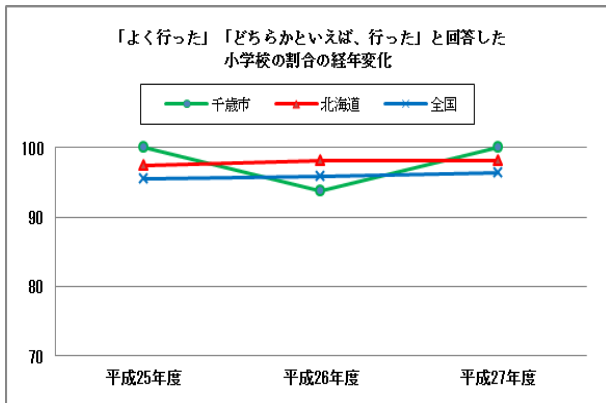
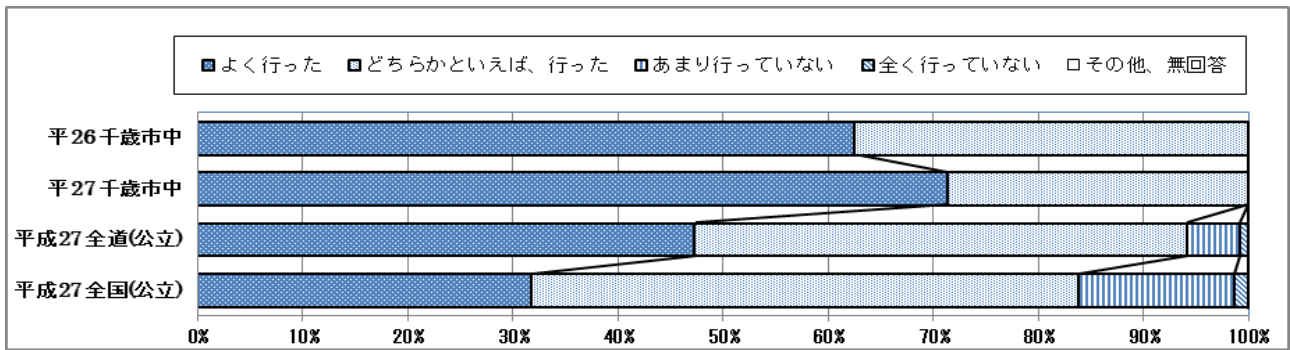
国語、算数（数学）の課題（宿題）を与えている割合は、小学校、中学校ともに肯定的回答が100%である。

「家庭学習の課題（宿題）を与えたか」という質問に対し、「よく行った」と回答した学校は国語・算数（数学）の平均で（小90.7%、中42.9%）であり、昨年度（小71.9%、中37.5%）と比較すると増加傾向にあり、「よく行った」「どちらかといえば、よく行った」と回答した学校を合わせると、小学校、中学校ともに100%である。

児童生徒質問紙による「家庭学習の時間」は小学校では全国との差が縮まっているが、中学校では全国との差が拡大していることから、特に中学校において、課題（宿題）の教科や量について検討し取組を進める必要がある。

質問番号	質問事項
小93 中91	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、保護者に対して児童（生徒）の家庭学習を促すような働きかけを行いましたか（国語／算数（数学）共通）



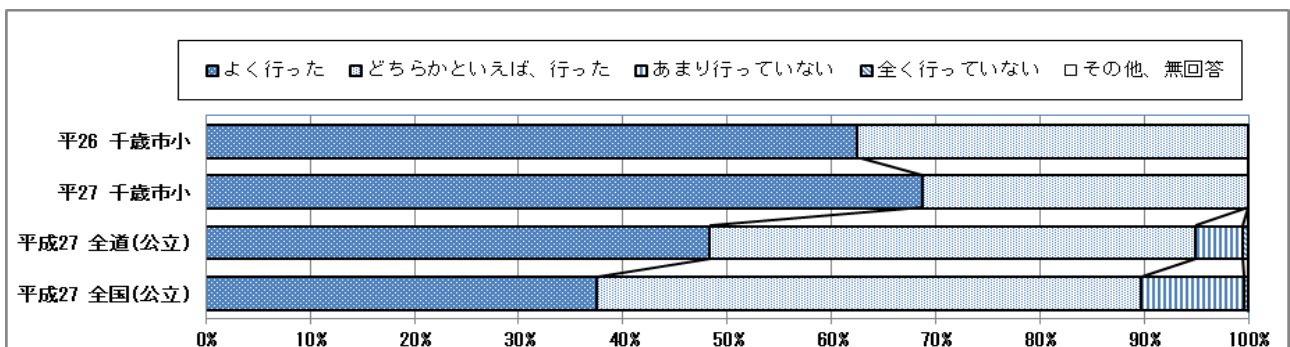


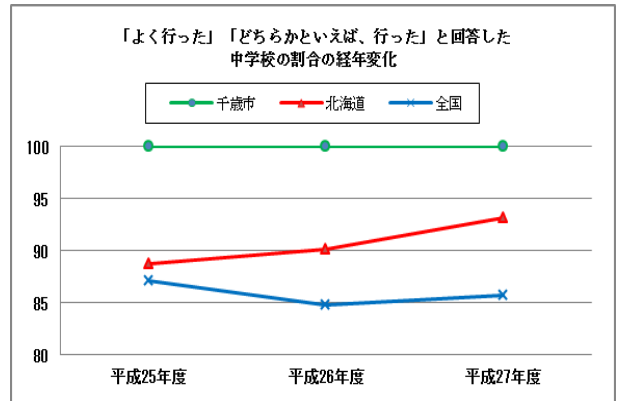
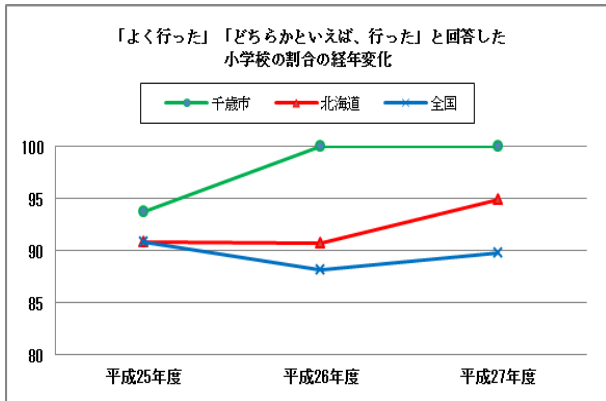
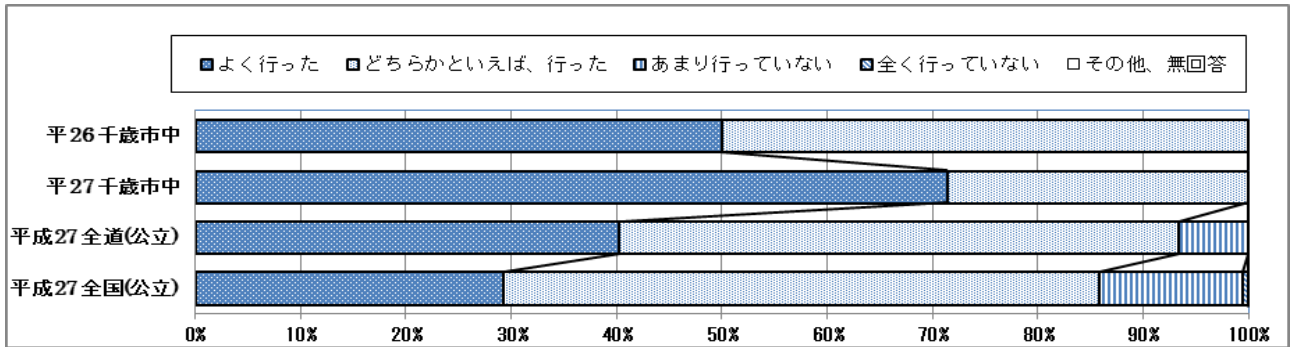
保護者への働きかけは小学校・中学校ともに「よく行った」「どちらかといえば、行った。」合わせて100%である。

「保護者に対して家庭学習を促す働きかけを行ったか」という質問に対し、「よく行った」と回答した学校は小学校 68.8%、中学校 71.4%となっており、全国（小 53.8%、中 31.8%）と比較すると大きく上回っている。「よく行った」「どちらかといえば、よく行った」と回答した学校を合わせると、小学校、中学校ともに 100%である。

これらは、小中の連携のもとに、「家庭学習の手引き」を作成するなど、共通の取組が具体化され、定着してきていることの成果と考える。

質問番号	質問事項
小 9 6 中 9 4	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、児童（生徒）に家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えるようにしましたか（国語／算数（数学）共通）

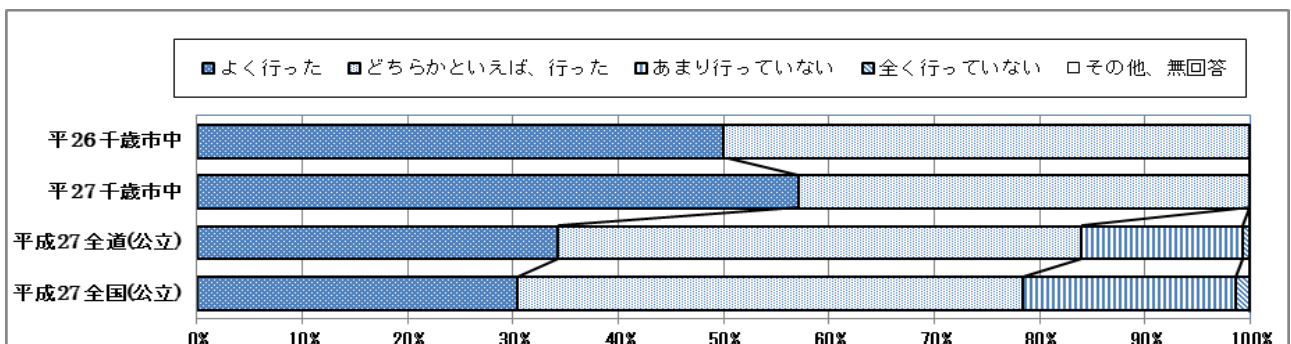
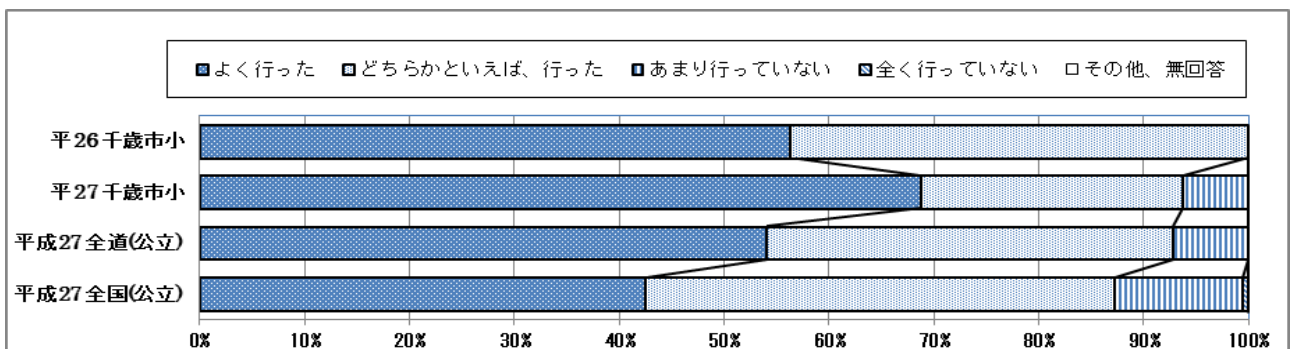


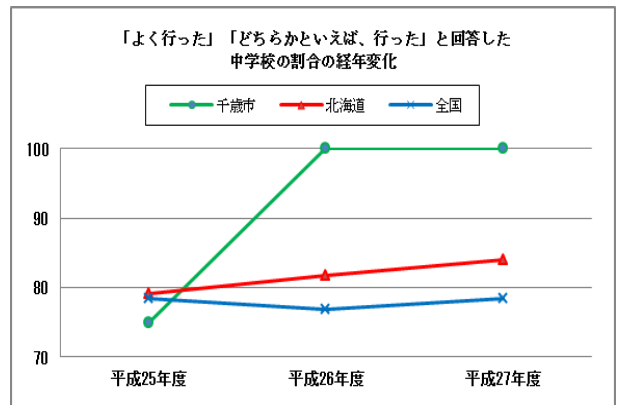
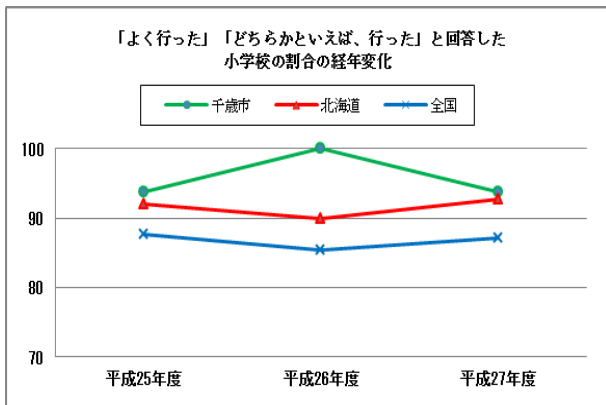


「児童・生徒に対して家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えたか」という質問に対して「よく行った」と回答した学校は小学校68.8%、中学校71.4%となっており、全国(小37.5%、中29.2%)と比較すると小中ともに大きく上回っている。昨年度の市内の状況(小62.5%、中50.0%)とくらべても積極的に行われている。

「よく行った」「どちらかといえば、よく行った」と回答した学校を合わせると、小学校、中学校ともに100%である。

質問番号	質問事項
小94 中92	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図りましたか(国語/算数(数学)共通)

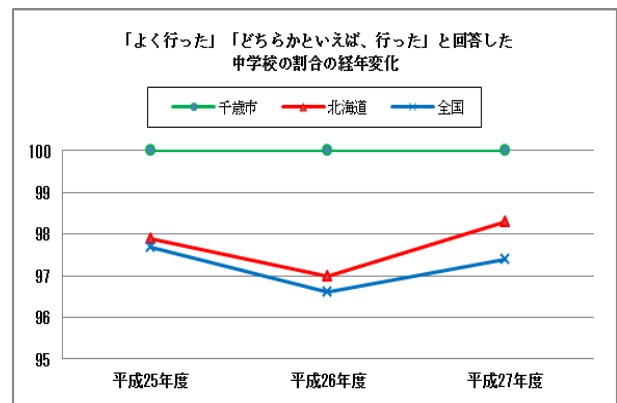
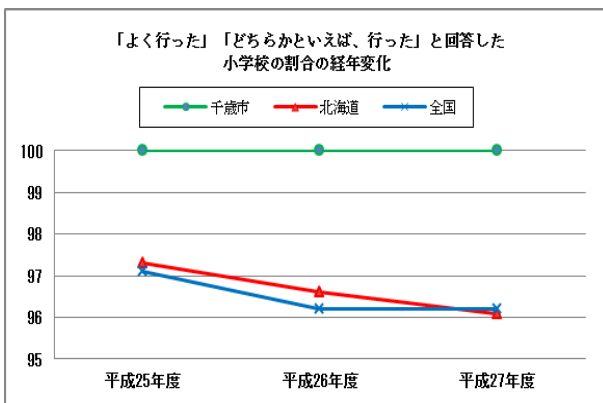
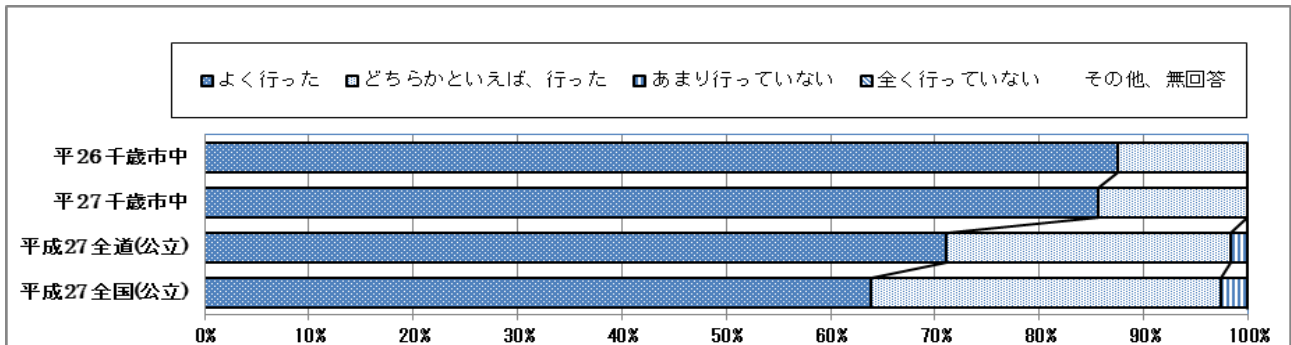
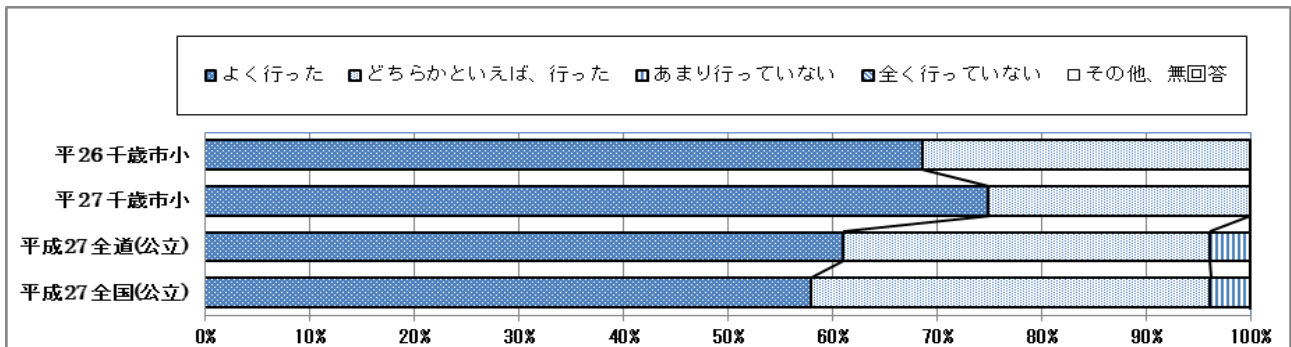




「家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図ったか」という質問について、「よく行った」と回答した学校は小学校68.8%、中学校57.1%となっており、全国（小42.4%、中30.5%）と比較しても大きく上回っている。家庭学習については小中連携の視点からも取組が進められており、今後も一層の充実を図りながら校内で一貫した指導を徹底し、定着させていく必要がある。

学習規律

質問番号	質問事項
44	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持を徹底しましたか



小学校・中学校ともに全国を上回る取組がなされている。

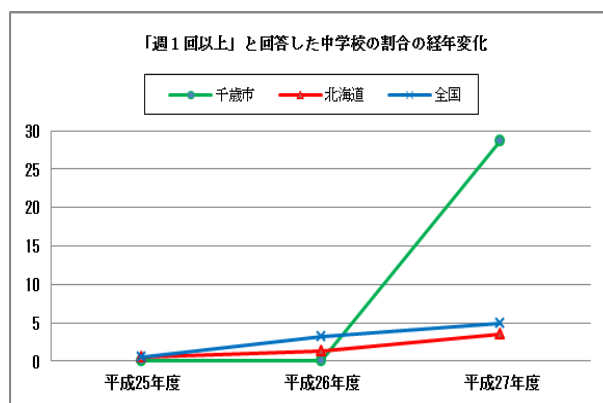
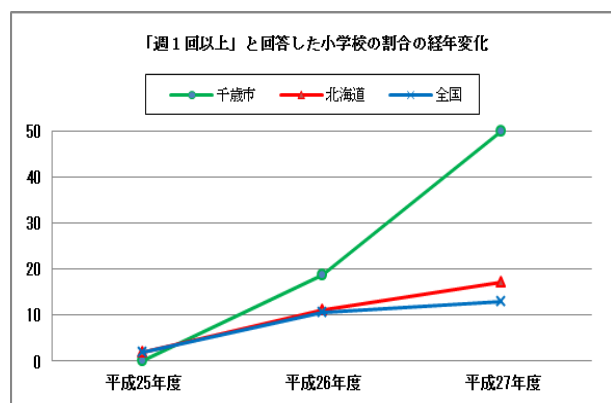
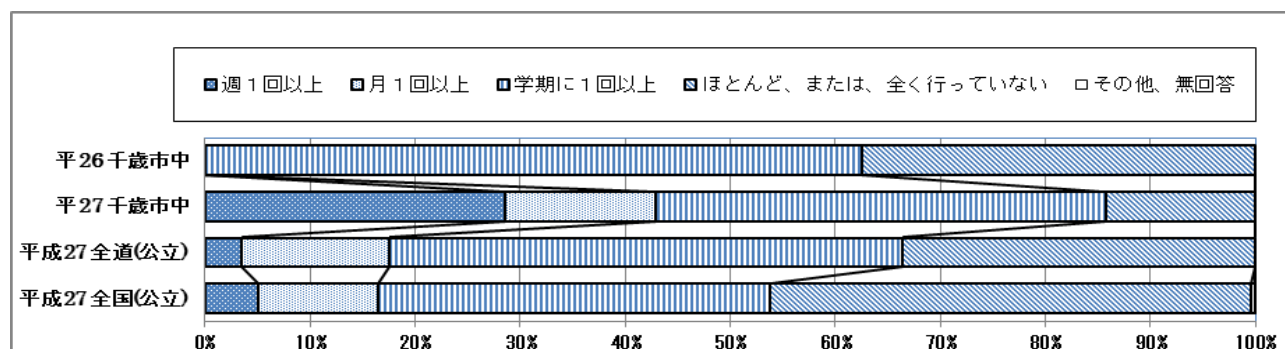
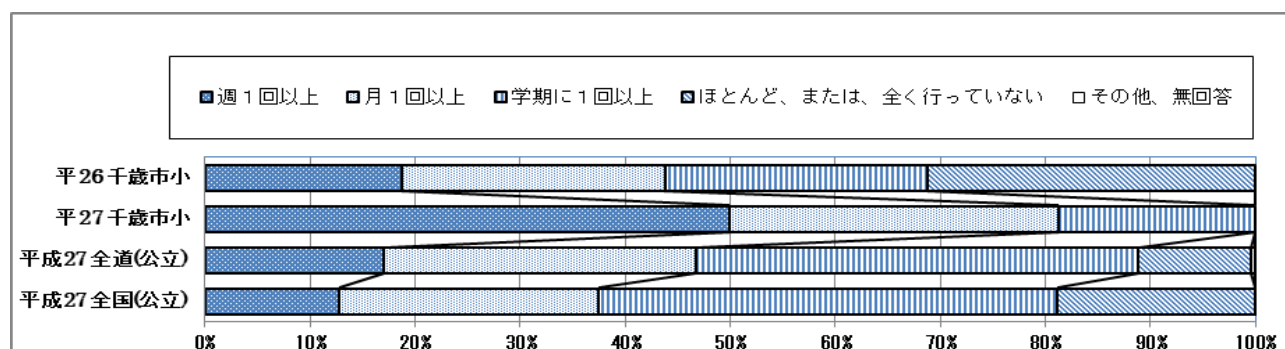
「よく行った」「どちらかといえば、よく行った」と回答した学校を合わせると、小学校、中学校ともに 100%である。

小学校では、「よく行った」と回答した学校が 75.0%と前年の 68.8%を上回る取組がされている。一方、中学校では前年より数値は下がったものの 85.7%であり、全国の 63.9%を大きく上回っている。

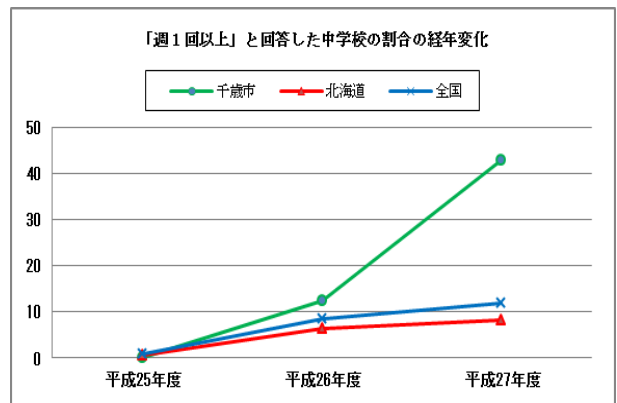
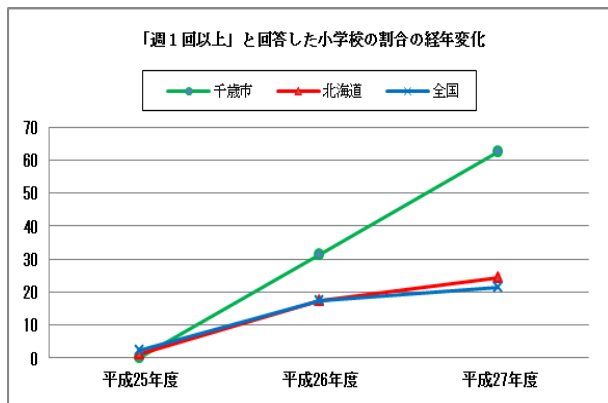
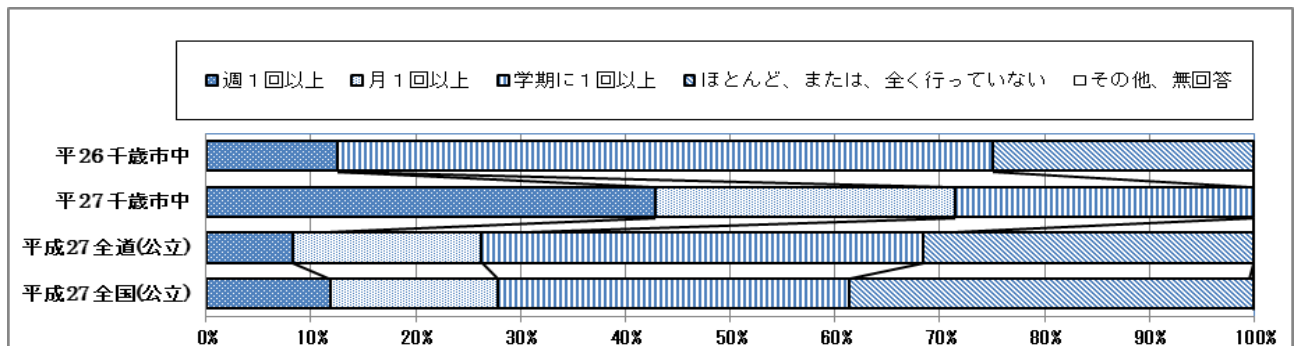
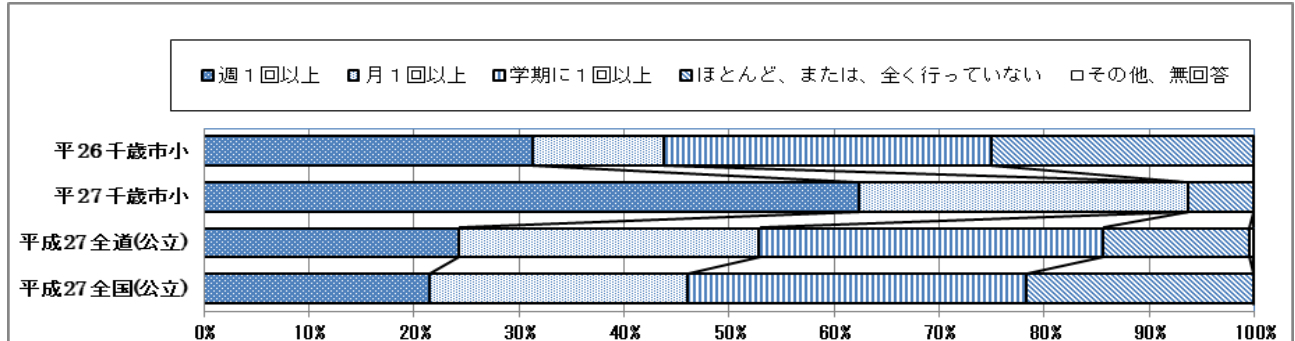
「学校教育基本計画」においても、「学習規律の維持を徹底している学校の割合」を 100%とする目標を掲げており、今後も児童生徒に学習の決まりのよさを理解させ、進級後、または中学校への進学後も基本的な学習規律は共通化されていることが重要であり、基礎・基本の定着や発展的な学習への取組時間が十分確保されるよう効率的・効果的な学習を推進することが必要である。

ICT機器の活用

質問番号	質問事項
47	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、国語の授業において、コンピューター等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行いましたか



質問番号	質問事項
48	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、算数（数学）の授業において、コンピューター等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）、電子黒板、実物投影机、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行いましたか



小学校・中学校ともに、全国に比べ大幅に上回っている。

平成26年度末をもって、市内全小中学校への電子黒板・実物投影机等の配備が完了し、平成27年度はより一層の取組が行われている。あわせて、平成27年度は小学校へのデジタル教科書の配備を終え、中学校は平成28年度配備予定である。

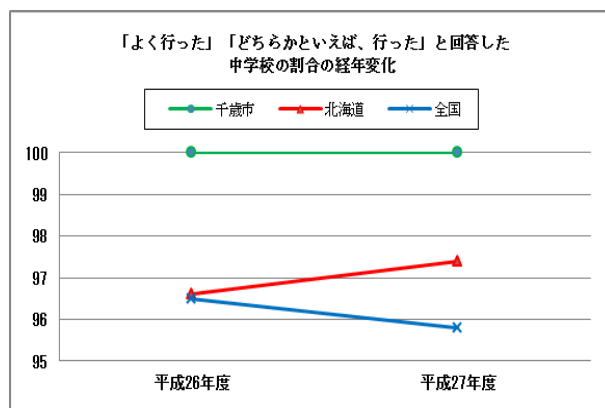
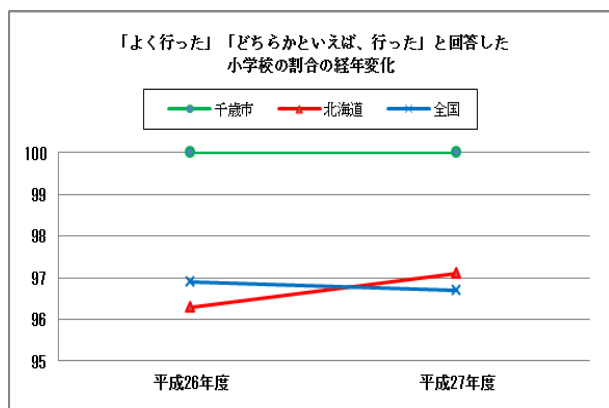
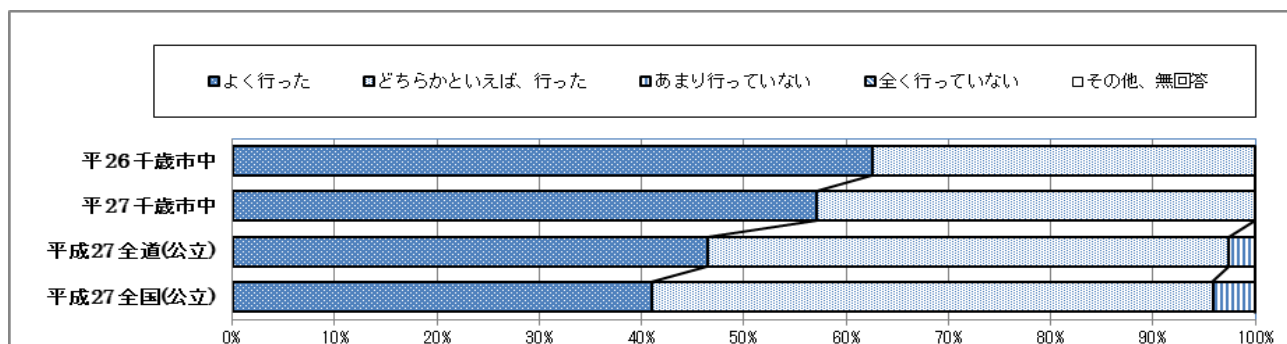
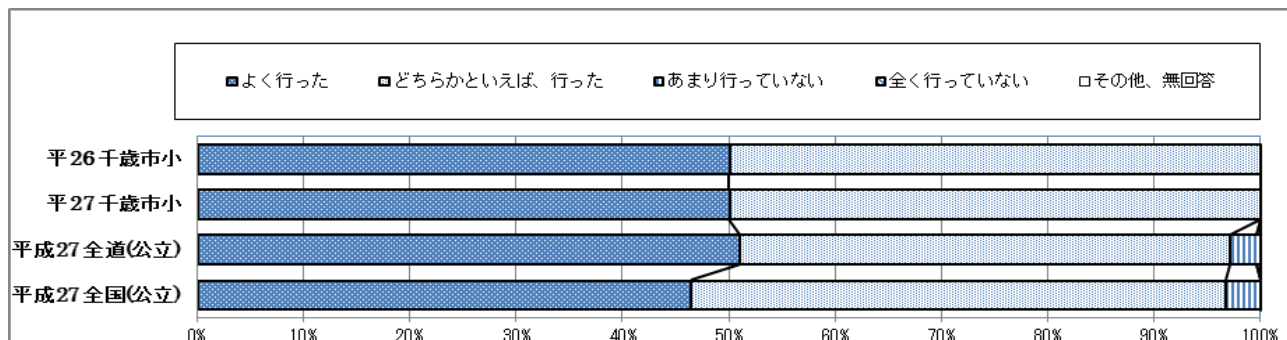
設問は前年度実績であり、「週1回以上」と回答した学校は、配備状況（初回配備校50.0%）にほぼ合致した数値となっている。

全ての学校で国語、算数（数学）のみならず他教科でもICT機器が日常的に授業で活用されており、千歳の教育の特徴となっている。

今後は、授業での有効的な活用方法等について校内外での研修の充実に取り組むことが必要である。

児童生徒のよさの評価

質問番号	質問事項
43	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学校生活の中で、児童（生徒）一人一人のよい点や可能性を見付け、児童（生徒）に伝えるなど積極的に評価しましたか。



小学校・中学校ともに全国を上回っており、肯定的回答が100%である。

中学校においては、昨年度より「よく行った」との回答が5.4ポイント減少し57.1%となっているが、全国（40.9%）に比べると積極的な取組が行われている。しかし、児童生徒質問紙において、千歳市の子どもたちの自尊感情の低さが明らかになっていることから、「学校教育基本計画」に示している「子どもの活動が見える場の創出：各学校の特色を生かし、動植物の世話や飼育など、子ども一人一人の自主的な活動が活発に展開される場を創り出したり、各種観察記録などを掲示し、努力の成果を認めるなど、子どもたちの活動を推進します」や「子どもの努力を認め褒める活動の推進：学習の成果や子供の活動の様子等の学年学級通信への掲載や校内での掲示などを通じて、努力の大切さを認め合う雰囲気醸成を図ります」等の具体策を講じながら、各学校では、それぞれの発達段階に応じた児童生徒の積極的な評価を確実に積み重ねていく必要がある。（*本設問は平成26年度から実施）